ベルクソンにおける選択と自由

内　山　　智　子

＜凡　例＞

1. ベルクソンの著作は全て P.U.F 版を用いた。略号は以下の通りである。

DI　*Essai sur les données immédiates de la conscience*
MM　*Matière et mémoire*
ES　*L'énergie spirituelle*
EC　*L'evolution créatrice*
PM　*La pensée et le mouvant*
DES　*Durée et simultanéité*
MR　*Les deux sources de la morale et de la religion*
Mé　*Mélanges*

2. テキスト中のイタリックで強調されている部分はそのままイタリックで示した。

3. 引用文中の（ ）内は引用者による説明である。

序

私たちの生活は、たとえば、外出に傘を持ってゆくかどうか、といった些細な事柄から、将来を左右する重大な決断まで、日々無数の選択で満ちている。そうした選択の連続である毎日の中で、私たちはいかにして様々な選択肢を描き出し、そのうちの一つを選んでいるのか。また、よりよい行動とは何であり、自由に生きるとはどのようなことを意味するのか。

自分の人生をよりよい自由なものにしてゆくためには、まずこうした問いに対する一定の答えを各々が得る必要があると思われる。本論文では、そうした問いに対して、19-20 世紀のフランスの代表的な哲学者、アンリ・ベルクソンの議論をもとに、一つの答えを提示することを目指す。

ベルクソンは、事実間の恒常的な法則性の解明を目標とする実証主義の影響下にあった当時のフランスで、意識に対する決定論的な法則の適用に強く反対し、生物の行動はそれ自身の自由な選択に任せられていると主張した。ベルクソンの理論は、哲学史上はむしろ少数派といえる「自由裁量 libre arbitre」[1]の立場に立つ理論であり、同時に大脳生理学や相対性理論等の現代に通じる科学的知識を踏まえて、精神主義的な立場から論陣を張った、数少ない哲学理論の一つである。その意味で、ベルクソンの理論は、現代に生きる私たちが自由な選択の観点から自分の精神と現実の世界との関係を考える上で、非常に有力な理論であるといえるだろう。

では、ベルクソンの理論は、いかにして生物による行動の選択や人間の精神的な自由を擁護しうるのか。この問いに答えを出すために、第一章ではまず、「選択の自由」と「自分の人格に基づいて行為する自由」の二つの自由概念を取り上げる。歴史的に自由の二側面をなしてきたこれらの概念は、ベルクソンの理論においてもそれぞれ別の著作で中心的に扱われており、それらの理論をいかに統合するかが、ベルクソンの哲学を研究する上でも大きな課題となっていた。この章では、「努力 effort」と「反省 réflexion」という概念を媒介に、これらの理論を結びつけ、一つの全体的な自由論を提示する。

次に第二章では、ベルクソンの理論における心身問題を、意志と行動の観点から考察する。ベルクソンは物理法則の因果関係と、精神と行為の因果関係を、外的因果 causalité externe と内的因果 causalité interne と呼んで区別したが、内的因果の原因については、それが無限に遡られることを見越して、分析不可能であるとする立場をとった[2]。では、内的因果における因果関係とはどのようなものなのか。この章では、意志のはたらきと行動の関係、および意志をもたらす原因の問題について考える。

第三章では、ベルクソンの持続理論を再考する。ベルクソンは反省的に対象化される以前の、ありのままの意識のあり方を「持続 durée」と呼び、記憶のはたらき mémoire がこの持続を作るとした[3]。蓄積された過去の記憶 souvenir が各々の人格を形成し、またその人格が行動の選択を左右するという意味で、ベルクソンの記憶理論は、自由の理論の基盤をなすものである。この章では、記憶の全体の不可分性と諸記憶の個別性の問題を、意識の「諸瞬間」の存在に注目して論じる。

第四章では、ベルクソンの主張する「過去の実在性」について、選択の自由の観点からその問題点を考えてゆく。ベルクソンは未来を含む時間を直線的に表すことには強く反対したが、過去を一連の規定された系列として考えることには寛容であり、むしろ自ら過去を直線的図式で表している箇所も少なくない。けれども、そのように一連の過去の決定性と実在性を主張することは、過去における選択の自由を否定することにはならないのだろうか。この章では、こうした問題に対し、『創造的進化』にみられる、進化の系統樹と個人の人生のアナロジーを用いて、一つの解答を示す。

第五章では、ベルクソンの知覚理論の問題点を「未来」という側面から考察する。ベルクソンは自由な選択や創造を支持する見地から「未来」や「可能なもの」の存在を否定した。他方で、知覚作用は、潜在的なものの一部を選択的に現勢化するはたらきとして定義されており、このような定義は、未だ知覚されていない潜在的なものの存在を要請しているといえる。ベルクソンの理論において、「未来」や「可能なもの」は存在するのか。この章ではこうした問題について考える。

最後に第六章では、ベルクソンの最晩年の著作である『道徳と宗教の二源泉』を視野に入れて、自由な行動を定義し、その諸条件を明らかにする。この章では、全ての人格が共有する普遍的な傾向を探り、道徳的な「善」や「喜び」が、「自由」に収束してゆくことをみる。

目　次

・第一章　自由の二側面
・第一節　『試論』における自由：人格の表現としての自由　……6
・第二節　『物質と記憶』における自由：選択の自由　……11
・第三節　二つの自由の統合　……18

・第二章　精神のはたらきと物質
・第一節　精神と物質の結合と区別　……25
・第二節　意志と意志のはたらき　……32

・第三章　持続における区別と融合
・第一節　持続の全体の融合　……39
・第二節　諸部分の区別　……45
・第三節　区別と融合の並存　……50

・第四章　過去における選択の自由
・第一節　未来の存在の否定　……55
・第二節　過去の実在と過去における自由　……57
・第三節　系統樹のアナロジー　……61

・第五章　潜在的なものの領域
・第一節　これから知覚される物質の領域　……66
・第二節　「可能なもの」と「未来」の批判　……73
・第三節　未来の具体的な知覚と未来の物質　……78

・第六章　自由な行動
・第一節　人格を形作る諸傾向　……82
・第二節　生命の傾向とエラン・ヴィタール　……85
・第三節　自由な行動　……89

・註　……94
・参考文献　……101

第一章　自由の二側面

第一節　『試論』における自由：人格の表現としての自由

伝統的に、自由の問題は「理性によって行為する自由」と「選択の自由」の二つの側面から論じられてきた。前者は「ロゴス（理性的意志）による情念の支配」というストア哲学の目標にその典型が見られるような、精神的な自由の側面であり、後者は善悪に関わる人間の行為選択と神の摂理の問題をめぐって、中世・近世を通じて、神学および哲学の議論の中で大きな位置を占めてきた、「自由裁量 libre arbitre」の側面である。

その第一の主著、『意識に直接与えられているものについての試論』（1889, 以下『試論』と略記）では自らの人格に基づいて行為する自由を論じ、第二の主著『物質と記憶』（1896）では諸々の行為の間で選択する自由を論じたベルクソンの議論にも、上述の二側面に類した自由概念の分離がみられる。

無論、ベルクソンが『試論』で提唱した自由は、ストア哲学が目標に掲げたような、普遍的な理性による情念の支配ではなく、むしろ、個人の深層の力の発露としての自由であった。けれども、第一の『試論』では、身体的な欲求や習慣ではなく人格の全体に従って行為する自由が述べられ、この著作では自由裁量についてはわずかに、それも批判的ともとれる仕方でしか言及されていないのに対し、第二の『物質と記憶』では、もっぱら行動[4]を選択する自由が論じられている点で、ベルクソンの議論にも、精神的な自由と選択の自由の乖離がみられるのである。

元来、選択の自由が支持される場合には、特定の行為を生じさせる決定論的な必然性は否定されるが、これは何らの必然性なく行為が生じるという偶然性につながる。単なる偶然は自由ではなく、自由な行為とはその原因となる十分な理由や意志によってもたらされるものであろう。しかし他方で、我々の人格ないし自我のあり方が特定の行為を必然的にもたらすと考えると、決定論に陥ることになる。選択の自由も人格に基づいて行為する自由も、共に自由の不可欠な要素であるにもかかわらず、これらは並び立たないように見えるのである。このことが、自由の議論の中では常に問題となってきた。

では、ベルクソンの議論においてもこうした問題は克服されず、二つの自由は別々に論じられているにすぎないのだろうか。しかしながら、後の発言などを鑑みるに[5]、『物質と記憶』は、『試論』の精神的な自由論を継承し、身体を用いた行動選択の場面へとこれを具体的に展開する目的で書かれたと思われる。

実際、反省 réflexion をもたらす努力 effort という概念は、これら二つの著作に共通するキータームであり、二つの自由論を統合する要であると思われるが、この点についてはこれまでほとんど指摘されてこなかった[6]。それゆえ、この章では、それらの概念に注目して、『試論』と『物質と記憶』の議論を結びつけ、精神的な自由と選択の自由を統合した一つの自由論を提示することを目指す。それによって、自由な行為とは何か、また、いかにしてそれが可能になるのか、という本論文の問題を解明することもできるであろう。

それでは、まず、『試論』における自由論をみてゆこう。

この著作は、その序によると、第三章で扱われている自由の問題を主題としており、自由の問題に直接関わらないように見える一章と二章も、元来、三章への導入として書かれたものであった。

その第三章は、大きく分けて、①物理的・心理的決定論批判、②二者択一の図式で表された自由裁量の批判、③予見可能性批判、④因果律批判からなっており、ここでの議論が主に決定論的法則性への批判に終始している印象は否めない。量子力学の確率的な性格を知る今日の我々には、意識の自由をエネルギー保存則のような物理法則と両立させようとするベルクソンの苦心はむしろ奇異に映るが、しかしレイシーも指摘するように、この最初の著作が書かれた時代には「普遍的な科学が今日より深刻に自由意志を脅かしていた」ことが斟酌されねばならないだろう[7]。後にベルクソンは当時の状況を回想して「私には自由が一つの事実と見えていた。他方で科学者が方法の規則として立てていた普遍的な決定論の主張は哲学者によって科学的なドグマとして広く受け入れられていた。人間の自由は自然の決定性と相容れるのか？私にとっては自由が疑うことのできない事実になっていたから、私は最初の著作でほとんどこれだけを考察した」（PM, 78-9）と述懐している。

実際、当時のフランスは、心的活動を観念連合によって説明しようとする連合心理学の影響が色濃い半面、意識の測定によって人間の心を科学的に研究しようとする実験心理学の勃興期にあった。すでにドイツでは刺激と感覚の法則で知られる E. H. ウェーバーの理論を発展させたフェヒナーが精神物理学を創始し、『試論』出版の十年前にはヴントが世界で初めての心理学実験室をライプチヒ大学に開設している。意識に対する人為的な分割や数量化を誤りと考えたベルクソンは、『試論』で連合心理学や精神物理学の手法を批判的に検討するが、『試論』の出版から約二十年後には、人間の行動を刺激に対する反応の関係で定式化しようとする行動主義心理学が提唱され、以後米国を中心とする心理学の主流となっていった。

そうした時代背景にあって、『試論』は意識の記号化・数量化に対する批判が

その大部分を占め、自由に関しても「言語や記号では表せないもの」「本質的に定義不可能なもの」といった消極的な定義が目立つ（Cf. DI, 165-167）。元来、ベルクソンは、「自由は確認される事実の中でも最も明白な事実」（DI, 165）であり、自由に対する異論は「非延長を延長に、質を量に不当に翻訳した」ために生じた混乱であって、「ひとたびこの混乱が消散されれば…〔中略〕…消滅してしまうだろう」（DI, vii-viii）と考えていた。

そのため、『試論』は様々な角度から意識の数量化を論駁しようとするのだが、しかしそうした論証の是非を検討することはここでの目的ではない。意識は数量化できないということ、痛い、苦しい、嬉しいといった我々の意識状態は数値では表せず、何らかの法則によって完全にその変化を計算できるようなものでもないということは、今日では改めて主張する必要のないことであろう。本論文にとって重要なのは、むしろ、意識に対する決定論的法則の支配が退けられたとき、どのような自由が現れてくるのか、いいかえれば、ベルクソンは積極的には自由をどのように定義するのか、という点である。

先に述べたとおり、『試論』における自由の定義は一見明瞭でない。けれども、しばしば指摘されるように、「行為が人格の全体から発し、それを表現する場合に…〔中略〕…我々は自由なのである」（DI, 129）「自我から、そしてただ自我のみから発する全ての行為を自由と呼ぶなら、人格のしるしを帯びた行為は真に自由である。なぜなら、我々の自我だけがその行為の発動権 paternité を主張するだろうからである」（DI, 130）といった叙述に、その積極的な定式化を見出すことができよう。つまり、『試論』における自由な行為とは、外的な強制に因らず、ただ各々の自我から発する行為、各々の人格を完全に表現するような行為であると考えられる。

実際、日本語においても「自由」の語義が「自らに由る」ことにあるように、こうした定義はこの語に与えられる一般的な意味を表しているといえるだろう。では、その自由な行為が帰属させられるところの、我々の自我 moi や人格 personnalité とは何か。

『試論』でベルクソンは自我および人格について次のように述べている。

> 内的な自我、感じたり情熱を燃やしたり、熟考したり決断したりする自我は、その諸状態および諸変容が内密に浸透し合っているような、一つの力 force である…〔中略〕…このより深層の自我は、表層の自我とただ一つの同じ人格をなしている。（DI, 93）

引用から、我々の経験する意識の諸状態が互いに浸透し合って、我々の自我

および人格を作るとされることが読み取れる。

「メロディのような有機化 organization」「総合 syntèse」「融合 fusion」といった言葉で表現される、この意識の諸状態の相互浸透については、これを不可解とする批判も多い[8]。けれども、自我 moi や私 je というものが単一のものとしてあること、そして過去の経験が今のその「私」に影響し、これを形成していることは、誰しも認めるところではないだろうか。ベルクソンが「相互浸透」や「有機化」といった言葉で表そうとするのは、そうした自我の単一性と、経験の一つ一つがその自我に影響を与え、不断に変容させるという事態にほかならない。そして、ベルクソンは、上の引用にみられるように、その諸状態が相互浸透した自我を、意識の深層にある一つの「力」とみなすのである。

実際、人間は同じ状況に置かれても各人各様の反応を示すものであり、ある人間のとる行動に共通するパターンが、その人の個性と呼ばれるものであろう。ベルクソンは、各々をそうした個性的な行動へ向かわせる潜在的な力や傾向を想定し、過去の経験がそれを形成すると考えたといえる[9]。

この力や傾向という人格の側面は、さらに「意志 volonté」と呼ばれることがある。たとえば『試論』では、時に知性に対立する深層の自我の力が意志と呼ばれる。

> 意志の突然の介入は、我々の知性が予感していたクーデタのようなものであって、知性は正規の熟考の手続きを通して、予めそれを合法化する。(DI, 119)

> 表面へと再浮上するのは奥底の自我である。抗しがたい圧力に屈して表皮が裂ける。つまり、この自我の深層において…〔中略〕…無意識であったわけでは全くないにしても、我々が注意しようと欲しなかった ne vouloir pas prendre garde 感情や観念の沸騰が起こるのである。(DI, 127)

また『試論』から 25 年後の 1914 年に「人格の問題」と題してエディンバラ大学で行われた特別講義の中で、ベルクソンは人格を「過去の記憶の全体」と「未来へ向かう意志」の二側面で定義した。

> 人間の人格の二つの本質的側面とは、第一に記憶 Memory であり、これは無意識の過去の全体を包括し、そのうちの利用できる部分をいつでも意識に戻せるようにしています。そして、第二に意志 Will であり、これは未来に向かって不断に緊張しています。(Mé, 1065)

こうした叙述から、人格とは、過去の意識状態の集積された全体からなるが、これは単なる経験の集合ではなく、諸々の記憶が相互に融合して、特定の行動へ傾く一つの力、各々の個性として行動に表れる個人的な傾向を形成していると要約される[10]。

ただし、ベルクソンは、人格の中に、全体と融合しない局所的な傾向をみとめる。例として挙げられているのは、反復により身体に刻まれた習慣の力や、押し付けられた教育や暗示の力、状況によって引き起こされた一時的な激情などである[11]。統一的な人格が「深層の自我」と呼ばれるのに対し、こうした部分的な傾向は「表層の自我」に位置付けられる。そして、これらの表層の傾向もまた、ベルクソンの議論では、真に自由な行為を阻む、外的な強制力に含まれる。

無論、部分的な傾向も人格の一部である以上、人格に由来する行為を自由な行為とするベルクソンの立場からは、こうした部分的な傾向に従う行為もある程度は自由とされる。が、自由の程度はその行為をもたらした部分的な傾向が人格全体とどの程度合致するかに依存するのであって、完全に人格全体と合致するような真の自由行為は稀なものとされる（Cf. DI, 126）。

ここまで、『試論』の自由論と人格の概念を概略してきたが、では、度合いの自由論ともいうべきこうした『試論』のテーゼにおいて、自由の度合いを選択する余地は我々に与えられているのだろうか。いいかえれば、いかにして我々はより人格の全体に合致した行為を選択できるようになるのか。

先にも述べたように、『試論』ではこの点について明らかにされていない。ただ、「深い反省によって我々自身を把握するとき」（DI, 174）や、「強い反省の努力によって我々自身に立ち戻るとき」（DI, 175）には、我々は自由であると述べられているに過ぎない。

後に「私には自由が一つの事実と見えていた」と繰り返し語られるとおり、ベルクソンにとって自由は直観的に知られる不可疑の事実であった。けれども、『試論』におけるその自由とは、「行為がただ人格から発する」「自我のみが行為の発動権を主張する」といった、いわば外的な強制力の不在としての自由であって、自由裁量の側面は主題化されていないことが分かる。

しかしながら、自由とはそのような定義だけで十分なのだろうか。「行為がただ人格から発する」ことが保証されるとしても、各々の人格なり自我なりのあり方が必然的に一定の行為を生じさせるのであれば、選択の自由は否定されてしまうのではないか。

このような疑問を予想するように、ベルクソンは、「（行為が人格から発する

とき）我々は自分の性格 caractère の全能的な影響に屈するなどと主張してもむだである。我々の性格はやはり我々なのだから」（DI, 129）と述べる。

当然ながらこうした論述は、ベルクソンの自由論を自由裁量の欠如した一種の決定論とみる解釈を生み出した。その最初のものとしては、『試論』出版の翌年に『哲学雑誌』に掲載された G.ブロの書評があげられる。ブロはベルクソンの自由とは自我の全体性から行為が必然的に生じる一種の決定論であるとして、これを非反省的で動物的な自発性と同一視した[12]。そのほか、R.E.ラコンブや M.フェナールも『試論』におけるベルクソンの自由論を自由裁量の欠けた決定論であると批判する。

> ベルクソンが自由と呼ぶような行動においては、そもそも自由裁量を語ることができない。そうした行動は…〔中略〕…孤立したプロセスの結果ではなく我々の人格全体を表現するがゆえに自由だとされる。だとすればそれは、平凡な行為において外的に強制されている表層の決定論を打ち破る、我々の自由のしるしを帯びた、より深く、より完全な、一つの決定論であるように思われる[13]。

> ベルクソンの理論が引き起こす最大の問題は、それが真の決定論に等しいということだ。性格の全能的な影響のもとにおける行為といえども、決定されたものであることには変わりがない…〔中略〕…それが自由とみなされる唯一の理由は、外的な要因の影響を免れているということなのだ[14]。

では、ベルクソンの理論には本当に「選択の自由」が欠けているのだろうか。しかしながら、『試論』がそうした批判を受ける一方で、第二の『物質と記憶』は、明らかに行動の選択に生物の自由を見出している。次節では『物質と記憶』に考察の対象を移して、その点を検討することにしたい。

第二節　『物質と記憶』における自由：選択の自由

ベルクソンは、『試論』を書き進めるうちに心身問題にぶつかり、その問題を追究した結果が『物質と記憶』という著作になったと述べている（Cf. PM, 79）。実際、『物質と記憶』は『身体の精神に対する関係についての試論』というその副題が示すように、ベルクソンの心身論であり、1911 年に書かれたその『第七版の序文』によれば、ベルクソンは「この問題を解く確実な手がかりを事実に求めた」（MM, 5）という。ただし、『試論』における事実 fait が「意識に直接

与えられた」経験的な事実を意味していたのに対して、『物質と記憶』の初めの三つの章では、解剖学、生理学、心理学といった、いわば科学的な事実が援用される。

意識の数量化を批判した『試論』によってベルクソンは「反知性主義」「反科学主義」の名で呼ばれることにもなったが[15]、こうしたその後の著作における論述は、ベルクソンの批判があくまでも「非延長と延長、質と量の不当な混同」に向けられており、その哲学が実証科学の手法そのものを否定する立場にはなかったことを示しているだろう[16]。

ベルクソンは『物質と記憶』で心身問題を論じるにあたり、この問題を生物学的な観点に基づいて考えようとした。「(生物の選択の自由という）非決定性を原則的事実としてここから出発することにしよう。この非決定性を前提するならば、ここから、意識された知覚がありうること、というよりもむしろ（生存を有利にするために)、なければならないことが導き出せないかどうか探ってみよう」（MM, 27）とベルクソンは提案する。

こうした叙述から、『物質と記憶』も、『試論』と同様に、生物の持つ自由を確実なものとみなし、そうした自由の存在を論証しようとしていることが読み取れる。その意味で『試論』と『物質と記憶』の間に根本的な態度の変更はなく、むしろ自由に対する同じ確信が具体的な行動の場面に適用され、そのため、より客観的な事実に基づいた議論が展開されることになったとみられる。

しかしながら、そうした自由の問題領域の移行に伴い、主張される自由の性質も大きく変化している。『試論』が決定論的法則からの自我の独立性を論じていたのに対し、『物質と記憶』では行動を選択する自由が論じられるのである。以下ではそうした『物質と記憶』の議論を再考しながら、その議論を『試論』の自由論に結びつけることを試みる。

ベルクソンは行動の選択に関し、選択のためには予め可能な行動が意識されている必要があるとして[17]、複数の選択肢の意識的な「予描 représentation anticipée」（EC, 97）を選択の条件とした。そして、事物の知覚[18]は、すでにこの可能な行動の予描にほかならないといわれる。というのは、ベルクソンの考えでは、明瞭な知覚にはすでに過去の記憶が投影されており、これは過去の経験を参照して、その対象への可能な関わり方を予測するものにほかならないからである。

実際、我々は机や椅子やコップといった身の回りの品々を、今初めて見るように見ているのではなく、無意識のうちにそこに過去の記憶を投影して、ものを書く、座る、水を飲む、といった用途を重ねて知覚しているであろう。このことは、むしろ逆に、今初めて見るように事物を見ることがいかに困難である

かを考えれば、自明であると思われる。現在の知覚に重ねられるそうした意味や用途は、過去の経験の想起であると同時に、それらの事物に対する未来の可能な行動の素描でもあり、「対象はただ目の前に現れるだけで、我々にある行動をするように促す」（MM, 103）といえる。

とはいえ、知覚に含まれるこのような漠然とした諸行動の予測と、たとえば「外出するか、それとも家に残るか」といった明確な選択肢の間には隔たりがあることは事実である。後の場合のような概念的な比較がどのようにして可能になるのかは後に論じるが、さしあたり、以下の点は認められるのではないだろうか。すなわち、周囲の事物を明瞭に知覚するということは、過去の記憶に照らしてそれらの価値や有用性を認識するということであり、こうした知覚への記憶の投影によって、まず事物に対する選択的な行動は可能になっているのである。

ここで、この「過去の記憶が可能な行動の選択肢を描き出す」というテーゼによって、前節で述べた『試論』の、「過去の記憶の全体である人格が、各々を個性的な行動に向かわせる」というテーゼは、具体的な行動の場面で基礎付けられるとみることができる。

しかし、そのようにして記憶という概念を媒介に人格と行動の選択肢を結びつけただけでは、「人格に基づいて行為する自由」はある程度保証されるにしても、「いかにしてより自由な行為を選択するのか」という問題は不明瞭なままである。

概して、選択の自由を支持する『物質と記憶』の行動理論は、人格との関係では論じられておらず、反対に、人格に基づいて行為する自由を論じた『試論』には、より自由な行為を選択するための方法論がない。そのため、これら二つの自由論の間の乖離がこれまで問題となってきた。先述のように、この二つの自由の乖離は、ベルクソンの哲学を研究する上で問題となるのみならず、偶然性と必然性の対立という、自由の根本問題に関わっているのである。

けれども、記憶の想起を論じた『物質と記憶』の第三章は、精神的な自由の度合いと行動の選択がどのように結びつくかについて、一つの手がかりを与えてくれるように思われる。そこで、以下ではまず、記憶がどのようにして想起され、知覚に投影されるのかを、『物質と記憶』の第三章に即してみてゆくことにしたい。

ベルクソンは、生物が自らの行動を選択するとすれば、より有効な行動を選択するために過去の経験が参照されなければならず、したがって、過去の全ての記憶が潜在的に保存されていなければならないと主張する（Cf. MM, 67）。その上でベルクソンは、脳の分子運動そのほかの「現在の身体の態勢 attitude」

（MM, 104）が、全ての記憶の中から知覚に重ねられるべき過去のイマージュの領域を限定するとみなす。

> 我々の過去のイマージュの総体が現に残存しているとしても、やはり現在の知覚と類似の表象が、選ばれる可能性のある全ての表象の中から実際に*選ばれ*なければならない。達成された運動や、単に生まれつつある運動が、この選別の準備をする。あるいは、少なくとも、我々がつみとるべきイマージュの領域を限定する。（MM, 103）

現在の身体の態勢は、達成された運動であると同時に、特にその脳の現象は、これから達成されようとしている運動の準備段階である。引用文中の「生まれつつある運動 mouvements naissants」とは、実際の行動がとられる以前の、この脳や神経回路内における諸行動の準備状態を指している。

また、引用では知覚や記憶が「イマージュ image」と呼ばれている。周知のように、このイマージュという概念はベルクソンの理論の中でも特異性の目立つ概念であるが、しかしその詳細は後の章で論じることにして、ここではただこのイマージュという言葉を、その最も広い意味で、「感官を開けば知覚されるし、閉じれば知覚されない」（MM, 11）知覚の内容の全てととらえるにとどめておきたい。

引用から明らかなように、保存されている知覚内容のどれが想起されるかを限定するのは、現在の身体の態勢であるとされる。つまり「身体がある態勢を再び取るとそこに過去が浸入してくる。いいかえれば、過去の知覚とつながる脳の現象を再現することで身体は記憶に現在との接点を提供する」（MM, 253）といわれる。

脳は、たとえば刻印のような形で物理的に記憶を保存しているのではなく、過去の記憶は全て潜在的な意識としてそれ自体で残存し、脳の状態はその中のどの記憶が想起されて意識的になるかを決める基準となるのに過ぎない。これは『物質と記憶』の中心テーゼであり、記憶と脳の関係を衣服とそれをかける鉤にたとえたベルクソンの比喩はつとに有名である。

意識内容が脳の状態を含む身体の状態と結びついているということは、たとえば忘れてしまった考えを思い出すために、それを考えていた時と同じ姿勢をとってみる、といった経験から了解されるのではないだろうか。ベルクソンは記憶を「拡がりを占めないもの」、脳の状態を「拡がりを占めるもの」として区別するが、記憶はそれが知覚された際と類似した身体の態勢が再現されると、その身体の態勢の類似性を媒介にして、再び意識に上ってくると考えた。付言

するなら、ここでもベルクソンはやはり、現在の状況に役立つ記憶だけが意識されねばならない、という生存上の必要性から、こうした記憶の再現の仕組みを説明している（Cf. MM, 157）。

ところで、脳や身体の状態は、外界からの刺激に反応して随時変化するものであるが、では、記憶の想起は、それらの状態を介して外界の状況だけに依存するのだろうか。

この点について『物質と記憶』は、外的な要因だけではなく、関連する記憶を呼び起こして知覚に投影する「努力 effort」という内的な要因を挙げている。

> 通常、過去の流れをさかのぼり、現在と関係しうる特定の既知の個人的 personnelle な記憶イマージュを見つけ出すためには、ある努力が必要である。この努力によって我々は、我々の知覚が我々をそちらに傾ける行動から自らを解放する。（MM, 103）

ベルクソンは知覚に記憶を投影する努力が強まるほど知覚はより個人的な記憶を反映して豊かになり、反対にこの努力が弛緩するほど単純で平凡な banal 形をとると述べる（Cf. MM, 188）。

このことは『物質と記憶』の第二章で次のような図を用いて説明される（MM, 115）。

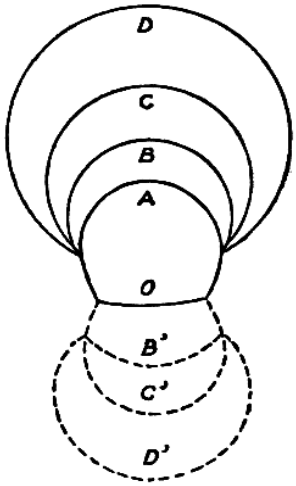

図 1

図の上部の、実線で表される弧 A、B、C、D はより大きな努力に対応して知覚に投影される、より多くの記憶を表している。弧 O は対象の知覚を、弧 A はその知覚に最も直接的に結びついた記憶を表す。記憶 A と知覚 O が結びつい

て一つの環をなしているのは、知覚とそこに投影される記憶が不可分であることを示している。図の下部の点線で表される弧 B’、C’、D’ はより多くの記憶が反映されて豊かになった知覚を表す。

実際、知覚の内容が主体的な精神のはたらき方によって変わるということは、我々の経験からしても自明であるように思われる。精神が弛緩しているときには、何かを見ていても自分自身その知覚に気付かないような場合があり、また、身体を含むその場の状況に何ら変化がなくても、精神的な集中力次第でそれらが深い意味を持って認識されてくる場合もある。このような体験はおそらく、ベルクソンの理論によらずとも日常的なものであろう。

無論、主体の側が全くそうした努力をしなくても、外的な事物の側の刺激が多くの記憶を呼び起こす場合もある。けれども、ベルクソンは、事物の側の刺激によって記憶が受動的に想起される場合と、主体の側の注意によって記憶が意志的に想起される場合が[19]、主観的には明確に区別されることを指摘する（Cf. MM, 109-110）。努力は後者の意志的な想起の主観的な特徴であり、いいかえれば、意志的に記憶を呼び起こすはたらきは、主観的には「努力」として経験されているといえる。

ここで、こうしたそのつどの努力が知覚への記憶の投影を左右するとすれば、この「努力」という概念によって、前述の、いかにしてより自由な行動を選択するのか、という問題が明らかになるのではないだろうか。

というのは、記憶の総体が人格を形成し、人格に基づく行為ほど自由であるとする『試論』のテーゼに、記憶を投影する努力が強まるほど知覚に個人的な記憶が反映されるという『物質と記憶』のテーゼを結びつけるなら、ここから、記憶を投影する努力が強まるほど、自由な行動が可能になるという関係が導き出されるからである。以下ではこの新たに導出した関係を明確にするために、具体的な場面にこれをあてはめて考えてみることにしたい[20]。

今、目を上げると窓の外に良く晴れた空が知覚されたとしよう。私が机に向かい続けて疲れているなら、その知覚は私に、外の空気の爽やかさや、その中で手足を伸ばす快さを直ちに連想させるかもしれない。これは言語的な概念は伴わないにせよ、外出という一つの選択肢の提示でもある。もっと多くの選択肢を提示するためには、より多くの記憶を投影しなければならず、そのための努力が要る。つまり、未来の行動についてよく考えるということは、実際には、関連するより多くの記憶を想起して知覚に投影する精神的な努力によって成り立つのである。

仮に、私が戸外の空気に触れる快さのみを思い、それ以上行動について考えないとすれば、いいかえれば、記憶を投影する努力を払わないとすれば、その

行動は最も価値のある有用な行動として意識されるだろう。このような、努力をほとんど伴わない、現在の身体の状態に直結した知覚は、いわば最も単純で平凡な知覚であり、このレベルで行われる行為はほぼ反射的な行為といえる。けれども、もし私がよく考え、その結果自分がやりかけている作業の進み具合や、それが間に合わなかった場合の不都合などが思い起こされるなら、現在の作業を続けるという選択肢が、外出という選択肢を上回る重要性をもって意識されるだろう。

したがって、どのような記憶が呼び起こされるかは基本的にその場の状況に依存するが、しかし、どの程度記憶が呼び起こされて知覚に投影されるかは、内的な努力にかかっているといえる。上の例では、記憶を呼び起こして知覚に投影する努力を払うことが、外出という選択肢から作業の続行という選択肢へ価値の比重を移すことになったように、どの行動が最大の価値を持つものとして現れるかも、この努力の度合いと、どこでその努力を打ち切るかに依存して決まるといえよう。

この場合、ある一定の努力の度合いでは、必然的にある一定の行動が最大の価値を持つものとして現れることになるが、しかしまた、ほかの選択肢を選ぶ可能性は常に開かれているだろう。なぜなら、我々は、努力の度合いを任意に変化させることで、ほかの選択肢が最も重みを持つ度合いへ移行できるからである。この点に関し、たとえば『講義録』には次のような言葉が見られる。「我々は最も強い動機に従うと考えられるが、しかし、動機の強さを作るのは我々であり、まさにこの点に我々の自由は存するのだ。繰り返せば、我々の自由とは、様々な動機に対し、我々自身の在り方や思考の仕方や個性や徳性に全的に依存した価値を付与する能力にあるのだ」[21]。

このように考えると、行為を選択する自由とは、固定的な選択肢の間で決定する自由というよりも、むしろ記憶を知覚に投影する努力の度合いを増減することで、選択肢に付与される意味や価値を左右する自由であると結論される。

ただし、可能な行動についてよく考えるということは、記憶を想起して知覚に投影する努力によってのみ成り立つのではない。先にも触れたように、「外出するか、それとも家に残るか」といった明確な概念で選択肢を意識することができなければ、行動の選択肢は諸可能性についての漠然とした知覚以上のものではありえない。したがって、ここにはまず、諸可能性を言語その他の明確な記号概念に置き換えて同時に把握する能力、『試論』でベルクソンが「知性 intelligence」の能力と呼んだものが必要となる（Cf. DI, 73）。この点に関して『講義録』には以下のような記述がみられる。「動機と動機を比べるのは知性である。…〔中略〕…比較する能力とは知性の能力であって、実際、知性のない

ところには意志も存在し得ないのだ」[22]。

つまり、記憶を想起して知覚に投影する努力が知性の能力と組み合わされて初めて、選択肢を比較検討する作業、いわば「熟考 délibération」や「反省 réflexion」と呼ばれる作業が成り立ち、この反省の過程を通じて選択肢はその意味や価値を変えてゆくことになる。我々人間はこの反省による選択肢の意味の深化によって、反射的なレベルで行為することを免れ、選択の自由と共に、人格に基づいて行為する自由を得ていると結論されよう。

記憶のはたらきと反省、そして自由の三つの度合いが結ばれていることは、次のようなベルクソンの言葉によって示唆される。

> 生の物質 matière brute と、最も反省をなしうる精神 l'esprit le plus capable de réflexion との間には、記憶のはたらきのあらゆる強さ、つまり、自由のあらゆる度合いが存在する。(MM, 250)

引用から、記憶のはたらきは、それが強まるほど、より深い反省を可能にし、またこれらのはたらき、つまり、想起を伴った選択肢の比較検討によって精神はより自由になることが読み取れる。次節では、こうした『試論』と『物質と記憶』の自由論の関係をさらに検討する。

第三節　二つの自由の統合

前節では『試論』と『物質と記憶』の自由論を統合し、記憶を投影し行動について反省する努力の度合いが、人格の表れの度合いと行動の選択につながり、これらがまた結果的に自由の度合いを左右することを帰結した。

記憶を知覚に投影する努力によって、我々はたとえば前節の図 1 に描かれた中心の小さな円から外側の大きな円へと知覚を拡張することができるとされる。ベルクソンはここに投影 projection と反省 réflexion という言葉の類縁関係を見出している。「語源的な意味では、*反省・反射 réflexion* は、対象と同一か、類似したイマージュの…〔中略〕…外界への投影・投射 projection なのである」(MM, 112)

自由の度合いを能動的に変化させるこうした方法論は『試論』では未だ明確になっていなかった。けれども、『試論』がしばしば自由裁量を欠いた決定論とみなされるのは、こうした事実に加えて、この著作が一般的な自由裁量の支持者たちの提示する、「二つの可能な選択肢とその前で迷っている中立的な自我」という図式を批判しているためでもある。

では、『試論』の議論は、本当に「自由裁量」を批判するものなのだろうか。また、前節で導出したような自由論が「人格に基づいて行為する自由」と「選択の自由」を矛盾なく統合するとすれば、その理論は純粋な偶然でも決定論的必然性でもない自由を解明するのだろうか。

まずは『試論』における、「自由裁量」の図式に対する批判を検討しておこう。この議論は『試論』の第三章で展開されている。

その箇所でベルクソンは、意識の進展を記号で表現する誤りを強く批判し、立場的には自らに与するはずの自由の擁護者たちの見解までも批判する。「別の行動も同じように可能であった」と主張する自由の擁護者たちは、ある行動 X がためらいつつ果たされたとき、対立肢を前に迷っていた段階 O では未だどちらの行動も可能であったと主張する（DI, 133）。

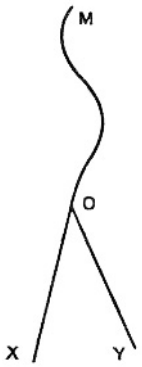

図 2

図において X や Y で表されるのは、たとえば「外出する」「外出しない」といった対立的な行動の実現であり、曲線 MO はその二つの行動への対立的傾向の間で迷う一連の心的状態の経過を表現している。

自由裁量が擁護される場合、行為者は二つの可能な選択肢への傾きの間で迷いつつ、O の時点で心を決め、X もしくは Y の実現へ進むとされるが、ベルクソンはこの同じ図式に対して決定論の立場からも「実際に X という行動が果たされたなら、O 点に位置付けられるのはどちらでもかまわない活動性などではなく、ためらいという見かけにもかかわらず予め OX の方に向けられていた活動性である」（DI, 134）と反論しうると主張する。

このように、ベルクソンは、等しく可能な選択肢の間で決定する「無差別の自由」や、純然たる偶然を排斥し、果たされた行動はその行動が果たされるだけの十分な理由が存在したことを遡及的に証明すると考える[23]。こうした見解から、先のような二者択一の図式はかえって決定論的解釈を導く有害なものとして批判される[24]。というのも、そうした図式は未来の行動を記号で表すこと

によって、未だ果たされていない未来を、すでに果たされた行動にすりかえてしまうからである。

では、こうした図式への批判と、先に考察した、「選択のためには行動の選択肢が予め意識されていることが必要である」とする『物質と記憶』のテーゼは矛盾しないのだろうか。

明らかに、それらは以下の理由で矛盾しない。すなわち、自由裁量の図式が、時間の継起を直線で表した上でその線上の一点を現在とみなすのに対し、『物質と記憶』が論じる行動の選択肢は、あくまでも現在の知覚の中にある。つまり、ベルクソンの場合、行動の選択は未来の存在を認めずに論じられるのであって、先のような図式に対するベルクソンの批判も、自由裁量そのものではなく、この相違点に向けられていたと考えられるのである。

実際、『試論』でもベルクソンは「現在の中の未来の前形成 préformation」（DI, 158）という言葉で、選択のための可能な行動の予描に言及している。この前形成とは、「次に来るものについての漠然とした観念」（DI, 158）であり、「我々が現在その観念を持っている未来の行動は、実現可能と考えられているが、実現済みのものとして現れているわけではなく、思いとどまるひまもあることがはっきりと感じられる」（DI, 159）といわれることから、こうした前形成は、我々に「思いとどまる」という選択肢を与える予期的表象の役割を果たすと考えられる。したがって、ここには『物質と記憶』の行動選択理論の萌芽を読み取ることができよう。

ここまで、『試論』と『物質と記憶』の自由論を結びつけるために、それらの間の見かけ上の矛盾点を解消してきた。とはいえ、「人格に基づいて行動する自由」と「自由裁量」の統合を直接的に論じた箇所は、二つの著作のどこにも、またその後の著作の中にも見出せない。それでは、ベルクソン自身が自由裁量と人格的な自由の関係について述べたテキストはないのだろうか。

『物質と記憶』から約 15 年後の 1910 年のフランス哲学会で、「哲学語彙辞典」編纂のためにその「自由 liberté」という項目が議論された際、ベルクソンは自らの考える自由を以下のように定義した。

> *自由*という言葉は私にとって自由と自由裁量という二つの語に人が慣習的に与える意味の中間の意味を持っています。一面では自由とは完全に自分自身でいること、自己に合致して行動することにあると思われ、これはある程度哲学者らの《精神的な自由 liberté morale》、人格 personne の、自分以外のあらゆるものからの独立ということになるでしょう。しかしそれが自由の全てではありません。というのも私の挙げたような独立が常に精

神的な性格を持つわけではないからです。しかも自由は結果がそれを*必然的に*決定する原因に依存するように自己に依存することにあるわけではありません。そこで私は《自由裁量》の意味へ戻ります。(Mé, 833)

以下さらに続くベルクソンの記述からは、ベルクソンが「精神的な自由」と「自由裁量」の双方の意味を含み、かつそれらと完全には一致しない自らの自由概念を定義するために苦心する様子が読み取れる。結局ここでベルクソンは、「私の理解する自由はこれら二つの間に、ただし双方から等しい距離にではなく、どちらかというと自由裁量の寄りにあります」と述べて考察を結んでいる。

引用の中でベルクソンは、自らの考える自由を、「ある程度は」哲学者らの言うところの「精神的な自由 liberté morale」と同じものだと述べている。いうまでもなく、この形容詞 moral(e)には「道徳的な」という意味があるが、しかしベルクソン自身「ある程度は」という言葉で認めているように、各々の人格を行為に反映させるというベルクソンの自由は、社会的な義務や規範という意味での道徳には必ずしも合致しないであろう。というのは、社会的に課せられた義務や規範に従うことを個々の人格が肯定しない場合も往々にして考えられるからである[25]。

このようにして既存の「精神的/道徳的な自由」から距離を取る一方、ベルクソンは上で引用した文章に続けて、「しかしながら、私は、この自由裁量という意味を完全に受け入れるわけでもありません。なぜなら、自由裁量は対立肢の等可能性 l'egale possibilité des deux contraires というテーゼを暗黙裡に含んでおり、時間の本質を著しく歪めることなしには、そのようなテーゼを立てることはできないからです」(Mé, 834) と述べ、一般的な自由裁量の見解からも、自らの立場を区別している。

「無差別の自由」とも言われるこの対立肢の等可能性のテーゼが、『試論』においてもベルクソンが自由裁量の図式に対して批判的な距離を取った一因であった。「二つもしくは多数の可能性の間で下される決断」という意味における「自由裁量」を支持しつつも[26]、対立肢の等可能性という「無差別の自由」を退けるがゆえに、「自由裁量」に対するベルクソンの態度は曖昧なものになっている。

しかしながら、本章の帰結から考えるなら、二つの著作を結合したところに描かれる自由論が、いかにして「選択の自由」を含みながら「無差別の自由」を退けるかは、明らかになるのではないだろうか。

先の例でいえば、「外出する」「作業を続ける」といった対立肢は、「どちらも可能」ではあるが、「等しく可能」ではない。それらは記憶を投影する努力の

強さや、反省が続行される期間に応じて、互いに異なる意味や価値を流動的に付与されるからである。そして、この強さや期間に応じて、いずれの選択肢が最大の価値を持つものとして意識に表れるかも決まることになるだろう。

それゆえ、ベルクソンが『物質と記憶』以前に『試論』ですでに見出していたように、無差別な選択肢とは、諸々の行動可能性を抽象的な記号に置き換えて実際の意識から切り離し、意識の進展と共に変化する意味や価値をそこから抜き去った上でのみ成立するものといえる。

つまり、二つの著作の議論から導出した全体的な自由論では、努力の度合いを任意に変化しうる点で、行為の決定論的な必然性は否定され、他方、最大の価値を持つ行為が実現される点で、対立肢の等可能性が伴う偶然性も退けられるのである。

要約すると、この章ではまず、自由な行為とは何か、またいかにしてそれが可能になるのかという問いを立て、『試論』と『物質と記憶』それぞれの自由論を考察した。『試論』から明らかになったのは、自由な行為とは人格に合致した行為であり、人格とは過去の記憶が形成する傾向や力であること、ただし人格の中には全体に融合しない部分的な傾向が局在し、より全体的な傾向に合致した行為ほど自由であるということであった。

次に、『物質と記憶』から明らかになったのは、知覚には過去の記憶が投影されており、これが行動の選択肢を作ること、また記憶が投影される度合いは、各々の努力に依存するということであった。本章では、こうした『試論』と『物質と記憶』のテーゼを結びつけ、努力によって記憶を想起し、反省するほど、自由な行動が可能になることを導出した。

ベルクソンはエディンバラ大学で行われた特別講義の中で、人格を「過去の記憶の全体」と「未来へ向かう意志」の二側面で定義した後、さらに次のように続けている。

> 人間がそれらの二つの機能（記憶と意志）を獲得できたのも、個人がそれらの機能を行使できるのも、ただ一つの同じ努力によってです。この努力に我々は気づきませんが、それはこの努力が恒常的であるからです。けれども、この努力は緊張にほかなりません。人間であるということは、それ自体が緊張であるということなのです。（Mé, 1065）

ベルクソンの指摘するように、記憶を保持し想起する「努力」、上の引用の言葉で言えば「緊張」は、ある程度は常にはたらいており、恒常的なそのレベルでは無自覚なものといえる。逆に言えば、通常は無自覚である記憶の想起を

「努力」として自覚できるのは、意志的にその度合いを強めるときであるといえよう。

ベルクソンはまた、『物質と記憶』の『第七版の序文』で、この著作の出発点となり、その論述を導いた理念を、以下のように要約している。

> 要するに、精神活動には様々な音調 tons があり、我々の心的生活は*生活への注意*の度合いに応じて、行動から遠ざかったり近づいたりしながら、高低様々に営まれるのだ。（MM, 7）

ここで言われる「生活への注意 attention à la vie」という概念もまた、我々の精神活動の度合いを左右する点で、「緊張」という概念とともに、記憶を投影する「努力」の概念と重なるだろう。

では、この努力を左右するものは何か。記憶の投影が内的な努力の度合いに依存することは明らかになったが、では何がその努力をもたらすのか。

こうした努力や注意が「意志的な volontaire」（MM, 110）と形容されることから、努力は意志 volonté によって生じると考えられる。けれども、記憶の顕在化を左右するこの意志は、記憶の全体に対して外的にはたらきかける意志であり、第一節で述べた、「記憶の全体が形成する傾向」という意味での、人格としての意志とは異なる。だとすれば、人格としての意志とは別に、記憶を呼び起こす努力の度合いを増減するような、そのつどの意志というものを想定しなくてはならないだろう。

以上の考察から、我々の行動を自動運動から解放する二つの意志の存在が帰結される。一つは人格としての意志、過去の記憶の全体が形成する個人的な傾向であり、これは意識的に変えることのできない各々の本質であるとみられる。もう一つはこれと異なり随時変化させることのできる、そのつどの努力する意志である。前者の人格的傾向は自発的な行動をもたらす力となり、後者の努力する意志は行動の選択を左右する。

この後者の、記憶の全体に対して外的な、そのつど創発するような意志について、『試論』は語っていない。次章で触れる、『物質と記憶』におけるいくつかの曖昧な表現を除けば、以降の著作においても同様である。例外は、以下に述べる『試論』の一箇所である。

> もっとも、意志 volonté は、それが意志するために意志する vouloir pour vouloir ときでさえ何らかの決定的な理由に従っているのではないか、また意志するために意志することは、はたして自由に意志することなのか、

と問うことはできるだろう。(DI, 119)

ここで言及される、ただ「意志するために意志する」意志とは、記憶が形成する傾向性ではなく、努力し反省する意志のような、そのつど創発する意志であろう。引用では、その意志が何か決定的な理由に従っているのではないか、また、ただ意志するために意志することは自由に意志することなのかどうか、という問いが提起されている。しかしながら、ベルクソンはこれらの問いを追究することなく、そうした問いが招く困難を予測したように、「さしあたりこの点にはこだわらないでおこう」として問いを保留する。

では、努力する意志をもたらすものは何か。そして、精神的な存在である意志はどのようにして身体と結びつくのか。次章では、精神と物質、および原因と結果の観点から、こうした問題を考える。

第二章　精神のはたらきと物質

第一節　精神と物質の結合と区別

前章では、記憶を呼び起こして知覚に投影し反省する努力の度合いに応じて行動が決定されることを述べた。

『物質と記憶』において、記憶力の行使は、想起の場面では関連する記憶を呼び起こす努力 effort として、知覚の場面では対象に向ける注意 attention の増大として、精神と物質の差異を語る場面では緊張 tension の度合いの変化として表現されることが多い。ベルクソンは精神の精神たる所以をこの記憶力に求めているため（Cf. ES, 4-5）、これらの概念はベルクソンの理論において非常に重要な役割を担っているといえよう。

意志的な「想起」や「注意」と呼ばれる現象は、主観的には、努力の感覚や知覚内容の豊富化として経験されるが、客観的には、筋肉の緊張や感覚神経の活性化として表れる。『試論』でベルクソンは Th.リボーの説を支持して、この心理的側面と生理的側面の間に因果関係を認めず、これらは同一の現象の二側面に過ぎないとした。そして、これらの二側面を伴う注意現象全体を引き起こす要因としては、純粋に心理的な「意志 volonté」の存在を想定した。

> 注意は純粋に生理的な現象ではないが、数々の運動がそれに伴うことは否定できない。これらの運動は現象の原因でも結果でもない。むしろ運動はリボー氏がかくも明瞭に示したように、現象の一部をなしており、現象を延長へと表現するものなのだ。…〔中略〕…確かに意志的な注意には常にある純粋に心理的な要因が介入している。心理的な要因が介入するというのはつまり、自分の専心しようとする観念に無関係な全てのものを意志によって除去するということにほかならない。（DI, 20-21）

さらに『物質と記憶』では「脊髄と延髄に組み込まれた（言葉を発するための）一連のメカニズムは、精神―運動野にある錘体細胞の軸索突起を介して、大脳皮質の上位中枢に結ばれており、この経路を通って意志のインパルス impulsion de la volonté が伝達される。何か声を発しようとする場合、我々は行動命令 ordre d'agir をしかじかの運動メカニズムに伝達する」（MM, 124）のように述べられている。

こうした叙述から、「意志的な volontaire」と形容される行動においては、そ

れを解発する原因としての「意志」の存在が想定されていたことは、否定できないように思われる。

ベルクソンは努力感の分析に関し、1880 年に『努力の感覚 *Le sentiment de l'effort*』と題して *Critique philosophique* 誌に掲載された W. ジェイムズの論文を参照している（Cf. DI, 16）。これは同年に発表されたジェイムズの論文 *The feeling of effort* のフランス語訳であったが、その中でジェイムズは「私がフィアト fiat と呼ぶ、その行為を続行することに対する同意、あるいは決意という要因は…〔中略〕…疑いもなく行為の自発性 voluntariness の本質をなす」と述べ、行為を解発する命令としての心理的な要因を想定している[27]。

1906-1907 年のコレージュ・ド・フランスにおけるベルクソンの講義を記録したノートによれば[28]、ベルクソンはジェイムズのフィアトの概念を「この全く新しい、決定論とは完全に異なった要素こそが、ジェイムズの哲学を機械論者の諸概念から絶対的に区別している」（Mé, 708）と評価しつつ、「この*フィアト*は、要するに、古典的な心理学における*意志 Volonté* であるが、ジェイムズにおいては機械論を乱し分析から逃れてゆくこの要素が最小限に切り詰められてしまっている」（Mé, 709）と不満を表してもいる。

前章で述べたように、ベルクソンは、記憶が形成する意志に対して外的な、そのつどの努力する意志を論じない。けれども、『物質と記憶』にみられる先のような「意志」への言及は、少なくともこの著作の議論が、古典的な心理学における意志の概念や、ジェイムズのフィアトの概念の影響を受けていたことを示しているだろう。

けれども、努力という現象をもたらすのが、意志という純粋に心理的な要因であるならば、その意志を生じさせるものは何なのだろうか。また、努力という心理的・物理的現象に対し意志はどのように関わるのか。以下では、この問題に答えを与えるために、まずは精神と物質の結びつきを明らかにしてゆきたい。

前章で述べたように、『物質と記憶』は行動の自由の観点から精神と物質の関係を解明しようとするものであった。『物質と記憶』はその結論部で、以下のように精神と物質の結びつきを要約している。

> 精神は純粋知覚 perception pure のはたらきにおいて物質と結びつくことができるが、にもかかわらず物質とは根本的に区別される。…〔中略〕…精神は*記憶力*、すなわち、未来のための、過去と現在の総合である。精神は、物質を利用し、精神が身体と結びつくそもそもの目的である*行動*によって自己を現すために、物質の諸瞬間を凝縮する。（MM, 248）

さらにベルクソンはこの著作の最後で上の内容を繰り返し、「自由は常に必然の中に深く根を伸ばし、必然と密接に一体化している。精神は物質から知覚を借りてここから養分を吸収し、これに自分の自由を刻印して、運動という形で物質に返すのである」（MM, 280）と述べて、論述を結ぶ。

物質は受けた刺激に必然的な反応を返すのみであり、生物の身体も基本的にこれと同様であるが、精神は身体が刺激に反応して必然的な行動を準備する段階で、その身体の態勢を枠組みとして過去の類似の態勢における記憶を想起し、必然的な反応の連鎖を予測不可能な方向にそらせてゆくことができる、といったその行動選択の理論に関しては、すでに前章で述べた。

では、「精神が物質から知覚を借りる」とはどういう意味か。知覚が心理的な内容でありながら客観的な物質に関わるとすれば、精神と物質が知覚において結びつくと考えることは妥当だろう。けれども、「精神は純粋知覚のはたらきにおいて物質と結びつく」とはどのようなことなのだろうか。

前章で、知覚にはすでに記憶が投影されていることを明らかにした。知覚が常に記憶によって解釈されていることは、錯覚や、思い込みによる見間違い、聞き違いなどの現象からも十分推測されることである。

ベルクソンは、完全な知覚には常に記憶が混入されていることを述べた上で、知覚から記憶を全て取り除いても、純粋に現在に属している部分が残り、これは客観的な物質の一部であると主張する。この一部は「純粋知覚」と呼ばれ、主観的な知覚の基底にあるこの「純粋知覚」が、客観的な物質の一部である点で、知覚はその核に客観的根拠を持つとされる。

ここで、客観的な物質と主観的な知覚の関係を、全体と部分の関係で一元化するためにベルクソンが援用するのが、独特の定義を与えられた「イマージュ image」という概念である。

> *私は諸々のイマージュの総体を物質と呼び、私の身体という特定のイマージュの行動の可能性と関係付けられた同じイマージュを物質の知覚と呼ぶ。*（MM, 17）

この「イマージュ」とは何か。この言葉は普通、事物の映し取られた姿や像を意味し、主観に内在するという意味では「心像」とも訳される。ベルクソンのいう「イマージュ」にもこの主観的性質は残されているが、ベルクソンの独創性は特に、この主観的な心像と客観的な物質の違いを、性質の違いではなく程度の違いとみなしたところにある。つまり、ベルクソンの理論では、「物質」と「物質の知覚」は「全体」とその「一部」の関係にあり、両者が根本的に同

じものである点で、カント的な「物自体」と「現象」の間の距離が乗り越えられているのである。

こうしたテーゼが元来『物質と記憶』の主題ではなく、心身問題を考察する中で付随的に生まれたものであるとはいえ[29]、ベルクソンはこのイマージュという概念の内に客観的な物質と主観的な知覚を包括することで、知覚される以上の実在を認めない主観的観念論と、観念を越えた事物の実在を主張する素朴実在論や唯物論のような立場との調停が可能になると考えたのである。

もっとも、ここでのベルクソンの議論が中立的な立場を越えて実在論寄りにあることは確かである。ベルクソンは主観的に知覚されるイマージュだけでなく、イマージュの総体としての客観的な物質界全体や、現在知覚されていない過去の記憶イマージュの全体さえも実在とみなしている。

『物質と記憶』の第Ⅱ、Ⅲ章ではそれらの領域が存在する証明として、脳とは別に全ての記憶がそれ自体で存在しなければならないこと、またその全ての記憶の中から何を顕在化するかの選択基準として、物質界と結びついた身体の存在が要請されることが論じられているのであるが、他方で『物質と記憶』の議論はそもそも生物の選択の自由を確実な前提とするところから出発しており、そうした出発点がすでに、生活環境としての客観的な物質界の存在を要請している点は否めない。

「（私に知覚される）全てのイマージュは、その要素的な部分に至るまで、自然法則と呼ばれる一定不変の法則に従って作用反作用しており」（MM, 11）、「科学は現に未来の予見に成功しているのだから、科学を基礎付けている前提はでたらめな前提ではない」（MM, 22）といわれるように、ベルクソンの場合、知覚される物質が一定の法則に従って変化する基盤となる、客観的な物質界の存在は、論証されているというよりも蓋然性の高い仮説として前提されているといえる（Cf. MM, 26）。本論文では、ひとまずこうした仮説の実際生活上の有用性を認め、その意味でこれを考察に足るものとして論を進めてゆくことにしたい。

先の引用にも述べられていたように、知覚を物質の全体から分離する基準は私の身体、より正確には、身体に備わった生得的な機能や欲求に基づく、身体と環境の利害関係 intérêt に求められる。

この場合、「イマージュ」とは、このような知覚と物質の一元論を説明するための便宜的概念であり、『物質と記憶』でその役割を果たした後は、他の著作で言及されることもほとんどないため、この言葉にそれほど拘泥する必要はないであろう。むしろ、知覚は本来、物質の一部であり、物質から知覚を分離する基準は身体にあるという、そのテーゼの核心に注目しなければならない。

では、どのようにして物質の一部が知覚になるとされるのか。ここで鍵となるのが、先に触れた、物質の諸瞬間の「凝縮」という概念である。

『物質と記憶』の第四章でベルクソンは客観的な実在としての物質を「無数の瞬間的な振動 ébranlements の連続」（MM, 234）とみなした。実際、光が連続的な波の性質を持つことは今日ではよく知られている。ベルクソンは「無数の《力線》が原子を構成し、原子とは《力の中心》であって《相互に浸透している》」と想定したファラデーや、「連続的な流体が空間を満たし、原子とはこの連続体の中で旋回する、一定のパターンを持った渦である」と想定した W. トムソンの理論に言及しているが（Cf. MM, 225）、光のみならず物質全てを連続した振動と呼ぶ背景には、こうした理論が念頭に置かれているのであろう。とはいえ、実在の物質を未分割な連続体とみるベルクソンのテーゼそのものは、知覚される事物の区別は生物の生活上の欲求に応じたものであるという、独自の見解による。たとえば、「最も原始的な生物でも、栄養摂取の欲求のため…〔中略〕…食物として役立つような対象を捜し求めざるをえない…〔中略〕…個体や種の保存を目的とした様々な欲求のそれぞれが我々に…〔中略〕…求めたり逃げたりしなければならない独立の物体を区別させる」（MM, 222）

また、物質には我々に区別できる限界をはるかに越える微細な間隔の変化が生じているが、我々はこれを一定の時間間隔ごとに区切り、その間隔内の継起を我々にとっての「一瞬」に凝縮して、「同時」に知覚するとベルクソンはいう。例として挙げられるのは、赤色の光である。我々が 1/500 秒以下の時間的な変化を区別できないとされるのに対して、たとえば赤色の光は 1 秒間に 400×10^{12} 回の振動をするとされることをベルクソンは指摘する(MM, 230)。この場合、1/500 秒以下の間隔に含まれる全ての継起、つまり $400\times10^{12}\div500$ 回の光の振動は、我々にとっては単一のものとして、「同時」に知覚されることになる。ベルクソンはこれを実在の濃縮 condensation、または凝縮 contraction と呼び、客観的な実在としての物質は、その一部が切り取られ、単一の直観に凝縮されることで、赤色の光なら赤色の光という主観的な感覚的性質になるとする。

この場合、赤色の光の知覚は主観的な知覚であると同時に、分離されて凝縮されただけの物質の一部であるから、逆に物質は、諸々の主観的な知覚が弛緩して混合した全体とみなすことができる[30]。こうした観点からベルクソンは、先に述べたように客観的な物質と主観的な知覚を「全体」と「部分」の関係で統合するのである。つまり、ベルクソンの考えでは、客観的な物質とは、凝縮された我々の感覚的性質に比べれば「無限に希薄な存在」（MM, 233）であるとはいえ、無ではなく、「実在そのものである、生成の連続体」（MM, 154）とみなされる。

全体から分離された主観的な知覚が「生彩ある絵のような」（MM, 73）意識的な知覚と呼ばれるのに対して、物質の全体は、ちょうど様々な色の光が混じると無色になるように、諸々の性質が「互いに調和し合い、補い合い、中和し合って」（MM, 246-7）「潜在的 virtuel」（MM, 33）な状態にある、「一つの意識」（MM, 247）と呼ばれる。この点は後に第五章で再び論じるが、ベルクソンの理論において、この中和状態にある潜在的な物質が、全ての個人的知覚に対する「非個人的な一つの基盤 un fond impersonnel」（MM, 69）でありながら、同時に個人の「潜在的な無意識」（MM, 158）に位置付けられている点は、非常に重要である。

たとえば 1909 年のフランス哲学会で「精神生活における無意識」と題する報告についての討論が行われた際、ベルクソンは「潜在的な記憶」のほかに、「物質の全体についての無意識的知覚という新しい形の無意識」を含む、新たな「無意識」の定義の可能性について語っている（Cf. Mé, 805-808）。また、1923 年の『ドラットルへの手紙』の中では「実在そのものが推移であるということは、実在が実体的であることをなんら妨げません。変化の不可分な連続としての実体、それが私の考える持続の本質です。…〔中略〕…私の言う持続は…〔中略〕…全ての実在の根であって、我々にも事物にも共通のものです」（Mé, 1418）と述べられている。

元来、ベルクソンの理論において我々が物質全体の中から知覚を「選別する choisir」（MM, 48）ことができるのは、物質の全体が初めから、顕在的な知覚に満たない状態で、我々の各々に与えられているからにほかならない。主観的な意識の到達不可能な外部に客観的な物質を置くのではなく、各々の潜在的な無意識にそれを置いた点にベルクソンの知覚理論の独創性はある。そしてこの独創性が、主観的な観念論と客観的な実在論を統合しえた理由なのである。

つまり、ベルクソンの理論では、全ての個人的意識の潜在的な領域にある「物質全体」から、「分別 discernement」（MM, 35）や「限定 limitation」（MM, 38）といった作用によって、個人の顕在的な意識に上昇するのであり、ここから、非個人的な物質界と個人的な知覚は、無意識と意識の「度合いの差」で一元化されることになる。

> あらゆる物体のあらゆる場所からの作用を全て感知するとは、物質の状態に下降することであろう。意識的に知覚するとは、選択することであり、意識とは、何よりもまず、この実用上の pratique 分別にある。（MM, 48）

純粋状態における我々の知覚は、我々の身体からほかの物体へと進むので

はない。この知覚は、まず諸々の物体全体のうちにあり、それから徐々に限定されてきて、我々の身体を中心にするようになるのである。(MM, 62)

このように、ベルクソンの知覚理論の特異性は、知覚作用というものを、中心からの拡大作用ではなく、全体からの限定作用で、メルロ＝ポンティの言葉を借りれば「引き算で」[31]とらえた点にある。ベルクソンの理論では、記憶の想起もまた、諸記憶の融合した全体から特定の記憶を分離する、「全体から部分へ向かう」(MM, 184) 作用として定義されるため、この点で知覚作用は記憶の想起と同型の、「分離」や「限定」による顕在化であるといえる。

ただし、純粋知覚は分離されて凝縮されるだけで顕在的な知覚に変わるわけではない。先述のように、明瞭な知覚は常に記憶を含んでいるとされるため、純粋知覚は物質から分離され、感覚的性質に凝縮された上で、過去の類似の諸記憶と重ねられなければならない。知覚を構成するそうした精神のはたらきについて、『物質と記憶』は次のように述べている。

我々の知覚は…〔中略〕…物質に対する我々の可能な行動が止まる所で、したがって我々の欲求との利害関係がなくなる所で、境界線を引いている。これが知覚する精神の最も明白なはたらきである。(MM, 235)

二つの形の記憶のはたらき mémoire、すなわち、基盤にある直接的知覚を諸記憶 souvenirs の布で覆うはたらきと、無数の瞬間を凝縮するはたらきが、知覚における個人的意識の寄与の主要なものであり、我々が持つ事物の認識の主観的側面をなしている。(MM, 31)

こうした論述から、知覚を構成する精神のはたらきとして、①身体の利害関係に即して純粋知覚を物質全体から区分するはたらき、②純粋知覚を感覚的性質に凝縮する記憶のはたらき、③過去の記憶を想起して知覚に混入する記憶のはたらき、の三つが区別される。

しかし、上の二つ目の引用で、過去の諸記憶を想起して「知覚をこの諸記憶 souvenirs で覆うはたらき」が「記憶のはたらき mémoire」といわれていることはともかく、なぜ無数の瞬間を単一の感覚的性質に「凝縮する」はたらきが「記憶のはたらき」と呼ばれるのだろうか。その理由は、ここでベルクソンが実在論的な視点に立っている点にあるように思われる。

光が知覚される最短の、一秒の何分の一かの間にも、何千億兆もの振動が

生じており、その最初と最後は莫大な数の振動で隔てられている。したがって、我々の知覚というものは、どれほど瞬間的であっても、無数の記憶要素で成り立っているといえるのである。（MM, 166-7）

凝縮され、主観的には単一のものとしてとらえられる光の感覚のうちに、ベルクソンは客観的な視点から「莫大な数の振動」を回復する。これらの振動は、客観的には継起するはずのものであるから、「最後の振動」に対して「それ以前の大部分の振動」は「過去」にあたり、ゆえに純粋知覚のような最短の一瞬といえども、そのほとんどはすでに記憶要素から成るとベルクソンは考えるのである。

こうした記憶のはたらきを考慮すると、要するに、明瞭に意識される完全な知覚とは、潜在的な記憶全体の一部の顕在化と、潜在的な物質全体の一部の顕在化の、二方向からの限定作用の交点に生じると解することができよう。付言するならば、ここで二つの顕在化の双方に共通する限定基準として重要な役割を担うのは、再び「私の身体」である。いずれにせよ、ベルクソンの理論における潜在から顕在への意識化とは、こうした自己限定のはたらきと同義であるといえる。

つまり、ベルクソンの知覚理論において、物質と知覚の関係は、純粋知覚の存在を媒介にして、全体と部分、無意識と意識、潜在と顕在の関係に帰され、凝縮の「度合いの差」によって一元化されるのである。

ただし、このように知覚と物質が一元化されるということは、精神と物質の区別が度合いの差に解消されるということではない。物質を微細な感覚的性質の連続体とみなし、一種の意識とみても、知覚を区分する精神のはたらきと区分される物質、凝縮する記憶のはたらきと凝縮される物質の間の二元的対立は解消しないからである。それゆえ、この節の初めで引用した「精神は純粋知覚のはたらきにおいて物質と結びつくことができるが、にもかかわらず物質とは根本的に区別される」（MM, 248）というその結論からも明らかなように、『物質と記憶』は依然「明白な二元論」（MM, 1）であるといえる[32]。

では、こうしたベルクソンの二元論において、精神的な意志を生じさせる要因、および意志と行動の関係はどのように考えられるのか。次節では『創造的進化』（1907）の議論を参考にしながら、この問題について明らかにする。

第二節　意志と意志のはたらき

本章の初めでは、努力をもたらす意志はいかにして生じるのか、また、努力

という心理的・物理的現象に対して、意志はどのように関わるのか、という問いを立てた。そして、前節では、純粋知覚において精神と物質が結びつくとされること、しかし、その場合にも精神のはたらきと物質はあくまでも区別されることを確認した。

この場合、知覚を構成する精神のはたらきを「原因」、構成された知覚を「結果」とすると、精神のはたらきは物質に直接作用する拡がりを持たない存在であるから、原因は結果に先行するのではなく、常にその結果と同時に在ることになるだろう。

ベルクソンはこうした原因と結果が共在する因果関係について、1900 年のパリにおける国際哲学会議で発表された『因果法則への我々の確信の心理学的起源についてのノート』で分析している（Mé, 419）。その中でベルクソンは、原因と結果の「共在 concomitance」という因果性の観念の方が、我々の意志のはたらきと運動の間に内的に感じられる関係に基づくがゆえに、原因と結果の「継起 succession」という因果性の観念よりも、本来的であると主張する。

> 本能的な意味での因果性は共在よりも継起を意味しているだろうか。動物は動物の運動の原因であり石の重さは石の落下の原因であるなどと我々は言う。そのとき我々は原因がその結果に先行すると考えているのか。原因は結果と同時のものであるだろう。それゆえ…〔中略〕…科学の中に適用されているような因果関係と、精神に自発的に現れる因果関係の間に明白な区別を設ける必要がないだろうか。…〔中略〕…一面において原因は結果に先行するが、他方で原因ははたらきかける力であり、したがってそれが生み出す結果に現前しているので、原因は結果と同時のものになる。(Mé, 421, 426)

引用では、科学的な法則における「原因と結果の継起」という因果性と、我々の精神に現れる「原因と結果の共在」という因果性が区別されている。

実際、我々は例えば「水を火にかける」「何分後に水が沸騰する」といった規則的に継起する出来事を因果関係でとらえる一方、「腕を上げる意志」と「腕を上げる運動」のような同時に起こる現象の間にも因果関係を感じているであろう。

ベルクソンは『試論』で心的な力とそれから発する行為の関係を「内的因果 causalité interne」と呼び、これを物理現象の規則的継起を法則化した「外的因果 causalité externe」から区別した[33]。『試論』は行為がこの内的因果によって人格や自我という心的な力から「発する émaner」場合に我々は自由であると

定義するのであるが（Cf. DI, 130, 164）、ここで留意すべきは、こうした人格とそれがもたらす行為の関係は、経験を蓄積する記憶力のせいで人格が二度と同じ状態を繰り返さない以上、規則的ではありえないとはいえ、原因と結果の「共在」ではなく、原因が結果に先行する「継起」の関係で考えられることである。

すでに見たように、『試論』では、過去の記憶の全体が融合して特定の行動へ傾く一つの力、我々の意識の根底に存在する人格的な意志を形成するとされていた。この人格としての力ないし意志は、それに基づいて実現される行為に先立って潜在しているのであるから、ここには原因が結果に先行する継起的な因果関係が成立することになるだろう。

この意味での意志は、行為に先立って意識の深層に存在する原因であり、諸々の可能性の中で特定の行動を選択する真の理由である。この意志は通常は明瞭に意識されていないが、十分な反省の努力があれば把握することができるとされる。「強い反省の努力によって…〔中略〕…我々自身の内部に立ち戻るときにはいつでも、この（深層の）自我を認めることができる」（DI, 175）

他方で、行為に先立つ力を意味するこの「意志 volonté」に対して、行為と共在する力を意味するのが「意志する vouloir」という動詞、およびこの動詞と同形の名詞「le vouloir」である。先の「意志」が特定の行為に向かう深層の力として「選択」「自由」「反省」といった概念と結び付けられるのに対し、「意欲」ないし「意志のはたらき」であるこの「le vouloir」は[34]、物質にはたらきかける力として行為そのものに内在し、特に『創造的進化』の中で「創造」「生命」「流れ」といった概念と結び付けられて、物質という受動性と表裏一体にある精神の能動性を表している（Cf. EC, 210, 239, 240, 248）。

したがって、「意志」は特定の行為をもたらすが未だ行為に至らない深層の力として、またその実行力である「意欲」は行為の現実化に共在する力として理解される。言い換えれば、「意欲」とは深層の「意志」の、行動という場面における現前であるといえよう。

しかしながら、「意欲」は人格的な「意志」から必然的に発するものではない。たとえば、我々が強い反省の努力によって自らの根底的な力を把握するとき、把握される力は「意志」であり、これを把握する力は、その反省という行為に共在する「意欲」であるといえる。このとき、一定の人格に対して、どの程度の反省の努力によってそれを把握するかという無限の度合いが開かれるが、その度合いの決定はただ意欲に依存し、把握される側の人格的な意志には依存しないのである。

それでは、努力をもたらすこの「意欲」の原因や理由は何か。言い換えれば、

「意欲」は何によって、なぜ生じるのか。

この問題に答えるため、まず、意志的な「注意」や想起の「努力」があるというとき、我々は具体的には何を感覚しているのか、という点を解明しておきたい。意志的な想起に伴う努力感については、『精神のエネルギー』(1919)に収められた1902年の論文、『知的な努力』で詳細に考察されている。

その中でベルクソンは、同じ意識水準の記憶が連想的に想起されるのでなく、潜在的な水準から顕在的な水準へ、無数の要素が相互浸透した融合体から個別のイマージュへと記憶が展開される場合に、意志的な想起の特徴である努力感が持たれるとする(Cf. ES, 167)。

実際、我々は何かを想起しようと努力するとき、雑駁なイメージから徐々に一個の記憶が浮かび上がってくるのを経験するだろう。けれども、我々が意志的な想起を受動的な想起から区別するのは、そうした全体から部分へという記憶の展開によってなのだろうか。能動的な想起において我々は記憶の展開だけではなく、記憶を展開する力を感じており、努力の感覚にはその力についての自覚が含まれているのではないか。だとすれば、記憶の展開に対する分析は、努力感の核心をなす力の自覚の分析ではなく、むしろその力の結果としての心理状態の分析に過ぎないといえよう。努力の分析に関し、「それらの(記憶を想起する)力が*どのようにして*はたらくのかということは、単に心理学だけの問題ではない。それは因果性という一般的で形而上学的な問題に関わるのだ」(ES, 189-190)と付言したとき、ベルクソンも、努力の問題が記憶の展開についての心理学的分析だけでは解明されないことを認識していたように思われる[35]。

この『知的な努力』から4,5年後、1906-1907年にコレージュ・ド・フランスにおいて「意志の諸理論」と題して行われたベルクソンの一連の講義を記録したノートの中には、注意の努力に伴う「意欲 le vouloir」の自覚に言及した箇所がみられる。

> メーヌ・ド・ビランの理論は注意の努力につきまとう《何か分からないもの》の存在を確認することに終わった。その理論はこの努力やそれがはたらく仕方について何も教えてはくれない。反対に(リボーの)*感覚―運動*理論は注意の努力を分析し、我々に初めは気づかなかった要素を発見させてくれる。けれども、この分析の前に、意志の衝力 impulsion そのものである、*意欲* le *vouloir* は姿を消してしまう。その存在を疑うことができないような、注意における《何か分からないもの》が消失してしまうのだ(Mé, 698)。

引用の文では、続けて、注意の努力に伴う「意欲」が、その存在を疑うことができないにもかかわらず常に分析から逃れてしまう理由として、我々の知性が静止した事物や状態しかとらえられず、そのため意志的な努力の運動を把握できない点が挙げられている。

引用では、注意の努力における意欲が《何か分からないもの je ne sais quoi》と呼ばれている。意欲やその原因の不可解さは、精神の動的な力のとらえがたさと、この問題が原因の無限遡行につながる点に由来するだろう。けれども、意欲が知性的分析から常に逃れ去ってしまうとしても、依然としてその存在を疑うことができないという事実は、それがやはり何らかの仕方で自覚されていることを意味しているのではないか。

ベルクソンは、反省的努力によって我々は自らの根底にある傾向や力を把握することができる一方、そうした反省的努力をもたらす力である「意欲」それ自体をも「見る」ことができると考えているようである。

> 我々の意識が自分の原理の一部にでも合致するためには、*出来上がった*ものから離れて、*出来つつある*ものに寄り添わなければならない。自分自身に立ち返り、*見る*能力が*意志する vouloir* 行為と一つになりきらなければならない。（EC, 238）

> 外側からしか眺めず、出来上がったものしか把握しない知性の目だけではなく、精神の目で、すなわち行動力に内在していて immanent à la faculté d'agir、いわば意欲 le vouloir が自分自身を振り向くときにほとばしり出る、あの視力で見るようにしよう。（EC, 251）

多少レトリカルな表現ではあるが、上の二つの引用から、我々の知覚能力は合致という仕方で自分自身の意欲を自覚できるという主張が読み取れよう。この意欲の自覚が記憶の想起と異なるのは、意欲は意識されるために個別のイマージュへと分解される必要がない点である。

元来、注意や想起という現象は、能動的なものであれ受動的なものであれ、筋肉の緊張といった生理的な現象と、知覚内容の豊富化といった心理的な現象を含む。そのように、同様の変化が生じるにもかかわらず我々が受動的な想起と能動的な想起の区別を語るのも、ある場合には、それらの現象についての感覚に加えて、自らの能動的な精神のはたらきと感じられるものがそこに含まれているためであろう。

だとすれば、能動的な想起における努力の感覚は、努力という現象に含まれ

る生理的な運動についての感覚と、知覚内容の豊富化といった心理的な変化のほかに、そうした現象をもたらす意欲そのものについての感覚を含んでいることになる。つまり、努力の感覚を構成するのは、努力をもたらす意欲についての直接的感覚と、その結果である生理的現象の感覚、そして同じく結果である心理的現象、の三つの要素であり[36]、要するに、努力の感覚の内には、努力をもたらす原因についての感覚と、結果についての感覚が、共在していることになる。

では、努力をもたらす意欲の原因は何か。前章では、自発的な注意や想起が「意志的な volontaire」努力と呼ばれるところから、そうした努力をもたらす原因としての「意志 volonté」を考えた。けれども、これまでの考察から、より正確には以下のように言うべきであろう。つまり、ある場合には、未だ行為に至らない力が反省的にとらえられ、それが自らの「意志」と呼ばれる。またある場合には、行為に内在する力が自覚され、その力によってもたらされる行為が「意志的な」行為と呼ばれる。それらの力は、どちらも内的因果の原因とみなされるが、前の場合には意志と行為の「継起」という関係になり、後の場合には意欲と行為の「共在」という関係になると。

だとすれば、行為をもたらす原因を、それに先行する意志 volonté に求められるようには、努力する意欲 le vouloir の原因を、それに先行する意志 volonté に求めることはできないであろう。なぜなら、ここで意志と意欲は、継起と共在という異なる因果関係を形成しているからである。

確かに、意欲とは意志の実行力であると考えられるが、意欲の増大は先行する意志には依存せず、ただそれ自体で存在する。つまり、意欲の増大はもはやそれをもたらす原因をその背後に遡ることができないようなはたらきであるといえよう[37]。

前章の最後で述べたように、ベルクソンはこのような創発的な意志のはたらきを論じなかった。けれども、これまで述べてきたように、記憶を想起し反省する努力の概念は、人格としての意志とは別に、こうしたそのつど開始される意欲の存在を帰結している。このはたらきが自らのものである限りで、それがもたらす行為は自由な行為といえるだろう。とはいえ、自らの精神のはたらきと感じるもののほかに、自分とはどこにあるといえるだろうか。

こうした意欲の増大は、それ以上に原因を遡ることができないという意味では、原初的な開始点であると考えられるが、意志的な努力そのものは恒常的に続いているため、それが強められる際にも、意欲は全くの無から生じるわけではないともいえよう。

本章の初めで、想起する努力をもたらすものは何か、また、努力という現象

に対し意志はどのように関わるのかという問いを立てた。これらの問いに対して、結局どのような答えが出ただろうか。

まず、想起する努力をもたらすのは、「意欲」ないし「意志のはたらき」であって、これはそれ自体以外に原因を持たないことがいえる。前章の終わりで述べたように、想起する努力はある程度は常にはたらいており、恒常的なそのレベルでは無自覚なものである。これが「努力」として自覚されるのは、我々がその度合いを強める場合であって、その強化は、人格としての「意志」にはよらず、ただそのつどの「意欲」ないし「意志のはたらき」の増大によるのである。

次に、努力という現象と意志の関係に対しては、次のようにいえる。「意欲」ないし「意志のはたらき」という精神的な力は、その結果である生理的・心理的現象と共在する。そして、この力は、生理的・心理的現象についての感覚と共に、努力の感覚の内に直接に自覚されている。

第三章　持続における区別と融合

第一節　持続の全体の融合

第一章では、過去の記憶が融合して現在の人格を形成し、それゆえ、より多くの記憶が知覚に投影されるほど、人格に即した行動が可能になることを明らかにした。ベルクソンの考えでは、行動の選択のために、過去の全ての意識状態が、物質的な脳から独立に、それ自体で潜在的に残存するとされる。

けれども、過去の意識状態はどのような形で残存するのだろうか。過去の記憶は、その全てが単一の人格を形成しているという意味では、互いに融合した不可分な単一体として残存していると思われる。他方、想起において記憶の全体が個々の記憶に展開され、ある特定の時と場所における思い出が再現されるという意味では、諸々の記憶は互いに区別を保ったまま保存されていなければならない。

現在の意識状態と過去の全ての意識状態との連続性を、ベルクソンは「持続 durée」と呼んだ。『試論』でベルクソンがこの持続を「区別なき継起」(DI, 75)、「明確な輪郭を持たず、互いに外在化する傾向を全く持たずに相互に溶け合い浸透し合っている、数とは何の類縁性もない質的な諸変化の継起」(DI, 77) と定義したことからも明らかなように、意識の持続に関しては継起する諸状態の融合性が強調される。

こうした強調の背景には感覚を数値に置き換えて意識事象を法則化しようとする当時の精神物理学や、要素主義的な連合心理学への抗議があったと思われる。けれども、意識の不可分な融合性を強調したために、ベルクソンの持続概念は「相互浸透するための諸部分を欠いている」「継起に必要な諸瞬間が存在しない」などとして、サルトルやメルロ＝ポンティ、バシュラールらの批判を受けることになった[38]。

しかしながら、他方でベルクソンが潜在的に残存する意識状態や記憶を諸状態 les états や諸記憶 les souvenirs と複数形で表すように、持続は質的に区別される諸部分を持っている[39]。持続の融合性に対する強調の陰でこうした区別は見逃されがちであるが、ベルクソンの持続を不可分な連続として一面的にとらえるならば、サルトルらの批判するように、「変化」や「継起」は不可解なものになってしまうだろう。

では、持続における諸部分はどのようにして成り立つのか。また、そうした区別と、不可分な融合はいかにして両立するのか。本章では、持続が「諸瞬間」の区別を持っている点を明確にしながら、こうした問題を解明する。

まず、ベルクソンの強調する持続の融合性はどのようにして成り立っているのだろうのか。

ベルクソンは『試論』で、我々の意識の持続を、しばしばメロディの単一性にたとえて説明する。「あるメロディの諸々の音をいわば一つに融合したものとして想起するように、先行する（意識の）諸状態と現在の状態を有機化することで持続は成り立つ」（DI, 75）とベルクソンは述べる。

では、この「有機化」とは何か。「意識は（運動体の）継起的な位置を記憶して、それらを総合する…〔中略〕…ここにはいわば質的な総合があり、我々の継起的な諸感覚相互の漸次の有機化があり、メロディの１フレーズにも似た単一性がある」（DI, 83）といわれるように、継起する諸感覚の「有機化」は「質的な総合 synthèse」とも言い換えられる。そして、この「総合」とは、ベルクソンの場合、諸単位の単なる集合ではなく、諸単位を包括する単一性という性格を持つ。

> あらゆる数は…〔中略〕…諸単位 unités の集合 collection である。他方で、あらゆる数は、それを構成する諸単位の総合として、それ自体が一つの単一性 une unité でもある。（DI, 59）

それゆえ、メロディにたとえられるような「有機化」や「総合」においては、諸部分の個別性と同時に、たとえば「３」という数に対して我々が持つ単一の直観のような、諸部分の集合を超えた、全体的な単一の質が考えられているといえよう[40]。

実際、メロディは区別のある諸々の音から成るが、我々はその諸々の音を知覚すると同時に、その全体を喜びや悲しみを伴う一つの質として直観しているであろう。そのように、継起する諸感覚は、それらの間の質的な区別がそのまま保持されると同時に、その全体が運動や変化についての一つの質として、単一の直観の内にとらえられていると思われる。それゆえ、継起する諸感覚を単一の質に融合する、この「総合」ないし「有機化」のはたらきによって、先行する意識の諸状態と現在の状態の不可分な融合は、まず成立しているといえる。

けれども、「私は継起する感覚の一つ一つを保持して、それらを有機化する」（DI, 64）といわれるとおり、諸感覚は有機化されるために、まずその一つ一つが、個々別々のものとして意識に保持されなければならない。たとえば、一つのメロディが聴かれるためには、まず、継起する一つ一つの音が、複数の音として聴かれなければならないのである。では、そうした保持とはどのように行われるのか。『試論』はこの点について詳しく述べていないが、『物質と記憶』

では、この諸感覚を個々別々に「保持する retenir」記憶のはたらきについて、生理学的な観点からやや詳しく述べられている。

ベルクソンはその著作でまず、我々にはある限られた時間、知覚された内容そのものをそのまま意識のもとに保持しておく「一種独特のはたらき」（MM, 91）があると述べる。その「限られた時間」の具体的な長さはそこでは明確にされていないが、たとえば、直前に見た絵や聞いた言葉は細部まで再現できるのに、時間が経つとそのイメージが消失してしまう、といった経験は、一般に認められるところだろう。

ただし、このとき過去の諸知覚は、それらが最新の現在の知覚であった時点と全く同じ状態で現在も保持されているとは考えられない。なぜなら、知覚は常に古びてゆくものであり、最新の現在の知覚には常に保持された過去の知覚にはない現実感があるからである。知覚の持つこの現実感についてベルクソンは、再び生物学的な見地から、「我々は実際上、現実感 réalité の度合いを有用さの度合いで測っている」（MM, 68）「知覚が持つ*現実感 actualité* は、その知覚が持つ*行動性 activité* にある」（MM, 71）と述べ、行動上の有用性と知覚の現実感を同義にとらえる。

行動上最も有用な知覚とは、言うまでもなく現在の身体の状態についての感覚と、その身体の可能な行動に関わる物質界の知覚である。ここから、それらの知覚だけが最も有用な知覚として、保持された過去の諸知覚にはない現実感を持つとされる（Cf. MM, 153-154）。

このような論述からすると、直前の過去の諸知覚は、それらも現在の意識のうちに保持されてはいるものの、最新の知覚よりも現実感の弱い形で知覚されていることになるだろう。つまり、変化の認識とは、継起する諸知覚が、それらの間の質的な区別を保って、過去にゆくほど現実感が弱くなる形で対比的に把握されて成立していると考えられる。

ここで、初めに述べた「総合」のはたらきを考えると、直前の過去の諸知覚は、互いに区別を保ったまま現在の意識のもとで保持されると同時に、その全てが総合され、全体が一つのメロディのような単一性をなすと考えなければならない。それゆえ、記憶のはたらきには、継起する諸感覚をそのまま個々別々に保持するはたらきと、それらを単一の感覚に融合するはたらきの二つがあり、総合ないし有機化と呼ばれるこの第二のはたらきによって、直前の過去と現在の融合はまず成り立っているといえる。

では、現在の意識に保持されるそうした「直前の過去」以前の過去についてはどうか。過去の諸知覚は一定の期間保持された後で意識から消えてしまうのだろうか。

確かに、ある程度時間が経過すると大部分の出来事は忘れ去られてしまう。けれども、中には記憶され続ける場面や出来事もあるだろう。遠い過去の思い出がよみがえるとき、我々は直前の諸瞬間だけではなく、ずっと以前の過去と意識が不可分に連続しているように感じる。

前述のように、ベルクソンは「行動の選択には過去の経験が参照されなければならず…〔中略〕…それゆえ過去の残存が必要である」（MM, 67）として、行動上の有用性から、過去の全ての意識状態の潜在的な残存を主張した。誕生以来の全ての経験がそのまま残存するというこのテーゼには批判も多いが[41]、本論文では、そのテーゼを支持する根拠として、最初から将来有用になる経験だけを選択的に保存することはできない以上、行動のために記憶が保存されるとすれば、全ての記憶が、経験されたとおりに保存されるほかないことをあげておきたい。

『物質と記憶』では、運動メカニズムとしての身体の記憶力と、本来の意味での記憶力が区別されている。本来の記憶力とは、「日常生活の全ての出来事を、イマージュの記憶の形で、それらが展開する順に、いかなる細部ももらさずに、それぞれの事象や動作にその時と場所をとどめて記録する」（MM, 86）純粋記憶力である。よく知られた記憶の円錐図（MM, 169）では、現在の知覚平面 P 上にある円錐の頂点 S に、身体の感覚が、そして、現在の知覚平面 P から最も遠い底面 AB に、純粋記憶力によって保存される、過去の全ての出来事が位置付けられる（図 3）。

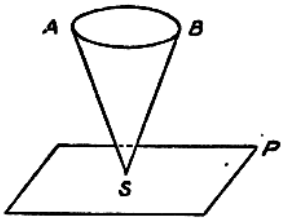

図 3

また、『精神のエネルギー』（1919）に収められた、『夢』（1901）と題する講演では、こうした過去の平面について、「我々の意識の最も暗い深みに」「無数の記憶が」「意識の最初の目覚め以来知覚し、考え、望んできたそのままの形で、その最も小さな細部に至るまで全て保存されている」（ES, 95）といわれる。

この「全ての過去を保存するはたらき」と、先述の「直前の過去を保持するはたらき」は、諸知覚の区別を保ってそのまま保存するはたらきであり、その意味で、有機化や総合のはたらきとは異なっている。意識の諸状態をそのまま、

ひとりでに保存してゆくこのはたらきは、「純粋記憶力 mémoire pure」（MM, 173）のほか、「真の記憶力」（MM, 168）、「自発的な記憶力 mémoire spontanée」（MM, 94）などの名で呼ばれている。

けれども、このような記憶力によって全ての過去の出来事が、意識の最深部に一つ一つそのまま保存されるとしても、通常は知覚されないそのような過去と、現在の知覚はいかにして融合し得るだろうか。

その答えは、「性格」という概念に見出すことができる。『物質と記憶』は、我々の性格を、全ての過去の状態の「総合」と定義するのである。

> 我々の決定の全てに常に現前している我々の*性格*とは、我々の過ぎ去った状態全ての現在における総合にほかならない。（MM, 162）

> ある決断をする場合を考えよう。精神はその経験の全体を性格と呼ばれるものに結集し、有機化して、これを行動に向けて収束させる。この行動には、その素材となっている過去と共に、人格が刻印した予見できない形態が見出される。（MM, 192）

この「性格」とは、『試論』で主に「人格」ないし「自我」と呼ばれた、意識の諸状態の融合した全体を指すだろう。最初の引用ではこの「性格」が我々の決定の全てに現前する présent と述べられている。

また、『精神のエネルギー』に収められた 1912 年の講演、『魂と身体』の中では、諸々の音節を含んだ単一のフレーズのような「過去の全体」が我々の「下意識 subconscient」（ES, 57）に現前しているとされる。

> 私は過去の全体が下意識の領域にあると考えます。つまり、我々の意識が過去全体を示されるためには、意識の外へ出てゆく必要もなく、外部から何かを付け加える必要もないような仕方で、過去全体が我々に現前しているということです。（ES, 57）

実際、知覚が直前の記憶だけでなく、それまでの経験全体に裏打ちされていることは、漠然と感じられるように思われる。先にも述べたように、仮に、誕生以来の全ての記憶を排除して、今初めて見るものとして世界を知覚することを考えるなら、いかに我々の知覚がそれらの記憶に不可分に意味付けられているかが明らかだろう。全ての過去の融合体、つまり我々の性格や人格は、それ自体は明確に対象化されないが、そのような仕方で、知覚に現前していると解

釈される。

だとすれば、この記憶全体の現前によって、我々は、直前の過去だけではなく、全ての過去と現在の融合を考えることができるだろう。

この記憶の全体が知覚に介入する仕方について、ベルクソンは次のように表現している。

> 我々は、我々の人格全体が、過去の記憶の全体と共に、分割されずに、我々の現在の知覚に入ってくると考えた。それゆえ、この知覚が次々に異なった記憶を呼び覚ますのは我々の意識全体の膨張によるのであって、意識はこの膨張によってより広大な面に広がり、その豊富な内容の詳細をもっと拡大することができるようになる。ちょうど星雲がより強力な望遠鏡で見るとより多くの星に分かれるように。(MM, 184-185)

引用から、過去の記憶の全体は、まず未分割な形で現在の知覚に入ってくること、それから、その全体が膨張することによって、細部の個々の記憶が呼び覚まされることが読み取れる。

この場合、記憶の全体が知覚に「入ってくる entrer」のは、意識的な想起によってではない。無自覚な努力によって、過去の記憶の全体は常に知覚に投影されているのである。たとえば、『試論』では「耳元で発射された大砲の音や、突然の眩しい光は、我々から一瞬の間人格意識 conscience de notre personnalité を奪い去る」(DI, 30) と述べられているが、過去の記憶の全体は、そうした例外的な状況を除き、ここでいう「人格意識」として常に知覚に現前していると考えるべきであろう。

無論、融合した記憶の全体が初めから知覚に現前しているといっても、より多くの個々の記憶を知覚に投影するためには、「ちょうど星雲を強力な望遠鏡で拡大するような」努力が必要である。経験の全体が下意識の領域に現れており、世界を今初めて見るようには見ていないということと、自分の人格に基づいた世界への働きかけ方を明瞭に意識するということの間には、大きな差がある。記憶の全体が下意識に現前していることは、より多くの記憶を行動の選択肢に結びつける努力を不要するものではないのである。

上の引用では明らかに、「星雲 un amas nébuleux」と「星々étoiles」、つまり未分割な記憶の全体と個々の記憶という、二つの記憶の残存の仕方が語られている。ベルクソンのテキストにおける強調は主に前者の、記憶全体の融合性や未分割性に向けられているが、しかし記憶がまず融合した全体として意識に現れるとしても、それが展開されるためには、さらに潜在的な意識に、個々の

記憶が残存していなければならない。

ベルクソン自身は、この二つの記憶の残存の仕方を、積極的に区別しない。たとえば、先の記憶の円錐図でも、「無数の個別的イマージュ mille images individuelles」（MM, 180）と「全体としての私の諸記憶 mes souvenirs dans leur totalité」（MM, 180）は、区別されることなく共に円錐の底面 AB に位置付けらている[42]。

しかしながら、これまでの考察から、我々はこの二つを区別し、記憶の融合した全体だけを、現在の知覚の周縁部に置くことができるだろう。なぜなら、先述のように、記憶の融合した全体は、性格ないし人格意識として知覚に現前しているのに対し、無数の過去の記憶は「我々の意識の最も暗い深みに」潜在しており、通常は知覚されないからである。

では、無数の記憶は、そもそもどのようにして「無数の」といわれる個別性を持ちえたのか。次節ではこの点を考察する。

第二節　諸部分の区別

ベルクソンの「持続 durée」の概念は、しばしば、諸瞬間の区別を持たない不可分な連続体としてとらえられてきた。たとえば、『知覚の現象学』においてメルロ＝ポンティは次のように述べている。

> ベルクソンは時間の統一性を、その連続性によって*説明する*という誤りを犯した…〔中略〕…これは過去、現在、未来を混同することになり、時間を否定するに等しい…〔中略〕…瞬間 C と瞬間 D は、どれほど近接していようと、互いに区別できないものではありえない。なぜなら、もし区別できないとしたら、そもそも時間というものがありえないだろうから[43]。

また、バシュラールも「ベルクソン氏にとって時間の真の現実はその持続であって、瞬間は何の現実性も持たない抽象にすぎない」と解釈している[44]。

確かに、ベルクソンの議論にはこうした解釈を裏付けるような持続の不可分性や連続性への強調が目立つことは事実である。『試論』でくり返し主張される意識の諸状態の「相互浸透」や「融合」、また『物質と記憶』における、「運動が不可分であるというのは、瞬間 instant というものがありえないことを意味する…〔中略〕…持続は瞬間を持ちえない」（MM, 212）といった叙述からは、諸瞬間の区別とは、本来不可分な意識の持続を、人為的に分割した抽象にすぎないような印象を受ける。

けれども、諸瞬間の区別を否定するようなそれらの叙述にもかかわらず、持続は数学上の抽象ではない、実際に経験される現実の分節を持っている。以下ではまずその点を、先に触れた「純粋知覚」の理論を再考することで明示しておきたい。

前述のように、ベルクソンは『物質と記憶』の第四章で、客観的な実在としての物質を無数の振動の連続とみなした。そして、個々の意識はその物質から「ほぼ瞬間的な quasi instantanée 断片」（MM, 154）を切り取り、これを各々の「現在の瞬間 moment」として持つと述べた[45]。

各々の意識の瞬間が「ほぼ」瞬間的といわれるのは、それらが数学的な点のような厚みのない瞬間ではなく、「どれほど短時間のものと考えるにせよ、実際には常にある一定の持続時間を占めている」（MM, 72）とされるからである。

では、なぜ意識における「瞬間」は一定の持続時間を持つとされるのか。ベルクソンにおいてはその根拠は、我々はある一定の時間よりも短い間隔の変化を知覚できないという、論理的というよりはむしろ生理学的な事実に求められる。

我々は、たとえば、何千分の一秒のような短い間隔で鳴らされた二つの音を、継起する二つの音としては聞かず、一つの音として聞くであろう。このように我々は、その中では「継起」が「同時」に感じられるような、意識における時間の枠を持つのであり、その枠は身体の能力に基づいて一定の値に定まっていると考えられる。

ベルクソンはエクスナーに依拠してその間隔を仮に 1/500 秒としているが（MM, 231）[46]、実験的に検証され、おそらくはその実験の精度が上がるにつれて変化するであろう、その正確な数値はここでは問題にはならない[47]。その数値がいくらであれ、我々が時間的な差を知覚するその能力には限界があり、ある一定の値よりも短い間隔で生じる「継起」は我々にとって「同時」にしか知覚されえないという、その事実によってベルクソンは、意識における時間的な最小単位としての「瞬間」を想定しているのである。

前章で赤色の光の例に即して述べたように、ベルクソンはこの意識の最小単位内の全ての物質の変化は、濃縮ないし凝縮されて、単一の感覚的性質として受け取られるとした。「我々が宇宙について次々に持つ知覚の異質性は、この知覚の各々が一定の持続の厚みを持っていて、記憶のはたらきがそこで莫大な数の振動を濃縮し、継起的なこれらの振動が我々には一体に見えるところからきている」（MM, 73）。

物質の継起的運動を単一の感覚的性質に凝縮するこの記憶のはたらきは、前節で述べた、意識の諸状態を単一の質に総合するはたらきと同種であると考え

られる。

ベルクソンは感覚的性質に凝縮される以前の物質界の一部分を、記憶の混じらない純粋に現在の知覚という意味で「純粋知覚」と呼び、その占める時間的・空間的な幅が、身体の行動能力の限界に基づいて定められているとした。純粋知覚の時間的な幅とは、先述のように、意識によって弁別可能な最小の時間差以下の幅であり、空間的な幅とは、知覚の届く空間的領域、言い換えれば、物質界の中の、その生物の行動可能性に関係する範囲である。「我々の知覚は、物質に対する我々の可能な行動がやむところで、つまり、物質が我々の欲求と利害関係がなくなるところで、境界線を引いている」（MM, 235）。

「我々がそこに瞬間を設ければ設けるほど、持続はそれだけ多くの諸部分を持つ」（MM, 232）といわれるように、持続は「瞬間」という「諸部分」を持つとされている。そして、「我々の意識がどこかで分割を止めるとき、分割の可能性もそこでとまる。その最終的な諸部分を想像力によってさらに分割しようとしても無駄である」（MM, 232）といわれるとおり、たとえ持続の「諸部分」を数値の上でさらに分割しても、それは単なる抽象になるとされる。

このような論述から、純粋知覚が意識における「瞬間」を構成すること、そして、純粋知覚の凝縮された感覚的性質は、それ以上には分割できない意識の最小単位であることが明らかである。感覚的性質は、物質の無数の運動を凝縮して不動の点に固定したものであり[48]、この不動の点から点への進行、つまり「絶え間ない一連の瞬間的なヴィジョンを記憶のはたらきの連続的な糸で結びつけること」が我々の意識の役割であるとされる（Cf. MM, 67）。

こうした構造は、ちょうど静止したコマを次々と映写して運動を再生する映画の仕組みを連想させる。実際、『創造的進化』の中でベルクソンは、知覚の成り立ちを映画の手法になぞらえている。

> 映画のフィルムが回り、あるシーンの様々な写真を順に映写して互いに連結させる。そのようにしてシーンの中の役者が動きを取り戻す…〔中略〕…こうした映画の仕組みはまた我々の認識 connaissance の仕組みでもある。…〔中略〕…我々は過ぎゆく現実をほぼ瞬間的ないくつかの眺めに写し取り…〔中略〕…それらをつなぎ合わせる。知覚や、理解や、言語は、一般にこのようにしてやってゆく。生成を思考する場合、表現する場合、あるいはそれを知覚する場合さえも、我々は一種の内的な映画の仕組みを作動させるのにほかならない。（EC, 305）

このように、持続は本来、継起する無数の諸瞬間の知覚から成っている。し

たがって、持続が人為的に分割できないことから、持続は諸瞬間や諸部分の区別を持たないと端的に結論するならば、それは誤りになるだろう。

そして、前章で述べたように、物質は、我々の意識よりもはるかに弛緩した「一つの意識」として定義されていたのであるから、我々の意識の持続がそれ以上には分割できない最小単位を持つとすれば、物質も同様であろう。

『物質と記憶』はこの点について明確に述べていないが、『創造的進化』では、「物質は分析すると要素的振動に分かれるが、その最短のものでも極微の消えそうな振動を持ち、無ではない」（EC, 202）「物質は空間中に拡がりはするが、完全に拡がりきってはいない」（EC, 204）のように述べられ、物質それ自体も、我々の意識と同様、ある要素以下には分解できない無数の要素的性質の連続体であることが明らかである。

実際、ベルクソンの哲学研究の端緒となり、最初の主著である『試論』以来ベルクソンがほぼ全ての著作でくり返し言及するゼノンのパラドクスも、このような持続の成り立ちを抜きにしては語れない。

しかし、ゼノンのパラドクスに対してベルクソンはおそらく予想されるように持続の「瞬間」という最小単位の分割不可能性を根拠として反論するのではない。先述のとおり、意識や物質がそれ以上には分割不可能な最小単位を持つことが前提されているにもかかわらず、ベルクソンによると、「直接的な直観が我々に運動は持続の中にあり持続は空間の外にあることを示してくれているのに…〔中略〕…具体的空間の分割可能性に限界があるなどとする必要はない。空間の中にある二つの運動体の同時的な位置と、それらの運動体の運動との間に区別をつけておきさえすれば、空間は無限に分割できるものとしておいてよいのである」（DI, 85）。

では、この見解からはどのようにして逆説が退けられるのだろうか。

ベルクソンは、意識に経験される運動が真の現実であることを主張した上で、この運動と運動体が通ったとされる抽象的空間を混同することが誤りの源であるという。

> 我々の意見では、エレア派の詭弁はまさに運動と運動体が通過した空間との混同から生まれたのである。なぜなら、二つの点を分けている間隔は無限に分割可能なので、もし運動が間隔そのものの諸部分から構成されるのであれば、その間隔は決して越えられないだろうからである。しかしながら、事実はアキレスの歩みの一つ一つが単一で不可分の行為なのであり、このような行為を必要な数だけ行えば、アキレスは亀を追い越しているだろう。（DI, 84）

物体がA点からB点まで動くとき、実際には、我々は一定の数の継起的な感覚的性質を持つのであり、その無数の諸瞬間の一つ一つ、およびそれらが融合した運動の直観は、不可分な単一の感覚である。

けれども、抽象的な線分や空間は無限に分割可能であるため、もし「A点からB点への物体の運動」を「A点とB点の間の線分」に置き換えるなら、この線分は無限に分割可能であるから、これと同一視された運動も無限に小さな諸部分から構成されることになってしまう。それゆえ、ベルクソンは意識に経験される現実の「運動」と、抽象的な「運動体の軌跡」の混同を錯覚の根源とみなすのである。

実際、持続から逆説を退けるためには、ベルクソンの主張するように、現実の運動と運動体の通る空間との混同を排除するだけで十分かもしれない。けれども、「点から点への移行 passage としての運動は精神的な総合であり、心的過程であって、拡がりを占めない」（DI, 82）「静止から静止への運動としての移行は絶対に分割できない」（MM, 209）というように、精神のはたらきや運動の知覚が空間と違って分割できないと強調するだけでは、持続はサルトルのいうように「何か不可解で魔術的な」ものとなり[49]、特に、「変化」や「継起」がいかにして成り立つのかがあいまいになってしまうだろう。

それゆえ、現実の運動と運動体の軌跡の混同が批判されるだけではなく、むしろ、現実の運動が、それ以上には分割不可能な最小単位から成っている点が明白にされるべきではなかったか。

運動の分割不可能性への強調は、運動が「一連の諸行為」（DI, 84）ないし「一連の諸事実」（MM, 214）から成る点を見誤らせるおそれがあり、また、無限分割の不可能性を問題外とする先のような叙述は、運動がその諸要素以下には分割できず、それゆえ、元来逆説を免れている点を除外視していると思われる。

確かに、「運動が不可分であるというのは、瞬間 instant というものがありえないことを意味する…〔中略〕…持続は瞬間を持ちえない」（MM, 212）といったベルクソンの叙述は、持続が諸瞬間からなることを否定するようにみえる。しかしながら、これはあくまでも「線分の諸部分に対応するような、時間の瞬間」（MM, 212）の否定、つまり厚みを持たない数学的な瞬間の否定であって、一定の時間の厚みを持つ諸瞬間の存在を否定するものではない。そうした現実に経験される諸瞬間は、持続に内的な「自然な分節 articulation」（EC, 310）と呼ばれ、人間が外部から行う人為的な分割とは区別されている。

では、そのように、感覚が瞬間ごとに継起して意識に与えられ、それらをそのまま保持する記憶のはたらきによって持続の諸部分が成立しているのであれ

ば、たとえば赤色の光が続けて知覚されるときのように、継起する諸感覚が同じ内容である場合はどうなるのか。その場合、意識の諸状態の区別は成立しなくなるだろうか。

実際、そのような場合には、継起する諸感覚がそのまま個々の感覚として保持されても、質的な区別は成立しないように思われる。けれども、ここでもう一つの、諸感覚を単一の質に融合する記憶のはたらきを考えるなら、同じ数を足してもその総和が変わるように、同じ知覚が続けて与えられても、その付加ゆえに、それらの融合した単一の感覚は変化するであろうことが推察される。

『創造的進化』はこのことを次のように述べている。

> 過去が残存する結果、意識にとっては同じ状態を二度通過することが不可能になる。我々の人格は経験を蓄積して一瞬ごとに築き上げられてゆくもので、絶えず変化する。…〔中略〕…その各瞬間は以前のものに何かが付け加わる新しいものである…〔中略〕…ある瞬間における状態は単一である。そしてその不可分性の内に、知覚された全てのものに加えて、さらに現在がそこに付与するものまでも濃縮している。(EC, 5-6)

「私の心理状態 état d'âme は時間の道を進みながら雪だるま boule de neige のように持続をかき集めて絶え間なく膨れてゆく」(EC, 2) といわれるように、意識は常に新しい知覚を自らに融合し、どの瞬間にも単一の状態としてあるとされる。このように常に単一の総和としてあるということが、逆に意識の瞬間ごとの区別を成立させているのである。

というのは、意識は新しい感覚を付加されるたびにその総和としての状態を変えるため、たとえ新しい感覚が直前の感覚と同じものであっても、全体としての意識が「同じ状態を二度通過することは不可能になる」からである。このように考えると、同じ知覚が意識に与えられても、意識の諸状態はその瞬間ごとに区別を持つといえよう。

しかし、意識の全体が瞬間ごとに質的な区別を持つとして、そのどの瞬間においても融合した全体しか存在しないのであれば、結局、区別は成立しないのではないか。つまり、諸瞬間の区別とはあくまでも意識の変化を外部から見た場合の区別であって、主観的な意識は常にある瞬間にしかなく、したがって、そのような瞬間ごとの区別は実際には存在しないのではないか。諸瞬間の区別に対してはさらにこのような疑問が生じるだろう。

次節ではこうした問題について、また、意識の瞬間ごとの区別と融合がどのように両立するのかについて考察する。

第三節　区別と融合の並存

前節では、意識の諸状態を融合する記憶のはたらきが、瞬間ごとの意識の質的な区別を作ることを見てきた。

しかし、このような区別は、あくまでも意識の変化を外部から見た不連続性であって、主観的な意識は常にある瞬間にしかなく、したがって、そのような不連続性は存在しない、という見方もできるであろう。

実際、『試論』の、「区別なき継起」「明確な輪郭を持たず、互いに溶け合い浸透し合っている、質的な諸変化の継起」という持続の定義、また『物質と記憶』の、「諸々の心理状態の連帯は常に不可分の全体として意識に直接に与えられており、反省的思考だけがこれを区別のある断片に分割する」（MM, 185）といった表現は、これらの著作が意識の不可分な融合性のみを主張しているような印象を与える。

しかしながら、この点についてはすでに第一節で、記憶は融合した全体として存在するだけでなく、無数の個々の記憶として、意識の最深部に、「知覚し、考え、望んできたそのままの形で、その最も小さな細部に至るまで全て保存されている」（ES, 95）ことをみてきた[50]。持続における「瞬間」とは、その定義上、意識される最小の単位であるから、「いかなる細部ももらさずに全てを保存する」純粋記憶力は、過去の諸状態を、諸瞬間の差異をもそのままに、意識の最深部に全て保存していると考えなければならない。だとすれば、我々の意識の最深部には、いかなる瞬間にも、それまでの過去の全ての意識状態が、瞬間ごとの差異を保って、そのまま残存していることになるだろう。

この過去の諸記憶は、想起される際には必ず現在の知覚に融合して変容してしまうため、「実際には決して到達できない」（MM, 187）とされる。にもかかわらずそれが残存すると主張されるのは、先に述べたように、「選択のためには過去の経験が参照されなければならない」という、行動上の必要性からである。

けれども、そうした行動上の必要性以前に、過去がそのまま残存するというこのテーゼは、ベルクソンの理論において、記憶の想起が「弱い知覚」や単なる「想像」とは本質的に異なる、「想起」であるための不可避の前提になっている。というのは、もし過去が何の変更もなくそのまま残存するのでなければ、「想起」が「過去の想起」たる根拠としての、「過去そのもの」が失われるからである。

この点については次章で再び触れるが、純粋記憶力によって保存される過去の心的状態をあくまでも「現在の意識の深層」ないし「知覚と同時に共存する

もの」として現在中心にとらえると、記憶が脳に保存されるという主張と同様、諸記憶は「現在において過去とみなされるもの」に過ぎなくなり、経験されたままに残存する過去が、現在とは本質的に異なる「過去そのもの」である点を見失うことになる。その意味で、純粋記憶力が「過去そのものにおいて活動しているのであって、(身体の運動メカニズムのように) 不断に新たな現在において活動しているのではない」(MM, 168) とされる点は、ベルクソンの時間論を考える上で非常に重要といえる。

したがって、前節の図 3 のような円錐図の底面 AB で表される記憶の最深部には、あらゆる瞬間の「我々の過去の生」(ES, 95) そのものがあるといってよい。

では、この過去のあらゆる瞬間の間の区別とその融合はどのようにして両立しているのか。この点について手がかりになると思われるのは、すでに触れたように、記憶の融合した全体が「下意識」に位置付けられ、無数の個別的な諸記憶はさらに「その背後 dérrire の」「意識の最も暗い深み」(ES, 95) に位置付けられるような、意識の多層構造である。

無論、こうした意識の「下」や「深み」、あるいは「上」や「表面」ということは比喩に過ぎない。けれども、たとえば、食事をしながら本を読み、同時に外の物音を聞くというように、我々は通常、多くの知覚を並行して持っているものであり、その全てが同じ明瞭さで意識されているわけでもない。それらの知覚には明瞭さの差が存在し、深さの比喩はそうした明瞭さの度合いの差を示すのに適した比喩として、ベルクソンの議論の中に多用されているのである。

では、こうした深さの比喩に沿って意識の諸層を整理してみるとどうなるか。まず一番下の、意識の最深部には、誕生以来の、区別を持った諸瞬間の系列が位置付けられる。この記憶は「過去の生」とも言い換えられるとおり、過去の意識状態そのものであって、それゆえ、もしこれらの諸状態の一つをそのまま再現できるなら、それは過去のある瞬間に戻ることにも等しいといえる[51]。

次に、「最深部」よりは顕在的、最も明瞭な知覚よりは潜在的と考えられる「下意識」には、過去の諸記憶の融合した全体が位置付けられる。これは明確に対象化された知覚とは言えないが、その知覚を解釈する潜在的な背景として意識されている。「性格」や「人格」と呼ばれる、この過去の記憶の濃縮された全体の、意識への現れ方について『創造的進化』は次のように述べている。

> 我々の*性格*とは何か。それは、我々が誕生以来生きてきた歴史を濃縮したものにほかならない…〔中略〕…確かに、我々は過去のほんの一部でもってしか考えないが、希求し、意欲し、活動する場合には、過去の全体とと

もにそうするのである。我々の過去はそれゆえ、我々を推進する力や傾向という形でその全体が我々に姿を現している。とはいえ、表象になるのはそのわずかな一部にすぎないが。（EC, 5）

こうした叙述から、過去の諸記憶の融合した全体は常に知覚を裏打ちする形で漠然と意識されているといえる。とはいえ、これはまた、反省の努力なしには明瞭に対象化されて意識されることはなく、ただ我々が全人格をもって行動し、意欲する場合には、自らを押す力として意識的に自覚されることがあると考えられる。

それゆえ、初めの章で「自我の深層」に位置づけられた「意志」ないし人格は、意識の最深部というよりも、潜在的ではあるが全く無意識ではなく、知覚を裏打ちする形で漠然と意識に現前しているものとして、明瞭な意識の周縁部に位置づけられるといえる。

では、意識の表層に位置付けられるのは何か。ベルクソンは直前の諸瞬間が凝縮された知覚を「具体的な知覚 perception concrète」（Cf. MM, 31, 203）と呼び、さらにこの具体的な知覚に過去の類似の記憶が投影されて初めて「完全な知覚 perception complète」（Cf. MM, 31, 142）が得られると述べる。このような定義から考えると、意識の最上層にはこの「完全な知覚」が、そしてその下には「具体的な知覚」が置かれよう。

無論、これらは粗雑かつ不確定な区分であって、さらに意識の諸水準を細分化することも可能であろうし、意識が注意を向ける水準に応じて、いいかえれば、「我々の精神が自ら身を置く高さに応じて」（MM, 116）、どのレベルの記憶が最も明瞭に意識されるかも変化すると思われる。

ベルクソンは『試論』では「意識の表面」を外界の事物の相互外在性を留めるものとし、「意識の深層」を諸状態の不可分な融合としたが（Cf. DI, 93, 123）、こうした二分化は、『物質と記憶』において意識の最深部に「過去のそのもの」が置かれるようになる点で、未だ正確ではなかったと思われる。というのは、我々が事物の空間的な拡がりを知覚する以上、経験がそのまま保存されている最深部の「過去そのもの」には、知覚された事物の拡がりもそのまま保存されているはずだからである。

確かに、『物質と記憶』では、感覚が「拡がりを持つ extensif」（MM, 155）のに対して、現在の身体と結びついていない潜在的な「純粋記憶 souvenir pur」は「拡がりを持たない inextensif」（MM, 156）といわれる。けれども、これはあくまでも、純粋記憶が現在の物質界の中に拡がりを占めないという意味にすぎず、知覚されたのとは別の形で記憶が保存されるという意味ではない。

その点では、『創造的進化』でベルクソンが以下のように述べるとき、『物質と記憶』で「夢の平面」と呼ばれた記憶の円錐の底面において（Cf. MM, 181）、再び空間的外在性が存在する点が考慮されているように思われる。

> 自分をなるがままに任せて、活動しないで夢みるとしよう。途端に我々の自我は散逸する。我々の過去は、それまでは自ら集中し不可分な衝力となってこれを我々に伝えていたのに、今は互いに外在的な無数の記憶に分解する。記憶は互いに孤立化し、相互浸透しなくなる。我々の人格はこのようにして再び空間の方に降りてゆく。（EC, 202-3）

この章の結論として、持続の諸部分の区別と融合は、継起する意識の諸状態をそのまま保存する記憶のはたらきと、諸状態を単一の状態に凝縮する記憶のはたらきによって成り立つこと、そして、区別と融合の両立は、それらの内容が同時に異なる水準で意識されるという仕方で成立することがいえる。

第四章　過去における選択の自由

第一節　未来の存在の否定

これまでの章では、人格に基づいた行動はいかにして可能になるのか、また、人格を形成するとされる記憶はどのように保存されているのか、といった問題を、主に『試論』と『物質と記憶』を中心にして明らかにしてきた。本章と次の第五章では、自由や選択の問題についてほかの観点から、特に、ベルクソンの理論が含む問題点を取り上げる形で考えてゆくことにしたい。初めに本章では、先にも触れた「過去の実在性」というテーゼに関して、ベルクソンの理論が含むと思われる問題点と、その解決策を明らかにする。

たとえば、もし十年前の自分に会えるとしたら、私はその過去の自分に今後十年間の出来事を教えてやれるのだろうか。また、もし反対に、十年後の自分に会えるとしたら、私はその未来の自分に今後十年間の出来事を教えてもらえるのだろうか。

過去や未来の自分に会うということが、物理理論上あるいは技術上可能かどうかは別として、過去の自分というものが現在の自分同様に存在するなら、現在の私には彼に未来を教えてやることが定義上可能だろう。同じく未来の自分というものが存在するなら、現在の私に未来を教えられるだろう。このような過去・現在・未来を通した私の存在を認める時間概念は、ちょうど一直線状に並んだ諸々の瞬間の上を「現在」が推移してゆくような、決定論的な時間図式を想定している。このような時間図式に対して、直接経験の明証性を重視するベルクソンは、独自の立場から異議を唱えた。

ベルクソンによると、我々の知性は、元来行動上の必要から空間に即して発達した能力であり、言語や記号を介さずに意識に直接与えられる経験のみが、知性のそうした制限を免れて、空間的でない事象をありのままにとらえることができる。そして、意識に直接与えられる経験の中でも最も明確な経験としてベルクソンの挙げるのが、漸進的な変化としての「時間」の存在であり（Cf. PM, 166）、この時間の存在をベルクソンは未来の未決定性の証明と考えるのである（Cf. PM, 102）。

先述したような、決定済みの出来事が一直線状に並ぶ時間概念では、現在がこの特定の時点にある理由も、継起が存在する理由も説明できない。実際、もしそのような時間概念が正しければ、未来の出来事も過去の出来事と同様に決定済みなのであるから、一連の過去の出来事を我々が瞬時に想起できるように、

未来を一度に見渡すこともできたはずである。こうした考えからベルクソンは、未来が過去のように意のままに与えられないとすれば、それは未来が過去のようには決定されていないからである、と端的に結論する。つまり、意識が明確に経験するところの漸進的な変化は、未来の未決定性を証明しており、時間とはいわば選択と創造の乗り物なのではないか、とベルクソンは主張する（Cf. PM, 102）。

こうした立場から、あらゆる時刻の出来事を同列に置く直線的な時間図式とは異なり、ベルクソンの「過去」と「未来」に対する態度には大きな隔たりが生じている。直線的な時間図式においては過去と未来の区分は現在が座標軸上に占める位置次第であり、絶対的な区別を持たないが、現在を「選択」という行為に置くベルクソンの場合、過去はすでに決定済みのものとして「潜在 virtualité」というレベルで存在しているのに対し、未来は潜在というレベルでも存在していないとされるのである（Cf. PM, 112-113）。そのため、未来を含む時間を直線的に表すことには強く反対する一方、ベルクソンは過去を記号で表すことには寛容であって、むしろ自ら過去を直線的図式で表している箇所も少なくない。

しかしながら、このように決定済みの一連の過去の存在を認めることは、過去の時点の行為について、それ以外の行為は不可能だった、という解釈を許すことにはならないだろうか。この問題を解明することが、本章の目的である。

ではまず、過去の存在と対比する意味で、未来の存在について明らかにしておこう。ベルクソンの理論において、「未来」の存在はどのようにとらえられているのだろうか。

先に述べたように、ベルクソンは、未決定の未来を決定してゆくはたらきを時間の原動力ととらえた。

> もし時間が一種の力でないとしたら、どうして宇宙は状態を次々と展開するのに一定の速度を要するだろうか…〔中略〕…未来が現在の*後に来る*ように定められていて、現在と並んで与えられるようになっていないのは、未来が現在の瞬間に残りなく決定されてはいないからである。（EC, 339）

さらに、ベルクソンは、その未決定の未来を決定してゆくはたらきが単なる偶然ではなく、自由な選択であるとすれば、選択を行う者に対して可能な選択肢が予め描かれていなければならないと考えた。そして、前述のように生物の持つ知覚がこの可能な選択肢の予描にほかならないとされる（Cf. EC, 97）。

物質界から各々の身体と相互作用可能な部分だけが分離され、さらに過去の

記憶に照らしてその意味や有用性が主観的に解釈されて知覚となる（Cf. MM, 57）。すでに述べたように、これがベルクソンの知覚論の骨子であり、行動の選択肢としての知覚の存在もまた、自由な選択の証とみなされているのである（Cf. MM, 29）。

ところで、この行動の選択肢の中から、最終的に一つの行動が実現されるわけであるが、では可能な行動は未来の中に予め存在しているのだろうか。ベルクソンによると、このような問いはそれ自体が我々の思考に根深い一つの錯覚を含んでいる。

シュッツも指摘するように[52]、我々は過去の行動を振り返る場合ばかりでなく、未来の行動を想定する場合にも、その行動が完了された未来の時点に想像の中で身を置いている。しかし、過去がすでに現実化された事実であるのに対し、未来は定義上未だ現実化されていないのであるから、この想像された未来の行動に何がしかの現実性を与えて、「可能的に」どこか未来の中に存在するように考えるなら、それは錯覚に過ぎないとベルクソンは指摘する（Cf. PM, 110）。この問題については次章で再び述べるが、そのような錯覚については『思想と動くもの *La pensée et le mouvant*』（1934）の『緒論』、および同著に所収の1930年の論文、『可能なものと現実のもの *Le possible et le réel*』の中で詳しく論じられている。

新しいものの発明 invention や自由な創造に時間の原理をみるベルクソンにとって[53]、未来は未定であるのみならず、あくまでも白紙である。それゆえ、ベルクソンは「可能的に潜在もしくは先在する未来の行動の中の一つが選択されて現実化される」といった考え方も批判し、「どのような形でも、純粋に可能的という形でさえも、予め存在していないような行動」が実現されることが、自由な行動なのだと繰り返し主張する（Cf. PM, 10）。

こうした論述から、ベルクソンの理論においては知覚が選択のための可能な行動の予描とされること、ただし、この可能な行動とはあくまでも現在の知覚として存在するものであって、未来の存在は否定されることが明らかである。では過去の存在に関してはどうか。次節ではこの点を考える。

第二節　過去の実在と過去における自由

すでに述べたように、ベルクソンは「選択のためには過去の経験を参照しなければならない」（MM, 67）として、生存上より有効な行動を選択するためには過去の経験の残存が不可欠であると主張した。それゆえ、ベルクソンの理論では、自由な選択を肯定するところから、必然的に、過去の残存が主張されて

いるといえる。

では、具体的には過去はどのように残存しているのか。この点に関し我々は前章で、全ての過去の記憶の融合した全体が、顕在的な知覚を支える潜在的な背景として下意識の領域に存在すること、さらに、そのようにして知覚の周縁に現前する記憶の全体のさらに下の、意識の最も暗い最深部に、我々の過去の生そのものが残存することをみた。

融合した記憶の全体と、瞬間ごとの分節を保った過去の意識状態という二つの形式の記憶のうち、不可分な統一体をなして知覚に結びついているとされる記憶の全体については、記憶の想起の問題に関連してしばしば言及されるところである。けれども、ここでは、過去のある特定の瞬間における「私 je」や「自我 moi」の状態を問題にするために、「私の歴史における特定の出来事 événement déterminé de mon histoire」（MM, 84）の全系列としての、無数の個々の記憶の方に注目したい。

この個々の記憶は、経験されたままに保存されるが、再生される際には、現在の状況に合わせてその詳細さが大部分切り捨てられ、また現在の身体の状態に適合するその他の諸記憶や現在の知覚と混じり合って変容するため、初めに知覚されて保存されているままの姿で現在の意識に再浮上することはないとされる。けれども、前述のようにベルクソンの理論ではこの知覚本来の姿が意識に保存されているからこそ我々は想起の根拠を持つのであり、記憶の曖昧さやきまぐれ caprice はあくまでその想起に関るものであって、保存に関しては、完全かつ忠実 fidélité になされる点に留意しなければならない[54]。「過去とは、すなわち、一連の既成事実 une série de faits accomplis」（DI, 149）なのであって、過去が経験したとおりに忠実に保存されているということは、過去がすでに決定済みの事実であって変更不可能であることを意味するのである[55]。

この一連の出来事の系列についてベルクソンは、『物質と記憶』第三章で次のような図を用いて説明している（MM, 159）。

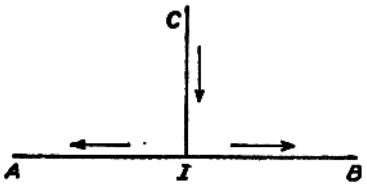

図 4

図中の直線 CI は下向きの矢印で示される時間の流れに沿って次々と配列されてきた過去の全ての記憶を表し、直線 AB は現在の空間とそこに広がる全て

の事物を、二直線の交点 I は双方の一部である現在の知覚を表す。

この図によってベルクソンが示そうとするのは、直線 AB にあたる現在の空間が、そのごく一部 I しか知覚されていないにもかかわらず、その全体が現実に存在するのと同様、時間の流れに沿った過去の意識状態の系列 CI も、その全てが現在の知覚 I と同じ実在だということである。

つまり、ベルクソンは「現在知覚されている部屋の、その壁の向こうの隣の部屋や、その向こうの道路や町」といった知覚外の事物と、「過去の全ての記憶」という知覚外の意識状態を、どちらも知覚外にあるが潜在的には意識されているものとして、同等の実在とみなすのである。

全ての過去の状態が、その生じた順序を保って潜在的に存在しているというテーゼは、前述のように、想起された記憶が現在の弱い知覚や想像ではない真の「記憶」であるための、不可避の前提である。ベルクソンのテーゼにおける過去の状態とは、過去の物質界と結びついた過去の意識状態を意味し、全ての過去の意識状態が意識の内に潜在しているとされるのであるが、しかし、これらは単に現在の意識の内に、いわば無意識の知覚として潜在しているわけではない。現在の意識のみを実在とする限り、想起された記憶には弱い知覚や想像と区別される根拠がないのであって、ベルクソンが主張するのは、過去の物質界と結びついた過去の意識状態が、意識が物質界の中に分割した時間的・空間的な輪郭を保って、ありのままの状態で、過去の意識それ自体として全て現実に存在し、現在の意識がその最深部でそれら全てに連続しているということである。

要するに、ベルクソンの場合、「存在」は「意識」と同義語ではなく、「無意識」の領域と重なるのであり（Cf. MM, 168）、無意識の存在の現実性 réalité を強調する意味では、「現実の存在・実在 existence réelle」（MM, 165）という表現が用いられる。

ここでは réalité を、観念性 idéalité、および虚構 fiction や空想 fantaisie と対置される意味での「現実性」として定義する。ただし、「現実」という語は、「現に在る」「実生活における」といったニュアンスを持つため、そうした意味合いを避けるべき文脈では実在（性）と訳しておく。

図 4 において現在の物質界である直線 AB が潜在的な意識とされ、その一部に主観的な知覚である I が位置づけられる点については、すでに述べたように客観的な「物質」と主観的な「物質の知覚」を全体と部分の関係にあるとみるベルクソンの認識論が土台にある。だが、ここでは直線 CI に注目して、過去の意識状態の全系列が、潜在と顕在の違いはあれど、現在の知覚と同等の実在とされている点を問題にしたい。

直線 CI によって、ベルクソンは過去の意識状態を、現在の中に想起されたものとしてではなく、文字通り過去に在るものとして表し、過去のあらゆる時点を並置的にとらえている。この場合、CI 上の一点（仮に D とする）は、その点が最先端であった時点では、現在 I がそうであるのと同じように、記憶ではなく知覚であったことになるだろう。D には様々な可能な行動が予描されていたはずであるが、ベルクソンの主張によればこれらの予描は諸々の行動についての漠然とした表象や観念に過ぎず、対応する行動そのものは D の時点では未だ存在していない（Cf. DI, 158-159）。ベルクソンの考えでは、未来は常に現在における予期としてしか存在せず、未来そのものは存在しないため、諸々の選択肢はいずれも実現可能であるとされる。

しかしながら、こうしたベルクソンの図式に対しては、以下のような決定論的な解釈が予想されはしないだろうか。すなわち、D が最先端の現在であった時点でそれ以降の未来が存在しないのは当然であるとしても、すでに特定の行動が果たされた I の時点が現在であるときには、D にとっての未来はすでに存在している。このとき、D が持つ選択肢の中のいずれが実現されるかは明らかであり、するとそれ以外の選択肢は、D の時点では可能であると思われていたにせよ、実際には実現可能ではなかったのだ、という解釈である。つまり、具体的な想定をすれば、I の時点を現在の意識状態とする私は、D の時点を現在とする私に対して、選択肢のうちどれが実現されるのかを絶対的な事実として教えられるということになる。

前述のように、『試論』では、時間を直線的な図式で表せばそのような決定論的な解釈が成り立つことが認められていた。その上で『試論』は、「流れた時間 le temps écoulé なら表せるが、流れる時間 le temps qui s'écoule は空間的な図式では表せない」（DI, 166）として、漸進的な変化としての時間の図式化それ自体を否定することで、そうした決定論的な解釈を退けた。けれども、出来事の系列としての「流れた時間」に関しては、ベルクソン自身が先のような図式を描いている以上、これに対する決定論的な解釈には反論されなければならないだろう。

確かに、現在において私が自由に選択できるとしても、過去の出来事はすでに決定済みのものであり、いずれにせよ私にはそれを変えることはできない。けれども、そのように、現在において過去が変更不可能であることと、過去において選択の自由がなかったことは、全く別の事態である。ベルクソンの描く過去の系列 CI は、たとえば今私の本棚にある小さいころのアルバムのような、現在における過去の記録ではなく、現実の「過去そのもの」である以上、その系列上のどの時点においても選択は可能でなければならないのである。

ここで問題となるのはつまり、線分 DI は D にとって可能な唯一の系列を表しているのか、という点である。もし D にとっての未来が状態 I に至る一連の系列以外に存在しないのであれば、確かに、いかに多くの選択肢が D において予描されていようと、その後の I において実現されている行動以外の行動が実現されることはないといえよう。

では、このような解釈は、ベルクソンの理論からいかにして反駁されうるのだろうか。次節ではこの点を考察する。

第三節　系統樹のアナロジー

前節で述べたような問題に対しベルクソン自身は明確な解答を与えていないが、一つの手がかりになると思われるのは『創造的進化』にみられる次のような叙述である。

> 我々は誰でも自分の歴史をひとめ振り返るならば、幼児期の自分の人格には不可分ながらも様々な個性が結合されていたのを認めるだろう…〔中略〕…けれども融合していた諸々の人格は成長するにつれて両立できなくなり、我々は各々ただ一つの人生しか送れない以上、そのどれかを選ばされることになる。実際、我々は絶えず選択し、したがってまた、多くのものを捨て続けている。（EC, 100-101）

ここでは、系統樹で表されるような生物進化の道筋と、個人の人生の歴史が、類比的に論じられている。ベルクソンの考えでは、個々の人間が、成長するにつれて自分の持っている様々な可能性の中の一つを実現してゆくように、あらゆる生命が共有する「生命の根源のはずみ l'élan originel de la vie」（EC, 97）という力は、自らの内に潜在している無数の傾向が発現する仕方を、生物の種 espèce という形で選ぶ[56]。たとえば、人類と昆虫はかって進化の途上で別々の方向に分かれたが、その分岐点で、「生命に内在する力は、…〔中略〕…（知性と本能という）生の物質 la matière brute に対する二通りのはたらきかけ方の間で選択をしなければならなかった」（EC, 142）といわれる。

もっとも、そこで知性をとるか本能をとるかの選択を余儀なくされたのは、正確には個々の「種」であって、生命に共通の力ではないだろう。個人がその人生においてただ一つの可能性しか実現できないのに比べ、自然界には様々な可能性を実現する生物種が並存できるという点で、明らかに個人の意識の発展と生命の進化には相違がある。ベルクソンはこの点を自覚しており、先の引用

の文章に続けて、「ただし、自然は無数の生命を操れるから、決してそんな犠牲を払う（一つを選んでほかの多くを捨てる）には及ばない。自然は様々な傾向が成長して枝分かれしたままに保存しておく」（EC, 101）とその相違点を指摘している。

このように、ベルクソンは我々の人生を「絶えず多くのものを捨て続ける選択の連続」とみなすのであるが、しかし、もし私の人生の歴史が唯一の直線的系列でしかありえないものならば、ほかの多くの道などは存在しないのだから、過去の私が現在の私に至るために多くのものを「捨てる」ということも誤りであろう。

つまり、我々の人生が「絶えず他の多くのものを捨て続ける」選択の連続であるというテーゼは、そもそも、系統樹のような多くの分岐点を持つ道筋全体とのアナロジーによって成り立っているのである。そうした多くの分枝を持つ道筋の全体を一つの人生とみなして初めて、現実化された一本の経路以外の道を「捨てる」ことができる。そしてまた、このような見方だけが、図４の直線 CI で表されるような一連の過去の実在性と、自由な選択を両立させうるのではないか。

というのは、そのように一人の人間の歴史を系統樹のアナロジーで理解した場合、我々の現に選択した人生は、諸々の並存する人生の中の一つとみなせるだろうからである。その場合、選択が行われる以前の過去の時点からみた未来は、我々の現に選択した世界ただ一つとはならない。先の図の現在 I においてすでに特定の行動が実現されている事実と、過去の時点 D においてそれ以外の行動も実現可能であることは、この場合にのみ両立できるのではないか。

ただし、複数の可能な世界の並存が、直ちに過去における選択の自由を保証するわけではないだろう。というのは、複数の世界の並存が事実であっても、その並存する世界のそれぞれが決定論的な発展をするという場合も考えられるからである。たとえば、I と I'という複数の世界が並存するとしても、I を選択する以前の過去と I'を選択する以前の過去がただ一つの状態 D でなく、予め I に至ることを決定付けられた D と I'に至ることを決定付けられた D'という複数の状態であり、それぞれが決定論的な発展をするとすれば、D における選択は成り立たない。その場合には、単一の過去の状態 D が I と I'という複数の状態に発展するような分岐型の図式が描かれるのではなく、D→I と D'→I'という複数の直線的な図式が描かれることになるだろう。

実際、『試論』においてベルクソンは、第一章で引用した二者択一型の図式（下図 2）に関連して、「実際に X という行動が果たされたなら、O 点に位置付けられるのはどちらでもかまわない活動性などではなく、ためらいという見

かけにもかかわらず、予め OX の方に向けられていた活動性である」（DI, 134）と主張していた。

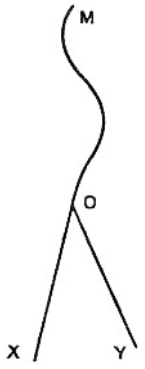

図 2

このようなベルクソンの見解からは、図 4 の点 I において実際にある行動が実現されているなら、それ以前の点 D に位置付けられるのは、予め I における行動を決定付けられていた自我ということになるのではないか。そして、もし複数の未来が存在するなら、それぞれの未来に向かう、同じ数だけの複数の自我が予め存在していたことになるのではないか。

R.E.ラコンブは、『試論』におけるベルクソンの持続の概念を、決定論につながる単一の直線的な発展と解し、「自由な選択を認めるということは、特定の一つの人格が、その内に、どの瞬間にも、その中の一つだけが実現されるような多くの人格を、可能性として含んでいると認めることにほかならない。ベルクソンのように、決定的な瞬間までは同一で次の瞬間には異なるような二つの心的生を考えることができないと暗黙裡に認めることは、予め決定論に与することである」[57]と批判した。

ラコンブの述べるように、単一の人格が、何らかの差異が生じた瞬間に二つの異なる人格になるのではなく、予め可能な行動の数だけの異なる人格が存在し、それぞれが決定論的な発展をするとすれば、複数の世界の並存は何ら自由な選択を支持するものとはならない。

けれども、たとえば図 2 の X や Y において異なる行動が実現されているとき、ベルクソンの理論では、本当にそれらの行動を実現する以前の点 O には、それぞれの方向に決定付けられた複数の自我が存在していたことになるのだろうか。ベルクソンの理論において自我の同一性や複数性はどのように考えられていたのか。

先の章で明らかにしたように、人格ないし自我とは、過去の全ての意識状態が融合した、その個人に固有の傾向や力であった。それゆえ、自我の同一性と

は過去の経験の同一性であることになる。

たとえば、ベルクソンは『試論』の第三章で二人の人物、ポールとピエールを想定し、ピエールの行う選択をポールが確実に予見できるか否かを論じている。この問いに対するベルクソンの答えは、ピエールの状態を完全に知るためには、ポールはピエールの過去の全てを「いかなる細部も免じられることなく、意識の諸状態を一秒たりとも縮めずに」(DI, 141)、自ら経験しなければならず、その場合には、結局ポールとピエールは同一人物であることになるので、もはや予見は問題にならないというものである。

> もし、ポールとピエールが同じ順序で同じ感情を経験したとすれば、また彼らの心が同じ歴史を持っているとすれば、いかにして両者を区別できるだろうか。…〔中略〕…ところで、仮定上それらの心は同一の経験を持っており、同一の過去と同一の現在を持っているのだ。…〔中略〕…つまり、ピエールとポールはただ一人の同じ人間であることになる。(DI, 141)

行為の予見可能性に関する議論はともかく、ここで注目したいのは、ピエールとポールという二人の人物が「同じ順序で同じ感情を経験し、彼らの心が同じ歴史を持っているとすれば」両者は要するに「ただ一人の同じ人間」だといわれる点である。

先に、「実際に X という行動が果たされたなら、それ以前の点 O に位置付けられるのは、予め X の方に向けられていた活動性である」とするベルクソンの見解からは、たとえば図 4 の点 I において実際にある行動が実現されているなら、それ以前の点 D に位置付けられるのは、予め I における行動を決定付けられていた自我ということになるのではないか、そして、もし個人の人生の歴史を系統樹型の図式で考え、X や Y といった複数の世界を想定するならば、それ以前の時点 O には、それぞれの方向に決定付けられた、複数の自我が予め存在していたことになるのではないか、という問いを立てた。

この問いに対し、自我の同一性が、上述のように過去の経験の同一性と同義であるとすると、仮に、諸々の未来に向けて決定付けられた複数の自我が存在するとしても、それらが同一の歴史を持っている限り、それらは結局ただ一つの同じ自我だということができる。つまり、I の過去の意識状態 D も、I'の過去の意識状態 D'も、少なくともその時点までは異なる経験を持たないのであるから、これらは結局、ただ一つの同じ自我だということになる。そして、ただ一つの同じ自我が複数の方向に決定付けられているということは、結局、いかなる方向にも決定付けられていないということに等しいであろう。

「あの時別の道を選んでいたら今頃はそうなっていた」ような世界がどこかに並存するとして、現在のこの「私」の過去である「あの時の私」と、別の道を選んだ「私」の過去である「あの時の私」は、それまでの経験が同じである限り、ただ一人の同じ「私」であり、どの方向にも必然的に決定付けられてはいないことになる。

このように、異なる行為が果たされる以前の自我が、未だ単一の自我であるとすれば、ラコンブが自由な選択の条件とした、「決定的な瞬間までは同一で次の瞬間には異なるような二つの心的生」がベルクソンの持続理論においても考えられるであろう。系統樹のアナロジーはまさにそのような、単一の直線的系列ではない、分散型の発展への解釈を開くと思われる。

無論、「様々の種に対しその系統図として提示されるものは、ほとんど常に問題を持つ」(EC, 106) とベルクソンも述べるように、どのような図式であれ、流動的な現実の変化を全的に表現することなどできない。けれども、系統樹型の系列においては、単一の直線的系列とは異なり、少なくとも、過去における選択の余地が見出されるのではないか。

それゆえ、結論として、個人の人生の歴史を、系統樹が表すような進化の道筋と類比的にとらえ、単一の自我が異なる自我に分散するとみなすなら、一連の過去の系列の実在性を主張するベルクソンの理論においても、過去における選択の自由は否定されないといえる。

第五章　潜在的なものの領域

第一節「これから知覚される」物質の領域

前章では過去の実在性と過去における選択の自由を考察した。しかしながら、選択や自由に関しては、過去のみならず未来の側面にも問題が存在する。本章ではその問題を、ベルクソンの知覚理論を中心に解明する。

先述のように、ベルクソンは『物質と記憶』で、客観的な物質界の存在を前提し、知覚作用とはその物質界の中から各々の行動に関係する部分だけを選択的に分離するはたらきだと考えた。ベルクソンの考えでは、具体的な知覚の基底にある「純粋知覚」は、我々の知覚作用によって創り出されるのではなく、潜在的な物質界の全体から身体の行動可能性を基準にして分離され、顕在的な意識となるのにすぎない。

無論、このようなベルクソンの知覚理論は、『物質と記憶』の第二章で展開される様々な検証を経ても、いくつかの事実に適合する仮説であるにとどまり、論理的に論証もしくは実験的に検証された理論になっているとは言いがたい。

けれども、その理論は、観念論と唯物論の対立という認識論上の根本問題を行動の観点から解決する仮説であり、この意味で現代的な意義を持っていると思われる。というのも、我々は論理的には「客観的な物質界」の存在を証明しえないままに、事実上はそれを現実に存在するものとして生活するほかなく、また、もはや記憶や知覚に関する大脳生理学上の研究成果等をも無視し得ないのに対して、そうした生活の在り方や生理学的な事実を説明しうる哲学的な理論は多くはなく、ベルクソンの仮説はその有望な一つと思われるからである。

『物質と記憶』の第一章でベルクソンが客観的な「物質界 monde matériel」を「あらゆる事物の潜在的な知覚 perception virtuelle」(MM, 36) と言い換え、この「物質の全体 masse matérielle」を「可能な possible」（MM, 36）ものとして語るように、冒頭に述べたようなベルクソンの知覚理論は、未だ顕在的に知覚されていない潜在的な物質としての「可能なもの le possible」の存在を含意しているように思われる。

他方でベルクソンは、『創造的進化』や『思想と動くもの』の中で、生物の自由な選択や創造を支持する立場から、その現実化に先立つ「可能なもの」や「未来 avenir」の存在を厳しく批判した。それらの著作ではベルクソンは、すでに与えられている可能性を現実化するといった見方を否定して、「その現実化にあたり、いかなる仕方でも、純粋な可能性という形でさえも先在していないような、全く新しい行動」（PM, 10）の実現に、時間を進展させる原動力とな

る生物の自由を見出している。

では、『物質と記憶』が導く、未だ知覚されていない「可能な」物質の存在と、『創造的進化』や『思想と動くもの』における「未来」や「可能なもの」の否定は矛盾しないのだろうか。この問いに答えを与えることが、本章の目的である。そのために、以下ではまず、『物質と記憶』の知覚理論を章ごとに再考し、その理論において「過去」でも「現在」でもない、主観的な知覚にとって「未来」にあたる物質の存在が重要な役割を果たしていることを論証する。

ベルクソンは『物質と記憶』の第一章で、知覚される以上の存在を認めない観念論と、物それ自体の実在を認める実在論に対し、自らの認識論上の立場を以下のように要約した。

> 物質には、現に知覚されている以上のものがあるが、しかし、それと異なったものがあるのではない…〔中略〕…意識的な知覚は、物質から我々の様々な欲求に関係する部分を分離あるいは《分別》することで成り立っている。（MM, 74）

ベルクソンはさらに続けて「知覚と物質の関係は、部分と全体の関係にすぎない」（MM, 75）と述べ、主観的な「物質の知覚」を客観的な「物質それ自体」の一部分としてとらえる。主観的な知覚には、客観的な物質界という「非個人的な基盤」があり、この基盤は「実在そのもの réalité même」（MM, 69）とされること、物質の一部でありまた知覚の核となる「純粋知覚」において、この「実在そのもの」に直接に接触できることについては、すでに本論文の第二章で触れた。

先に述べたように、『物質と記憶』の第一章では、「あらゆる事物の潜在的な知覚」（MM, 36）としての「物質界」が前提され、この単に可能なものとしての物質の全体の中から、「私の身体」を中心とした知覚が「切り離される isoler」（MM, 36）といわれる。

> 与えられているのは、物質界のイマージュ全体 la totalité des images du monde matériel と、それらのイマージュの内部の要素全体である。…〔中略〕…物質の実在は、物質の要素全体、およびそれらの要素間のあらゆる作用で成り立っている。我々の持つ物質の知覚とは、諸々の物体に及ぼしうる可能な行動を表しており、これは、我々の持つ諸欲求、より一般的にいえば諸機能と、利害関係を持たないものを除去することで生じる。（MM, 34-35）

引用にみられるように、ベルクソンの考えでは、知覚というものが存在するそもそもの理由は、生存上より有効な行動を取るために、物質界の中から身体と利害関係を持つ領域を抜き出して可能な行動を描き出すことにある。そのためさらに、過去に知覚された全ての記憶の潜在的な残存と、それらの記憶が類似の状況で想起され、現在の知覚に重ねられて可能な行動を具体的に描き出すことが必要だとされるのであるが、ここでは全体とその部分としての物質と知覚の関係に論を絞るために、記憶が重ねられる以前の「純粋知覚」を中心的に扱うことにしたい。

『物質と記憶』の第一章では、物質と純粋知覚の関係はまず空間的な全体と部分の関係で論じられているが、次に時間的な持続の側面が考慮に入れられ、「我々の純粋知覚は、これをどれほど短時間のものと考えるにせよ、実際には常にある一定の持続時間を占めている」（MM, 72）として、純粋知覚が一定の持続の厚みを持って物質から切り取られ、感覚的性質に凝縮されることが述べられる。これに伴い、第一章の初めで主に空間的な拡がりとして扱われていた物質は、第一章の後半では「無数の継起的な振動 les ébranlements multiples et successifs」（MM, 74）の連続として、そして第二章の初めでは、我々がそこに瞬間的な断片を切り取る「普遍的生成 le devenir en général」（MM, 81）として、また第三章では「生成の連続体 la continuité de devenir」（MM, 154）として、さらに第四章では「宇宙の連続体 la continuité de l'univers」（MM, 222）ないし「実在の運動の連続体 la continuité mouvante du réel」（MM, 237）としてとらえられることになる。

物質の一部である純粋知覚が凝縮または濃縮されて感覚的性質になる点については、先に赤色の光の例で述べておいた。そこで明らかになったことの一つは、純粋知覚の占める時間的・空間的な幅が、身体の行動能力の限界に基づいて定められていることであった。純粋知覚の時間的な幅とは、意識によって弁別可能な最小の時間差以下の幅であり、空間的な幅とは、知覚の届く空間的領域、つまり、物質界の中の、その生物の可能な行動に関係する範囲であった。

この純粋知覚の解釈には諸説あるが、本論文ではそれを、無数の振動のような、物質界の一部分としてとらえる。したがって、純粋知覚は、「知覚」と名づけられているものの、それ自体として、つまり無数の継起的変化として知覚されるのではなく、それらが単一の直観に凝縮された感覚的性質になって初めて知覚されることになる。この意味で純粋知覚は、「事実上というよりも理論上 en droit 存在する知覚」（MM, 31）と言われている。

本節の議論において重要になるのは、全体の中に埋没していた物質の一部分

が、身体の行動能力や欲求を基準にして抜き出され、それによって主観的な知覚になるという構造である。

さらに、そうした構造に関連して、物質の全体に潜在的な性格が与えられていた点も確認しておかなければならない。全体から分離された主観的な知覚が「生彩ある絵のような」（MM, 73）意識的な知覚と呼ばれるのに対して、物質の全体は、ちょうど様々な色の光が混じると無色になるように、諸々の性質が「互いに調和し合い、補い合い、中和し合って」（MM, 246-247）「潜在的で、中性化した」（MM, 33）状態にあるとされていた。

それゆえ、ベルクソンの理論における知覚作用とは、要するに「潜在的 virtuel な全体」の一部分を分離して「現在 actuel」にする、いわば、現勢化 actualiser の作用であることになり、その意味で「知覚は選択でしかなく、何も生み出さない La perception n'est alors qu'une sélection. Elle ne crée rien」（MM, 257）といわれる。つまり、知覚、正確に言えば、物質の一部である純粋知覚は、我々によって創造されるのではなく、分離されて actuel なものになる以前から、潜在的な全体に埋没した状態で存在していたと解釈せねばならない。

ここまで、ベルクソンの知覚理論の基本構造を確認してきた。では、このような理論において、未だ actuel になっていない物質の存在は、どのように位置付けられるのだろうか。

ベルクソンは『物質と記憶』の第三章で、全ての過去の記憶が無意識の状態で残存していることを示すために、すでに引用した図を描いてこれを説明した。（MM, 159）

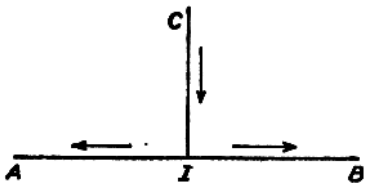

図 4

前章で触れたように、図の垂直の直線 CI は下向きの矢印で示される時間の流れに沿って順に配列されてきた過去の全ての記憶を表し、その先端の点 I は「現に意識に与えられている donné actuellement à notre conscience」「現に知覚されているもの actuellement perçu」（MM, 158）としての知覚を、水平の直線 AB はこの現在の知覚と「同時に空間内にある全ての事物」（MM, 158）ないし「同時に空間内に配列されている全ての事物」（MM, 161）を表すものとされる。

ベルクソンは「なぜ直線 AB は知覚されていなくてもその全体が現実であるとためらいもなく認められるのに、直線 CI は現に知覚されている I だけが真に存在する唯一の点と思われるのか」（MM, 158）と問い、たとえば今自分のいる部屋の、その隣の部屋や、その外の通りや町、といった世界 AB が現実に存在するのと同じように、過去の意識状態の系列 CI も全て存在するとした。

さらに、ベルクソンは「知覚されていない物質的対象、イメージされていないイメージとは、一種の無意識の精神状態でなくてどのような存在だろうか」（MM, 158）と述べ、直線 CI という過去の諸記憶と、直線 AB という知覚外の諸事物は、共に我々の無意識にあるものと考えた。そして、これらの潜在的な存在はどちらも意識的な知覚 I と同等の現実的な存在 existence réel であるとされる[58]。

ここで留意すべきは、「実在そのものである生成の連続体の中で、現在の瞬間とは、我々の知覚がこの全体 masse をその流れる途上で切り取るほぼ瞬間的な断面であって、この切断面が、我々が物質界と呼ぶところのものにほかならない。我々の身体はその断面の中心を占めている」（MM, 154 下線は引用者による）といわれるように、『物質と記憶』の第一章では「実在そのもの」であり、その中から我々が純粋知覚を切り取るような「物質の全体」とみなされていた「物質界」が、この箇所では、「実在そのものである生成の連続体」の切断面である「現在の瞬間 le moment présent」の意味で使われていることである。

それゆえ、ここで直線 AB が表す「物質界」は、あくまでも、一般に我々が「物質界」と呼ぶところの「現在の物質界」であって、生成の連続体という「物質の全体」の瞬間的な「断面」として考えなければならない。

潜在的な物質の全体である「生成の連続体」を我々の知覚が「ほぼ瞬間的 quasi instantanée」に切り取るといわれるのは、先述のように、我々にとって最短の瞬間である純粋知覚でさえも、それが現実のものである以上は一定の持続時間を持っており、数学的な点のような厚みのない瞬間ではないためである。そして、「我々の知覚は宇宙を生彩ある一連の、ただし不連続な絵として我々に示す。現在の知覚から、その後に来る知覚を導き出すことはできない」（MM, 72-73）と言われるように、継起する諸瞬間は、本来互いに不連続なものとされていた。

こうした論述から、直線 AB が持続の最小単位としての、不断に刷新される「瞬間的な現在」を表すならば、直線 AB は純粋知覚と時間的な厚みを等しくする「ほぼ瞬間的」な物質界の断面であることになり、これは後続する瞬間に知覚される物質をその中に含まないことは明らかである[59]。

しかしながら、ここで、直線 AB の両義性が問題となる。「現に与えられた

actuellement donné」「現在の現実 réalité présente」（MM, 160）とされる直線 AB は、一方では、現在の知覚と同時の諸事物を意味し、その限りで、現在の actuel なものである。他方で、それは、明瞭な知覚 I の外部にあるという意味では、潜在的 virtuel な性格を持つのである[60]。

「知覚は選択でしかなく、何も生み出さない」といわれるように、知覚作用を無からの「創造」ではなく、潜在的な全体からの「選択」による「現勢化」とみるベルクソンの理論においては、すでに現勢化された現在の物質界だけではなく、これから現勢化される潜在的な物質、いわば、可能な純粋知覚の全体としての、未だ知覚されていない物質の存在が不可欠である。

しかしながら、従来、直線 AB が知覚外の潜在的な物質界を表すことから、知覚と同時にある現在の諸事物として定義されたこの直線 AB 上に、これから現勢化される潜在的な物質が暗黙裡に混同され、そのため、本来現在の知覚と同時にはありえないこの潜在的な物質の存在が、見過ごされてきたのではないだろうか。

確かに、直線 AB と点 I の関係によって、潜在的な物質の全体と、そこから分離される主観的な知覚の関係は成り立っているように見える。実際、直線 AB については「直線 AB に沿って並んでいる事物は我々がこれから知覚しようとしているものである」（MM, 159）「空間は近い未来の構図を一挙に示す」（MM, 160）のように述べられており、こうした表現が直線 AB 上に、知覚と同時にある現在の物質界だけではなく、これから知覚される潜在的な物質をも位置付けられるような印象を与えていることは事実である。

けれども、直線 AB で表される「今知覚している部屋の、その壁の向こうの隣の部屋や、住んでいる通りや町」（MM, 158）といった事物が、「これから知覚しようとしているもの」だといわれるのは、たとえば「今現在家の外にある通りや町は、私がこれから外に出て見ようとしている通りや町である」と言うように、現在の事物とこれから知覚される事物が名前の上で同じものであるという意味に過ぎず、これから現勢化される潜在的な物質そのものが、現在の知覚と同時の直線 AB 上にあることを意味しない。でなければ、家の外に出た私は、私が家の中にいたとき同時に家の外にあった事物を見ることになるだろう。

あるいはまた、ある事物までの空間的な距離は、その事物と身体が相互作用するまでに要する時間に比例するため、「空間的な距離は、脅威や期待の時間的な近さの目印である。それゆえ空間は近い未来の構図を一挙に示す」（MM, 160）と言うことができる。しかし、この場合も、たとえば目の前のボールよりも数メートル先のボールの方がより未来の脅威を表すように、空間的な距離と時間的な切迫性は比例することが述べられているのに過ぎず、中心 I から離

れて直線 AB の両端にゆくほど時間的に未来の事物が位置づけられるわけではない。

元来、直線 AB と点 I の関係によって、潜在的な物質の全体とそこから分離される主観的な知覚の関係が成り立つためには、まず、点 I という中心を持たない直線 AB の全体だけが与えられうるのでなければならないだろう。しかしながら、ベルクソンの理論では身体を中心とする知覚 I が現在平面 AB を規定するのであって、その逆ではない。「現在」というものが、「私の身体」に対する物理的な利害関係に即して規定される以上、中心を欠いた現在平面を考えることは背理であろう。

これから現勢化される潜在的な物質は、未だ知覚されていないとはいえ、先に第二章で述べたとおり、我々の無意識に位置付けられる。そして、無意識ないし潜在的な意識とは、とりもなおさず、現在の意識の潜在的な領域なのであるが、しかしながら、このことは、そうした潜在的な領域が、現在の知覚と同時平面にあることを意味しない。図 4 の直線 CI で表される過去の諸記憶が、我々の無意識に潜在しながらも、決して現在の知覚と同時平面には置かれないように、諸瞬間の「継起」が成り立つためには、単一の意識の持続のうちにも、瞬間ごとの「現在」の限定性が認められなければならないのである[61]。

無論、現在の物質のうち、たとえば脳の状態は、外界の知覚に対する身体の必然的な諸反応を開始し準備する運動であり、その意味で「生まれつつある諸反応 réactions naissantes」（MM, 19）と呼ばれる。また、純粋知覚も我々の可能な行動を素描するという意味で、「生まれつつある諸行動 actions naissantes」（MM, 71）のように呼ばれる。「現在」のうちに含まれるこうした行動の準備状態は、未だ現勢化されていない「潜在的な行動」と呼ばれることがあるが（Cf. MM, 16, 19）、しかし、このことは、現在平面のうちにこれから現勢化される潜在的なものが含まれることを意味しない。そのような「生まれつつある行動」は、それ自体はすでに脳内の物理的運動や物質の一部分として特定の空間を占めるのであるから、これらはやはり、それ自体としてはすでに限定され、現勢化したものなのである。

要するに、潜在的なものの一部が限定されて現勢的になってゆくというベルクソンの知覚理論では、未だ限定されていない潜在的な全体の存在が不可欠であり、すでに限定されたものは、たとえ明瞭に知覚されていないという意味で潜在性を持つにせよ、また、可能な行動を素描しているという意味で潜在的な行動と呼ばれるにせよ、現在の諸事物の一部を構成する以上、その潜在性は、未だ限定されていない潜在性と同一視することはできないのである。そして、純粋知覚論が要請する、未だ限定されていない潜在的な物質、「生成の連続体」

の残りの部分は、この、すでに限定された「現在」に対して、「未来」の領域に位置付けざるを得ないのではないか。

実際、『物質と記憶』の中でベルクソンは、潜在的なものの一部を選択的に現勢化してゆくこうした知覚作用を「過去が未来をかじりとる進展」（MM, 167）と表現した。

けれども、周知のように、ベルクソンは『創造的進化』や『思想と動くもの』の中で、未だ現実化[62]されていない「未来」や「可能なもの」の存在を厳しく批判する。すると、本節の帰結は、それらの批判と矛盾するのだろうか。そもそも、未来に対するベルクソンの批判はどのような根拠でなされたのか。

第二節　「可能なもの」と「未来」の批判

『創造的進化』の冒頭でベルクソンは再び、「持続とは過去が未来をかじって進みながら膨らんでゆく連続的な進展である」（EC, 4）と述べる。この著作でベルクソンは生命と物質の関係を、水の流れが土手を切り崩して運河を拓いてゆくような、創造のエネルギーとそれに抵抗する素材のイメージでとらえるが、両者のこうした関係は、精神のはたらきと、そのはたらきを受ける物質という、『物質と記憶』の枠組みを基本的に継承するものものといえるだろう。

『試論』において「継起なき同時性」（DI, 81）の世界とみなされた主観的な意識の外の物質界は、『物質と記憶』では我々の意識の持続とは比較にならないほど細かい瞬間に分割されている「一つの持続」（MM, 234）としてとらえなおされ、さらに『創造的進化』では「生命の運動とは逆向きの運動」（MM, 264）として定義される。これらの著作間にテーゼの一貫性をみるか根本的な転換をみるかに関しては様々な議論があるが、本論文では、それらの間に矛盾や根本的な変化はないという立場をとる。

確かに、『試論』では認められていなかった物質それ自体の持続が『物質と記憶』では認められるようになるが、それは、『試論』が「意識に直接与えられた経験」を対象としていたのに対し、『物質と記憶』は「我々の有用性の方向に曲がって*人間の*経験となる、その決定的転回点を越えて経験の源をたどる」（MM, 205）領域にあえて踏み込んだためと考えられるからである。

主観的な意識の外にある「物質それ自体」の持続については直接に経験されないため、『試論』では未だ物質について、「持続していると言うべきではないが、我々が自分の持続の継起的な諸瞬間にそれを観察する際には、なぜかはいえないがいつも変化していることを認めざるを得ない」（DI, 171）と言う以上の根拠がなく、経験を超えた領域を論じた『物質と記憶』の第四章で初めて、

主観的な意識をも含んだ包括的な宇宙全体の持続への言及がなされえたと解される。

冒頭の引用では我々の意識の持続が「未来をかじって進む進展」と表現されているが、他方で、ベルクソンは同じ『創造的進化』や『思想と動くもの』の中で、「未来」や「可能なもの」の存在を強く否定する。では、そもそもこれらの概念に対するベルクソンの批判はどのような根拠でなされたのか。

まず、「未来」の未決定性について、ベルクソンは『創造的進化』で以下のように述べていた。

> 一本の映画のフィルムのように全てが一度に与えられないのはなぜか。…〔中略〕…未来が現在の*後に来る*ように定められていて、現在と並んで与えられるようになっていないのは、未来が現在の瞬間に残りなく決定されてはいないからである。（EC, 339）

『思想と動くもの』に収められた論文、『可能なものと現実のもの *le possible et le réel*』の中でも「時間とは創造と選択の乗り物ではないか。時間の存在は事物のうちに不確定があることを証明しているのではないか」（PM, 102）と問われていたように、ベルクソンは時間の進む原動力を生物の自由な選択や創造に求め、漸進的な変化としての時間の存在から、未来の未決定性を導いた。

さらに、ベルクソンは同じ見解から、その現実化に先立つ「可能なもの」の存在を錯覚として厳しく批判する。このいわゆる「回顧的な錯覚」に関しては、上述の論文『可能なものと現実のもの』の中で詳細に論じられている。

そこでのベルクソンの主張によれば、我々は「著作活動を始める以前のシェイクスピアには、すでに『ハムレット』を書く可能性があった」というように、すでに現実になったものをその現実化以前から可能であったように思いがちである。けれども、それが「可能 possible」であったと言えるのは、「それを現実化するために乗り越えられないような障害がなかった」という意味でしかなく、「観念の形で、その現実化以前から存在していた」という意味ではありえないとベルクソンは指摘する[63]。

> 音楽家が自分の作ろうとするシンフォニーについて明確で完全な観念を持つと同時に、そのシンフォニーは完成される。それゆえ、そのシンフォニーは、芸術家の心にも、まして、非個人的にせよ単に潜在的にせよ、我々の心に比すべき別の心にも、現実のものになる前に可能なものという資格で存在してはいなかったのだ。（PM, 13）

ここでベルクソンが批判しているのは、後に具体的に現実化されるような観念が、その現実化以前から意識の中に潜在的に存在していたという考え方であり、つまり現実的な事物と連続的な同一性を持つものとしての事物の可能性の、その現実化以前における潜在である[64]。「現在の現実性を可能性もしくは潜在性の状態で過去の内に投げ込む」（PM, 19）、こうした考え方をベルクソンは錯覚として批判し、自由な行動や創造はすでに与えられている可能性を現実化することではないとして、「その現実化にあたって、いかなる仕方でも、純粋な可能性という形でさえも先在していないような、全く新しい行動」（PM, 10）こそが自由であると主張した。

けれども、我々は前節で、ベルクソンの知覚理論においては、未だ現実の経験となっていない純粋知覚を含む潜在的な物質の存在が要請されることを帰結した。これは、自由な選択や創造を支持する立場から「未来」や「可能なもの」の存在を否定したベルクソンの見解に反するのではないか。そうだとすれば、ベルクソンの理論の内には矛盾が含まれるのだろうか。

この問題に解答を与えるために、以下ではまず、知覚と行動に関する『物質と記憶』の理論を再構成してみたい。

潜在的な物質の全体からその一部が切り取られると、ここに現在という平面が生じる。この平面は身体そのものの感覚を中心として、その周囲に、身体と関係の深い順に事物の知覚を配列している。身体の感覚が現実の行動であるのに対して、周囲の事物の知覚は、身体のとりうる可能な行動を素描している。我々はさらにその知覚に過去の記憶を重ねて可能な行動を具体的に描き出し、その中から一つの行動を選択して現実化する。そして、現実化されたその行動の周囲にまた新たな知覚が配列される。

この場合、まず初めに述べた「未来の未決定性」というベルクソンのテーゼに対しては、以下の点が指摘される。すなわち、知覚作用とは、まさに未決定な未来を「選択」して現在にすることであって、未だ知覚されていない潜在的な物質の存在は、知覚作用という選択を阻害せず、むしろそれを成立させる条件なのである。

次に、「可能なもの」の批判に対しては、潜在的な物質の存在を認めても、「それ以前には存在しなかった」新しい行動がもたらされる点が指摘される。たとえば、ベルクソンは次のように述べている。

> 行動はいずれも意図の現実化だといってよい…〔中略〕…行動は全て意図の現実化であるとはいえ、それは新しく現前した現実であって、意図され

たものとは異なる。意図は過去のやり直し、並べ替えの投影でしかない。（EC, 47）

引用から読み取れるように、ベルクソンは行動の意図と現実化された行動を別のものとみている。この場合、「行動の可能性」を行動の意図や素描として理解するなら、そこから行動が切り取られるような潜在的な物質の存在を認めても、現実化する行動は常に、それ以前に存在した可能性とは別の、「その現実化にあたり、可能性という形でさえも先在していなかった、全く新しい行動」になるといえるのではないだろうか。

むしろ、未だ知覚されていない物質の存在こそが、予想通りのものが現実化するのを妨げ、意図を越えた新しいものの現実化をもたらしているように思われる。予想を裏切り意図に逆らう物質の抵抗について、ベルクソンは以下のように述べている。

> 思考されているだけの思考、考えられただけの芸術作品、夢想されただけの詩には、努力はいらない。詩を言葉にし、芸術的概念を絵や彫像にする、物質的な現実化が、努力を要求するのだ…〔中略〕…ところでこの努力は、物質なしには可能でなかっただろう。物質が抗うその抵抗によって、また我々がそこに導入できる柔軟性によって、物質は障害であると同時に道具であり、刺激なのだ。（ES, 22）

このような観点からは、未だ知覚されていない物質の存在を認めても、行動の実現は、予め存在する可能性の単なる現実化にはならないといえる。しかしながら、これで「可能なもの」の存在が否定されたわけではない。

前節図４の AB で表されるような現在平面というものが、これまで見てきたように、すでに物質の全体から切り取られて現勢化したものであるとすれば、潜在的な物質の一部を現勢化してゆく努力、未加工の物質を削り取ってゆく精神のはたらきは、すでに出来上がって現勢化された現在平面 AB よりもさらに進んだその先に、常に浸食しているのではないか。そして、その現勢化作用の現場で精神のはたらきと共在している物質は、すでに現勢化された現在の知覚平面の中には含まれ得ないのだから、これは主観的な私の現在平面にとっては「未来」にあたり、「可能な純粋知覚の全体」という意味で、「可能な物質」と呼ばざるを得ないのではないだろうか。

この点に関し、ベルクソンにとって可能なもの le possible は現実性 réalité を持たず、それゆえ偽の概念であると断じたドゥルーズとは異なり[65]、たとえ

ばジャンケレヴィッチはベルクソンの「可能性」の概念の中に、現実の経験の対象にならない「論理的可能性」と、約束ないし希望として現実に存在する「有機的可能性」を区別し、後者は「*存在する一つの事物*」であって、「胚種 germe」の能力を持つとした[66]。

ジャンケレヴィッチはまた、『持続と同時性』(1922) におけるベルクソンの叙述、つまり、「我々が問題にしているのが実在の時間 un temps réel なのか、それとも虚構の時間 un temps fictif なのかを知りたければ、我々はただ、我々に提出される対象が知覚されうるか否か、意識的となりうるか否かを自問すればよい」(DES, 66) といった叙述を根拠として、「実在的 réel」ということに対するベルクソンの見解を以下のように代弁している。

> *知覚されている、あるいは知覚されうるものは全て実在的である。*ある事物が実在かどうかを知りたければ、それが精神の現実の actuel 経験の対象になっているかどうか、あるいはなりうるかどうかを調べよ。意識によって経験される、あるいは生きられるというこの可能性以外に、ある事実が実在的であると正しく見分けるためのしるしはない[67]。

ここでジャンケレヴィッチの述べているように、ベルクソンの理論における「実在」が、「知覚されうるもの」「現実に経験されうるもの」と解されるべきであるとすれば、それは「可能な純粋知覚の全体」としての可能な物質を含むべきはないだろうか。

結論として、「未来」や「可能なもの」に対するベルクソンの否定的見解にもかかわらず、潜在的な物質の領域は、過去と現在の二系列だけでは考えられないこと、それゆえ、こうした概念に対するベルクソンの否定的見解は、知覚理論の観点から再考される必要があることがいえる。

とはいえ、本論は創造の新しさが障害としての物質の存在に依拠すると主張するものではない。本来、創造の新しさとは、あくまでも生命のエネルギーが内包する諸傾向の測り知れなさや、そのつどの選択の予見不能性によってもたらされるものであるだろう。

それゆえ、ここではただ、未だ知覚されていない物質の存在は、ベルクソンの支持する自由な選択や創造を妨げず、むしろそれを成立させる条件となっているという見方を提示するにとどめておきたい。次節では、我々のこうした見解に付随するいくつかの帰結について、さらに考えることにする。

第三節　未来の具体的な知覚と未来の物質

『持続と同時性』の第六章でベルクソンは時間という第四次元の延長を持った「四次元時空連続体」の概念を吟味するために以下のような思考実験を行っている。

まず、我々の住む次元を一つ減らして、二次元の宇宙を想定し、無限に延長した平面 P に住む住人たちを考える。この平面世界の住人たちにとって時間を生きるということは、その平面が積み重ねられてできる第三次元を横切ることになる。彼らの宇宙は過去、現在、未来の全ての平面の積み重ねからできていて、彼らの意識は重ねられたこれらの面に垂直に移動し、その際常に自分の通る面しか認識せず、その面を現在と知覚し、背後に残してきた面を想起することはできるが、しかし先の方にあってこれから現在となる面は認識できないとする（Cf. DES, 157-165）。

以上のような想定をした上でベルクソンは、平面 P の住人は未来の側に積み重ねられた諸平面のかたまりを、任意の仕方で切り取ることができると考えるだろうと述べる。

> 諸君（平面 P の住人）は実際、諸君の平面 P が、諸君を待つためにそこに置かれた、宇宙の継起する全ての瞬間の全てのイマージュを通過するものとしたい…〔中略〕…ところで、この（全てのイマージュの）かたまり bloc が実際に réellement 与えられている以上、諸君はそれを…〔中略〕…別の方向に動く任意の平面 P′ によっても切り取ることができる。諸君の仮説とはそのようなものであろう。…〔中略〕…諸君が経験する仕方はそのうちの一つに過ぎないと諸君は考えるだろう。それはほかの全ての仕方と同列にあるのだと。（DES, 163-4）

しかしながら、ベルクソンはこのような見解を否定し、諸々の知覚の仕方が同列に存在することを矛盾 incohérence にして不条理 absurdité だと批判する。

> 諸平面 P′ の上で、それらの諸平面と共に進みながら、諸君が単に考えただけの全ての仕方を経験する観察者がどうなるかを実際に*見る*私は…〔中略〕…そのような人が矛盾と不条理のうちに生きるであろうと諸君に言うことができる。（DES, 164）

ベルクソンは、出来事が実際に経験される仕方はただ一通りである以上、そのほかの無数の可能性は虚構に過ぎず、それゆえ、無数の可能性を同列に含む

こうした四次元時空連続体の概念は、実在と虚構を同列に表す数学的な抽象にすぎないと主張する。

ベルクソンの考えでは、そもそも諸平面のかたまりが存在するのは、それが一定の仕方で構成されたからである。たとえば、家が実際にあるとき、我々はその家を想像の中で様々な仕方で建てることができるが、しかし、実際に家があるということは、ある一定の仕方でその家が建てられたことを意味するのであり、無数の可能な建て方で建てられている家などは存在しない、というのがベルクソンの立場である（Cf. DES, 165）。

実際、ベルクソンは論理的に矛盾する事物が存在することを認めず、『物質と記憶』では、事物が互いに論理的あるいは因果的な関係を持って意識に知覚されることを事物の存在 existence の条件とした（Cf. MM, 163）。また、論理的に「同じ場所に複数の事物が同時に存在することはできないので」（MM, 154）空間に拡がりを占めている「私の現在」は特定の瞬間には「完全に限定された事物として現れる」（MM, 153）ともいわれる。『試論』でもベルクソンは物体相互の不可入性 impénétrabilité を、物理法則というよりも論理的必然性であるとした（DI, 66）。しかし、より正確には、「同じ場所に複数の事物が同時に存在することはできない」という論理的必然性は、我々の知覚作用の構造上の必然性に由来しているのではないか。というのは、これまでみてきたように知覚作用というものが物質を分割し限定する作用であるとすれば、物質が限定された状態でしか知覚されえないのは当然だからである。

それゆえ、ベルクソンが第三次元の視点から平面 P の住人たちにとっての未来を、その現在と同時に「見る」ことができる点がここでは問題になる。ベルクソンの視点からは、平面 P にとっての未来が全て現に「見える」のであるから、そこでは一定の知覚の在り方が現実の経験となるはずである。そして、実在とは、現に知覚されているか、もしくは知覚されうる対象を意味し、知覚できないものは虚構であるとする見解からは、確かに、並存する無数の知覚は、実在しないことになるだろう。

けれども、ベルクソンが平面 P の住人の視点を遵守し、また「現在知覚されているもの」だけでなく「知覚されうるもの」をも実在とする自らの定義に忠実であったならば、平面 P の住人にとって、知覚可能な未来の無数のイマージュは、全て同列に実在すると認めるべきだったのではないだろうか。それらの無数のイマージュの「かたまり」とは、三次元の我々にとっての潜在的な物質、可能な純粋知覚の全体としての物質と同等のはずである。

ただし、我々の物質は、平面 P の住人が想像するような未来の時空連続体とは以下の点で異なる。

第一に、ベルクソンの純粋知覚論から導かれるのは、未だ現勢化されていない物質全体の存在であり、これは未分割である以上、私にとって時間的に継起する一連の系列を構成しない。したがって、その全体が「未だ知覚されていない」領域にあるという以上には、その領域の中で、一年後、十年後、といった時間的な前後関係を持たない。

第二に、未だ知覚されていない物質は、未来における知覚ではない。すでに述べたように、我々が明瞭に意識する完全な知覚は、継起するいくつかの瞬間的な感覚的性質が濃縮され、さらに過去の類似の知覚がそこに投影されて初めて成立するものであった。したがって、そうした実際の知覚は、物質の一部として含まれるのではなく、主観的な精神として在ることになり、可能な物質の実在は、未来における主観的な精神の実在を意味しないのである。

けれども、これらは、我々の宇宙においても無数の可能な未来の知覚が実在する可能性を否定するわけではない。というのは、前章で明らかにしたように、現在からみた過去のあらゆる瞬間は実在しており、そして、この過去のある瞬間からみた現在は、無数の知覚可能な未来の一つとして、「実在」という資格を持つだろうからである。

前章では、個人の人生が系統樹のような無数に分岐する経路で考えられることを述べた。この場合、過ぎ去った人生の分岐点において別の可能性を選んでいればそうなったであろうところの、別の現在の状態は、この「私」にとって、現実には知覚されておらず、また知覚される可能性もないため、ベルクソンの定義からは、実在ではなく虚構であることになるだろう。けれども、そうしたベルクソンの定義からしても、「過去の私」にとっては、無数の可能な未来は、それぞれが「知覚されうるもの」であり、その意味では全てが「実在」であると考えなければならないのである。だとすれば、「現在の私」にも、「過去の私」と同様に、無数の可能な未来が実在するのではないか。

けれども、ここで、「過去の私」にとって「現在の私」が知覚可能であると言えるのは、現在の私の視点からでしかない点に注意することが肝要である。「過去の私」にとって「現在の私」がいかなる意味で実在となるのかは議論の必要な問題であって、単純にこれを、過去のある瞬間において、無数の可能な未来の知覚が無意識の領域に潜在していたとか、さらには、現在の無意識の中にも無数の可能な未来の知覚が存在していると考えることは、早計に過ぎるであろう。

それゆえ、本論文では、そうした未来の知覚の実在性の問題には踏み込まず、過去については一連の意識状態の系列がその細部まで確定して実在しているが、未来についてはこれから創造される知覚の素材となる物質だけが実在している、

という前章の帰結を示すにとどめておきたい。

個々の人間が時間の中でたどってきた道筋は、その起源からみるなら、初めはただ一つの人格が、その内に持っていた傾向を無数の方向に発現させながら、枝状に展開する。我々の無意識には、その発展のどの時点においても、それまでに経験した全ての意識状態と、現に知覚されている事物と同時に在る全ての事物、そして、未だ知覚されていない物質があるが、未来の意識状態はないと考える。未来に関しては、それをこれから創造する原動力となるところの潜在的な傾向、つまり人格と、その力を阻む障害であると同時にそれがはたらきかける素材ともなる物質があるのみとする。

では、そうした傾向はどのようにして未来を創造してゆくのか。また、その創造の過程において、より自由な行為はどのようにして実現されてゆくのか。最後に次章ではその点を考える。

第六章　自由な行動

第一節　人格を形作る諸傾向

本論文の初めでは、よりよい行動や自由な行動とは何か、また、どうすればそのような行動を選択できるのか、という問いを立てた。そして、第一章では、過去の記憶が各々の人格を形成し、人格の傾向に合致した行動ほど自由であること、それゆえ、行動の選択肢である知覚に記憶を投影するほど自由な行動が可能になることを帰結した。

では、人格、性格、深い自我等と呼ばれる、各々に固有の傾向や力を作るのは、過去の経験だけなのだろうか。最後に、この章では、何が我々に固有の力を形成するのか、また、よりよく、あるいは幸せに生きるということの意味や方法を、第一の主著である『試論』から、最晩年の著作である『道徳と宗教の二源泉』(1932) までを視野に入れて、解明しておくことにしたい。合わせて、ベルクソン哲学の全体を、人格の傾向性や力という観点から再構成することを試みる。

まず、第一の『試論』で、各々の力を形成する要因とされていたのは何か。初めの章で述べたように、この著作では各々の経験する意識の諸状態が融合して単一の人格や自我を形成するとされていた。また他方で、この融合には度合いがあり、人格の中には統一的な傾向に対し外的なままに留まる部分的な傾向があるともいわれた。

> たとえば、催眠状態の最中に受けた暗示は、意識事象の全体に一体化することなく、固有の生命力を与えられて、時が来れば人格そのものにとってかわるだろう。何らかの偶発的な状況によって引き起こされた激しい怒りは…〔中略〕…、催眠術の暗示とほぼ同様に作用するだろう。…〔中略〕…意味を間違えられた教育、判断よりも記憶に訴えるような教育に由来する感情や思想の総体とは、まさにそうしたものである。…〔中略〕…けれども、もし自我の全体が暗示を同化するなら、暗示は信念に化しただろう。また情念は…〔中略〕…たとえ突発的なものであっても、そこに人格の歴史の全体が反映されていれば、もはや宿命的な性格を呈することはなかっただろう。(DI, 125)

引用では、人格の全体に一体化しない局所的な傾向として、暗示や押し付け

られた教育、一時的な激情などが上げられている。では、こうした傾向は、なぜ人格の全体と一体化しないのだろうか。

ここで注意すべきは、暗示や押し付けられた教育なども、自分で判断され、「そこに人格の歴史の全体が反映されていれば」孤立することはなく、人格に同化されることができたという点である。つまり、人格に同化吸収するためには、そこに人格を投影して解釈し、いわば、自分のものにできなければならないと考えられるのであるが、では、我々はどのような対象であればそうした投影や解釈を行えるのか。

この点に関し、考えられるのは、自分の人格と対象とに共通する傾向の有無ということである。『試論』は次のように述べている。

> ある意見を我々の目に価値あるものとして映らしめるのは、そのニュアンスが我々のほかのあらゆる観念に共通の色合いに呼応しており、我々は初めからそこに自分自身の何かを見ていたという事実なのだ。(DI, 100 下線は引用者による)

上の引用の「初めから dès l'abord」「呼応する répondre」とは一体何を意味するのか。それは、分析的思考による理解以前の、共感による直観的な理解と考えることができる[68]。

自らの人格との共通性を持たないもの、初めから自分自身の何かを感じることのできないものに対しては、我々は人格を投影し、理解することができないといえる。その場合、そうした解釈不可能な意見や傾向は人格全体の中で孤立化し、いわば「寄生的な自我」(DI, 125) を形成する。

このように、自らの傾向にいくらかでも合致する経験だけが、人格の全体に融合されてゆくとすれば、我々が生まれつき備えている傾向は、その後の発展の方向を決める大きな重要性を持つだろう。では、何がそうした原初的傾向を形成するのか。

ここで我々は、身体の感覚が各々の人格に占める役割を考慮しなければならない。この身体の備える傾向性に関し、『試論』は以下のように述べている。

> より大きな快楽 plaisir とは、より好ましい快楽でなくて何だろうか。また、我々の好み préférence というのは、我々の諸器官の性向 disposition でなくて何だろうか。…〔中略〕…この傾き inclination そのものを分析してみると、関与する諸器官や、さらにはそれ以外の身体の部分において…〔中略〕…無数の微小な運動が開始され、素描されつつあるのが見出さ

れるだろう。…〔中略〕…我々の身体は、あたかも反射作用によるかのように、それら（諸々の快楽）の中の一つに自発的に向かうのである。この反射作用を中断するかどうかは我々次第であるが。（DI, 28）

先の章でみたように、我々の身体とは、一定の刺激に対して一定の必然的な反応を行う運動メカニズムの総体であった。このメカニズムには遺伝によって伝えられる生得的なメカニズムと、練習や習慣によって獲得される後天的なメカニズムの双方が含まれる。上の引用から読み取れるように、ベルクソンはこうしたメカニズムによって身体が自発的にとる反応行動が、未だ準備されている段階で身体感覚として意識され、その反応行動への欲求という形で我々を傾かせるとみている。

それゆえ、我々は、こうした身体感覚の傾向を、各々の人格的傾向の基礎をなすものとして考慮しなければならないだろう。

ベルクソンは、このような身体感覚が、準備されつつある反応の性質を我々に知らせ、それによって、その反応に抵抗することを我々に可能ならしめるのであり、ここに自由の始まりがあるとする(Cf. DI, 25)。というのは、必然的な反応が予め意識されることで、我々には「その反射作用を中断する」という選択肢が与えられるからである。

この場合、人格の原初的傾向を成し、それゆえ、その傾向のままに行動することが当初は「自由」にほかならなかったはずの身体の傾向が、いつの間にか、それを抑制することがむしろ自由につながるような、局所的な傾向に変化していることになる。

実際、我々の幼児期からの精神的な成長というものを考えるなら、各々の人格は、自らの傾向といくらかでも合致するものだけを融合して成長するとしても、生まれ持った身体的傾向を超える別のものになってゆくと考えるべきだろう。

とはいえ、ベルクソンにおいては、生得的な身体の諸傾向は、「意識生活における自由な活動の基体 substrat」（DI, 127）の役割を果たすとされ、自由の度合いの低いものとみなされているとはいっても、理性的・道徳的な自由に反する動物的な欲求として否定されているのではない。

この自由な活動の基体としての身体の役割は、『物質と記憶』でより明確にされている。そこで述べられている役割を概略するならば、①刺激に対する必然的な諸反応を準備しながら感覚によってその諸反応の性質を知らせ、諸反応間での選択やそれを中断するという選択を可能にする（Cf. MM, 18-19, 28-29）。②現在の身体の態勢が過去の類似の状況における記憶を呼び出すための枠組み

となる（Cf. MM, 103-104）。③行動によって、潜在的な人格の傾向を現実に現す（Cf. MM, 248）の三つが挙げられる。こうした何重もの意味で身体は「私の人格の物理的な基盤 base」（MM, 63）と呼ばれるのである。

ただし、前述のように、人格、つまり過去の記憶の全体を行動に反映させるためには、通常、記憶を想起し選択肢を反省する努力が必要である。この努力が、それ以上には原因を遡れない創発的な意欲によってもたらされることは、すでに第二章で述べた。人格としての「意志」と努力する「意欲」という行動の二要因が、外的な力ではなく自己自身の力である点で、我々の行動は「自由」であるといえる。

では、過去の意識と現在の身体以外に、各々の人格を形成する要素はないのだろうか。また、記憶を想起し反省する努力以外に、そうした人格的傾向を発現させる要因はないのだろうか。次節では『創造的進化』と『道徳と宗教の二源泉』に範囲を広げて、この問題を検討することにしたい。

第二節　生命の傾向とエラン・ヴィタール

『創造的進化』においてベルクソンは、生物進化に関する当時の学説に依拠しつつ、「生命のはずみ élan vital」という、おそらくは『試論』における「持続 durée」や、『物質と記憶』における「イマージュ image」以上に奇妙な概念を提唱した。

> 私は生命の*根源のはずみ élan originel* de la vie が胚の一つの世代から次の世代へと、発達した有機体を媒介にして移ってゆくと考える。…〔中略〕…このはずみは進化の諸線に分かれながら、それらの線上でその力を保ち、変異の深い原因となるのである。（EC, 88）

「根源のはずみは共通なはずみ élan commun であり」（EC, 51）「生命はその出現以来、ただ一つの同じはずみ un seul et même élan が、分散する進化の諸線に分かれながら続いてきたものである」（EC, 53）といわれるように、この進化全体を推進する単一の力は、全ての生物に共通の普遍的なものとされる。では、なぜベルクソンはそのような力を想定したのだろうか。

その根拠として示されるのは、脊椎動物の眼と軟体動物の眼のように、異種の生物において類似の器官に到達する進化の例である。

> 同じ小変異 petites variations が、互いに独立な進化の二線上に、同じ順

序で無数に生じたなどということは、それらの小変異が純粋な偶然によるものならば、どうして考えられるだろうか。また、小変異のそれぞれには何の有用性もなかったのに、自然淘汰によって同じ変異が同じ順序で双方の線上に残され、蓄積されるだろうか。（EC, 65）

ベルクソンはここで眼という器官の発達を例にとって論証を進めるが、たとえば昆虫の擬態などはこの進化全体を推進する単一のはずみという概念のより明瞭な例となるように思われるため、以下ではこうした例にあてはめてその解釈を試みることにしたい。

よく知られているように、ある種の昆虫は餌となる生物をおびき寄せ、あるいは天敵の目を欺くために、その目的上都合の良いほかの動植物や無生物に擬態する。といっても、無論、個々の個体が意図的に自らの形態を変化させるのではなく、突然変異と自然淘汰の結果、そのような形態を得るに至ったとされている。

けれども、たとえば蘭の花と見まがうカマキリのような、非常に優れたその模倣を見るとき、世代から世代へと受け継がれるような、何らかの意図によってそうした擬態が完成されたのではないかと考えることは、おそらく自然な感情であろう。

実際、完成された擬態は生存上大きな有用性を持つが、そうした形態に至るまでの無数の変異は、各々の個体にとって有利でないばかりか、往々にして不利であったはずである。にもかかわらず、そうした擬態の存在を自然淘汰の結果と考えることができるのだろうか。また、そのような形態を作り上げるだけの数限りない変異が連続して偶然に生じたという想定と、何らかの非物質的な傾向性が世代を通じて作用したという想定の、いずれが蓋然性が高いのだろうか。

こうした二つの想定の間でいずれを取るかは、我々がいわゆる科学的な立場と精神的な立場のいずれに与するかに依存するように思われる。生物の進化に関して、ベルクソンのとる立場は後者である。

好むと好まざるとにかかわらず、結果のこのような収斂はある内的な方向原理 un principe interne de direction に訴えない限り得られないだろう。（EC, 77）

目のような器官は、一定方向の変異の連続によって形成されたのであろう…〔中略〕…私は、もし《定向進化 orthogenèse》があるならば、心理的

な原因が介入しているのだということを、目という適切な例で証明しようと努めてきた。（EC, 87）

引用にみられるように、ベルクソンは進化の要因として、突然変異と自然淘汰のほかに、一定の方向に変異を推進するような、個体を超えた心理的な原因を想定する。

ただし、ベルクソンの提唱する「生命のはずみ」は、生物の形態の青写真を予め用意してそれを実現するのではなく、成長、生産、創造の方へと向かう大枠の方向性しか持たない。生物の形態の物質的な細部は、計画の達成ではなく、成長し創造しようとする生命の力と、その素材となりながらも障害となる物質の、いわば衝突の結果を表現する形にすぎないとされる（Cf. EC, 95）。

この「生命のはずみ」は、あらゆる生命を活動させる力であり、生物全てが共有する、物質にはたらきかける精神的なエネルギーである。とはいえ、「生命の根源のはずみ」（EC, 88）「全ての生命の原理」（EC, 239）「創造の欲求」（EC, 252）「物質をつらぬく一つの流れ」（EC, 266）等の様々な言葉でベルクソンが表そうとしたこの概念は、ベルクソンの努力にもかかわらず、依然として仮説の域を出ず、その存在が証明されたとは言いがたい。このような仮説的な概念に対して、我々はどのような立場をとるべきであろうか。

生物の進化が、偶然的な突然変異と自然淘汰だけでも説明されうることは確かである。それゆえ、「生命のはずみ」のような力の存在は不必要な想定として切り捨てるのが科学の立場であろう。

けれども、一方で、そのような概念が我々にとってはなじみ深いものであり、日常的な生活に浸透していることは否めないのではないだろうか。我々が「自然の力」や「生命力」について語るとき、暗黙のうちに意味されているのは、そのような普遍的な力ではないのだろうか。

だとすれば、我々が目指すべきは、現状のようにいわゆる科学的な立場と日常的な態度を乖離したままにすることでもなく、また、そうした力の存在を無条件に信じることでもなく、我々の日常的な態度をより合理的に説明する、より多くの事実に即した、蓋然性の高い仮説を求めてゆくことではないだろうか。

こうした立場はベルクソンの採用する方法的態度でもあり（Cf. ES, 4）、「哲学の役割は科学の役割の終わるところに始まる」（EC, 175）ともいわれる。我々はこうした方法論に同意して、「生命のはずみ」を一つの有効な仮説として考察してゆくことにしたい。

ベルクソンはこのような存在が、各々の生きて働く力そのものの源泉であるとみる。

一つの恵み豊かな流れが我々を潤し、我々の働き生きる力そのものを汲む源になっている。我々がそこに浸されているこの生命の大洋から我々は何かを不断に吸い上げ、自分の存在、ないし少なくとも自分を導いている知性は一種の局所的な凝固によってそこにできたものであることを感じている。哲学とはこの全体の中に新たに溶け込もうとする努力にほかならない。（EC, 192-193）

このような力が個々の生命に共有されているとすれば、我々は、各々の人格を形成する力のうちに、こうした普遍的な力を新たに数え入れなければならないだろう。

ベルクソンは『創造的進化』の第三章で物質とこの生命のはずみを逆向きの運動としてとらえ、意識は活動と創造の方向へ緊張すると生命のはずみの方へ「上昇する monter」（EC, 11）が、反対に、活動を中断して惰性と繰り返しの方向に弛緩すると、物質の方に「下降する descendre」（EC, 11）とみなす（Cf. EC, 201-205）。それゆえ、全ての意識が共有する普遍的な流れとして、「物質」と「生命のはずみ」という、対極に位置付けられる二つの運動を区別しておかなければならないだろう。

では、我々はいかにして、この生命のはずみという共通の源泉から、各々が働き生きる力を汲み上げることができるのか。初めの章では、想起し反省する努力によって各々の人格が行動に反映されることを帰結したが、では、この根源的な生命の傾向を汲み上げるためにも、努力が必要なのだろうか。

この点に関し、すでに第二章で意欲の問題に関連して引用したように、『創造的進化』では以下のように述べられていた。

我々の意識が自分の原理の一部にでも合致するためには、*出来上がった*ものから離れて、*出来つつある*ものに寄り添わなければならない。…〔中略〕…それは苦しい努力であり…〔中略〕…純粋意欲 le pur vouloir は素材をつらぬき生命と結びつける流れであって、これは我々にはなかなか感じ取れない…〔中略〕…なんとかして一瞬そこに至る場合にも、我々のつかむのは、断片的な個々の意欲 un vouloir individuel だけであろう。生命全体の原理に到達するためには、さらに進まなければならない。（EC, 238-239）

引用から、確かに努力によって我々はある程度自分の原理に合致することができるが、そもそも、そうした努力をもたらす個人の意欲は、純粋意欲ないし

生命全体の原理の断片であることが読み取れる。だとすれば、我々はここで、生命全体の原理に合致するためには努力しなければならず、努力するためには生命全体に合致しなければならない、という循環に陥ることになるのではないか。

むしろ、こうした方法論的な循環を断ち切ると思われるのは、ただ意欲することである。けれども、我々は、ある程度は意識的に意欲することができるとしても、いつでも好きなだけ意欲することができるとは思われない。では、どのような場合に我々はそれができるようになるのか。

最後に、次節では、『道徳と宗教の二源泉』をもとに、こうした問題を考えてゆくことにしたい。

第三節　自由な行動

よく知られているように、『創造的進化』の出版の後、ベルクソンは次なる著作のテーマを「道徳」や「神秘思想」、「美学」等の間で迷っていたようである（Cf. Mé, 880-881）。結局、選ばれたのは道徳と宗教であったが、外交的な任務の多忙さや病気の発症のために、その『道徳と宗教の二源泉』の出版には『創造的進化』から 25 年を要した。

ようやく完成した『二源泉』の原稿にもベルクソンは不満足であったようで、「実生活への適用が示されていない」と洩らしている[69]。この著作がベルクソンにとって満足のゆくできばえでなかったとすれば、その理由の大半は上述のような困難な執筆状況にあったと思われるが、我々の求めるような実生活への適用をその論述から引き出すことはできないのだろうか。

まず問うべきは、人格を形成する力とはどういうものか、またその力を汲みあげる方法論とはいかなるものか、ということである。さしあたり、この問題について『二源泉』の議論を概観しておこう。

『二源泉』の第一章は、道徳の源泉の一端である社会的な責務 obligation の考察から論を始めている。そこではまず、我々の自我の確立が、個人の内の「社会的な自我 moi social」の確立にあること、我々は自らの内に「責務の総体」としての、いわば内なる社会を保つことで、そこからエネルギーを汲むことが述べられる。

> 我々は、自分の力の大部分は社会から来ていること、また、社会的生活が不断に要求を新たにしてくれるおかげで、自分のエネルギーが不断に緊張し、自分の活動に最も高い利益を保証する努力の方向も定まるということ

を、はっきり感じている。（MR, 8）

ベルクソンは続けて、キップリングの小説中の、密林の奥の小屋に一人住まいしながら「自分に対する尊敬を失わないために」毎晩夕食のために正装したインドの森林保護官の話を引いて、個人の内なる社会が、たとえ実際には孤立した環境にあっても、個人に力を与えうることを示している。

だとすれば、個人の力の源として、まず社会的な義務感を考慮すべきだろう。この力を汲み上げるためには、ベルクソンの指摘するとおり、実際に絶えず新たな社会的要求にさらされるばかりでなく、孤島のロビンソン＝クルーソーやインドの森林保護官のように、「心の中で社会から離れずにいる」（MR, 9）だけでもよいと考えられる。

しかしながら、『二源泉』は、『試論』と同様、このような社会的な自我を自我の表層に位置付けており（Cf. MR, 7）、全体的なものとはみなさない。実際、絶えず社会的な義務にさらされ続けても、やはり我々の気力は低下するであろう。では、もっと別の力の源はどこにあるのか。

『二源泉』が社会的な義務と対比して提示するのは、偉大な人間への「憧れ aspiration」（MR, 48）や、そうした人間の「魅力 attrait」（MR, 46）である。第一の社会的な義務の力は「圧力 pression」ないし「圧迫 poussée」と呼ばれ、こうした義務が「閉じた道徳」と表現されるのに対し、第二の偉大な人間への憧れや熱情は「呼びかけ appel」と呼ばれ、こうした呼びかけによって示される模範は「開いた道徳」と表現される。

> これまで問題にしてきた諸々の義務は社会生活によって我々に課される義務だった。それらは人類に対して課されるというよりも、むしろ都市社会 cité に対して課されるものである。それゆえ、第二の道徳が第一の道徳と違う点は、もしこの二つを明確に分けるとすればであるが、単に社会的であるのではなく、全人類的 humaine である点だといってよいだろう。（MR, 31）

ベルクソンはさらに続けて、開いた道徳の模範となる魂の態度を「それが包容するのは人類全体だといっても言い過ぎではなく、むしろそれでもまだ言い足りない。なぜなら、この魂の愛は、動物、植物、さらには自然全体へまでも広がっているのだから」（MR, 34）と付け加える。

このような「魅力」と「呼びかけ」を持つ偉大な人格としてベルクソンが挙げるのは、キリストのような、実際にその行動が多くの人間に模範としての力

を与えた人物であるが、そうした人々が偉大であるとされるのは、「都市社会の壁を乗り越えて、人類を引き連れてゆくその道によって、再び生命のはずみの方向へ身をおき戻した」（MR, 55）からにほかならない。つまり、開いた道徳を示す偉大な人間とされるのは、「創造的な進化の力を体現した人間」（MR, 98-99）なのである。

先の『創造的進化』で述べられていたように、個人の生きて働く力は、生命全体のはずみから汲み上げられるものであった。したがって、生命の根源的なはずみは、我々の全てにとって自分自身の深い傾向であるといえる。そして、前節で述べたように、我々の目に価値あるものとして映るのは、そこに自分自身の何かを見出せるような対象なのだとすれば、生命の根源的なはずみの力を体現している人々が、我々にとって最も価値あるものとして、憧れや模倣の対象になるのは当然であろう。

つまり、何かが我々を惹きつけるとすれば、それはその対象が我々自身の潜在的な傾向を体現しているからであり、そうした理想的な対象を通して、我々は自分自身の根源的な力を意識し、汲み出すことができるといえる。

ベルクソンは、このような魅力や呼びかけの力が、各々の感受性 sensibilité を通して、感情 sentiment や情動 émotion としてはたらくと述べている（Cf. MR, 35）。ここで当然生じる疑問は、感情や情動の中には、身体的な欲求に基づくものや、利己的なものなど、道徳的とはいいがたいものもあるのではないか、という点であろう。

こうした疑問を予測してベルクソンは、自らの述べる「情動」や「感情」、「感受性」というものを、「感覚とははっきり区別される情感的状態 état affectif であり、感覚のように物理的な刺激の心理的変換物へと還元することができない」（MR, 40）と定義している。

情感 affection は快・不快を伴った身体の感覚であったが、ここでベルクソンが道徳的な深い情動の特徴として重視しようとしているのは、むしろ、そうした情動が「魂の情感的振動 ébranlement affectif de l'âme」（MR, 40）であって、感覚のように身体の物理的運動には還元できないということであろう。

そのほか、感覚的なものはすぐ消散してしまうが、道徳的な情動では意識の深部が高揚しその効果が残ること（Cf. MR, 40）、生命の原理に合致した行動をする「喜び joie」は、感覚的な欲求が満たされる「快楽 plaisir」以上のものであり、喜びの内には快楽も潜在的に含まれるが、逆は成り立たないことが主張される（Cf. MR, 57）。

実際、我々は性的な欲求と愛情を区別するように、身体的な傾向と精神的な傾向をある程度は区別できるであろうし、我々の人格に与える力という面では、

身体的な欲求が満たされる快楽よりも、精神的な渇望が満たされる喜びの方が上回るという意見に同意できよう。

けれども、こうした特徴は、感覚的な欲求と、ベルクソンの述べようとする道徳的な情動を区別しようとするものであって、憧れや熱情といった情動の中に道徳的なものと不道徳的なものを区別しうるものではありえない。つまり、ベルクソンの場合、精神的な憧れや熱情は、程度の差はあれ、全てが「開いた道徳」の態度として、肯定的な価値を持つことになる。

道徳的な「善 Bien」の定義は困難であるが[70]、ベルクソンの理論において「道徳的」であることを「よい」と呼ぶとするならば、閉じた道徳における「よい」とは、社会的な義務に適うことを意味し、開いた道徳における「よい」とは、生命の傾向に合致して行動することを意味するだろう。

では、この閉じた道徳と開いた道徳は、どのような関係にあるのか。

個人の中で憧れや熱情と社会的な義務が対立し、葛藤が生じることは往々にして考えられることである。それでも、この閉じた道徳と開いた道徳は、社会を保持し進化させる相補的な力であって、対立するものではないとベルクソンは考える（Cf. MR, 98）。実際、そこに何らかの価値を見出すからこそ、我々は社会的な義務にも従うのであろう。

その上で、ベルクソンは、この二つの道徳を比較すると、進歩の喜びは現状維持の快適さに勝ると考えており（Cf. MR, 49）、開いた道徳は閉じた道徳よりも原理的なものとみなされている。この点に関しても、おそらく我々は、たとえば同じことの繰り返しの毎日よりも、何か新しいことを試みる際の方が意欲が湧くといった意見に同意できるのではないだろうか。

そのように、閉じた道徳と開いた道徳を生命の原理の相補的な二傾向として、ただし閉じた道徳を開いた道徳よりも下位のものとしてみるなら、ここには諸々の価値の基準が生命の原理に一元化されるような道徳論があるといえる。つまり、ベルクソンの理論において、より道徳的によいこと、自由であること、喜びをもって幸せに生きることは、全て、より生命の根源的な原理に合致して生きることに収束してゆくのである。

生命の根源的な原理は明示された規則ではなく、潜在的な傾向であるが、我々は自らの感じる憧れや喜びの度合いによって[71]、行動の自由の度合いや、生命の原理との合致の度合いを測ることができる。

それゆえ、ここで最初の問いに戻るならば、よりよく自由に生きるために我々ができることは、熟考や反省の作用を通じて我々の眼により価値あるものとして現れる行動を実現してゆくこと、常に自分の心に問い直し、習慣や感覚や自分のものではない思想に身を任せることなく、より憧れの力で自分を惹き

つけるものを目指して行為することだといえる。

生命の原理により合致したものが進化の系統樹の最も先まで行くように、我々の人生の系統樹においても、自らの人格を成す傾向に最も合致するものが、最も喜びの多い人生を実現するであろう。

結論として、よりよく自由に生きるということは、より自己の全体的な傾向に合致して生きることであり、これはつまり、憧れや魅力を感じる対象を求めて、より喜びをもって生きることであるといえる。

註

序

[1] ラテン語の「liberum arbitrium」にあたるフランス語の「libre arbitre」については、ベルクソンのテキスト中のこの語に対して、「自由意志」(『意識に直接与えられたものについての試論』合田正人・平井靖史訳, 2002, p.201)、「意志の自由」(『思想と動くもの』河野与一訳, 1998, p.23)、「任意的自由」(『ベルクソン哲学』中田光雄, 1977, p.186)、「自由裁量」(『ベルクソン講義録 I 』合田正人・谷口博史訳, 1990, p.244)等、様々な訳があてられており、未だ一定の訳語はないと思われる。本論文では、選択に際する任意の判断という意味を強調する目的で、「自由裁量」の訳をとった。

[2] たとえば 1903 年のフランス哲学会で発表された、『L.ブランシュビックへの手紙』を参照。Cf. Mé, 586

[3] 経験を記憶する作用である mémoire は、「記憶力」または「記憶のはたらき」と訳し、記憶される経験である souvenir は、「記憶」または「記憶内容」と訳すことにする。

第一章

[4] 行動と行為については、ベルクソンの引用文中においては action を行動、acte を行為と訳すことにする。日本語の用法としてはどちらかといえば「行為」は人間の意志的な行いを、「行動」は生物全般の生活活動を意味すると思われるため、本論文でもその意味で用いる。厳密な区別は見受けられないものの、ベルクソンの用法もほぼこれに対応している。

[5] たとえばベルクソンは二つの著作の関わりについて以下のように語っている。「私は『試論』を出す前から『物質と記憶』に取りかかっていたと言ったが、というのも私は『試論』を出す前に寝かせておいて、提起された問題についてよく考えていたからだ。私には『直接与えられたもの』の結論が身体と精神の関係について特別な研究を必要としていることが分かった。なぜなら私は精神的事実としての自由に到達していたからだ」Cf. J. Chevalier, *Entretiens avec Bergson*, Plon, 1959, p.278

[6] ただし伊藤は『物質と記憶』で描かれる有名な逆円錐の図を分析し、『試論』で述べられる「自由の程度」がこの図で説明される「様々な精神生活の調子 tons」に対応しているとして、二つの著作の関連を指摘している。伊藤淑子『「自我」の観点から見たベルクソン哲学について』哲学 No.55 日本哲学会編 2004, pp.130-141

[7] A. R. Lacey, *Bergson*, Routledge, 1989, p.67

[8] たとえば J. P. Sartre, *L'être et le néant*, Gallimard, 1943, p.206 「《相互浸透》とは一体何を意味するのか？相互浸透するためには互いに浸透しあう諸部分があるのでなければならない。それらの部分は本来孤立するはずであるのに、魔術的な、全く不可解なある粘着によって、部分部分が相互に流れ込む」

[9] 特に『創造的進化』以降、個々の「人格」は、生命を進化させる普遍的な力と同じ潜在的な「傾向」としてとらえられてゆく。Cf. EC, 100, 259「(進化上の)分岐の真の深い原因は生命が内包していたものにある。というのも、生命は傾向なのであり、傾向はその本質からいって芽のように展開するもので、ただその成長によって諸方向に展開し、自らの生命のはずみをそれらの諸方向に分かつからである。これは性格と呼ばれる特別な傾向の発展において我々の上にもみられることである」「私が自分の自我の奥底に発見するあの連続性、あの相互侵入…〔中略〕…私の内的生とはそうしたもの

であり、生命一般もまたそうしたものなのである。生命は物質に接しているうちは衝力ないしはずみに比べられるが、それ自体としてみるなら、無数の潜在性であり、数え切れない傾向の相互浸食なのである」

[10] 性格、人格、自我、という言葉はベルクソンにおいて互換的に使われるが、この中で自我は「表層の自我」と「深層の自我」というように、意識水準の区別を示す場合に特に使われている。本論文では人格という語を代表的に用い、性格、および諸状態の融合としての自我と同義語ととらえる。ただし、たとえば Bernard Sait は、ベルクソン自身は区別をつけていないものの性格という概念は深層の自我に対してより表層的なものと考えることができると指摘している。Una Bernard Sait, *The ethical implications of Bergson's Phlosophy,* Columbia Univ, Press, 1914, p.107

[11] Cf. DI, 125 ただし、習慣の力や激情は必ずしも人格全体の傾向と合致しないわけではない。

[12] Cf. G. Belot, *Une théorie nouvelle de la liberté,* Revue philosophique 1890, n°30, October, pp.371, 392「(ベルクソンは)心理的な決定論を一掃したのだろうか。それどころか、自我の全体性を回復することで、より明白で根本的な決定論を打ち立ててしまったのではないか。…〔中略〕…もし自由が深層の自我にあるのなら、そのような自由を獲得するよりも、むしろ断念して破壊してしまう方が人間にとってはよいことであろう。というのも、そのような自由を見出すためには、知的な思考から非反省的な自発性へ、人間性から動物性へ、社会生活から個人的孤立へという真の後退が避けられないのだから」

[13] Roger-E. Lacombe, *La psychologie bergsonienne, étude critique*, Félix Alcan, 1933, p.236

[14] M. Fénart, *Les assertions Bergsoniennnes,* J.Vrin, 1936, pp.55-57

[15] ベルクソンの『試論』に対するこうした見方は枚挙にいとまがないが、たとえば西洋思想史におけるベルクソンの哲学を反知性主義として位置づけたものに G. H. Mead, *Movements of Thought on the Nineteenth Century,* University of Chicago Press, 1936 が挙げられる。

[16] たとえば H.グイエは、ベルクソンが 1901 年のフランス哲学会で思考と脳の関係を実験的事実によって明らかにする「精神―物理平行論に関する実証的形而上学」(Mé, 463- 502)の可能性を提唱したことを受け、こうしたベルクソンの方法論を「デカルトが数学の手法で哲学を科学にしたように、ベルクソンは生物学の手法でそれを科学にした」と解している。Cf. H. Gouhier, *Introduction aux Œuvres,* PUF, 1959

[17] Cf. EC, 97 ただし、この箇所は『物質と記憶』の議論を要約した箇所である。

[18] 「知覚」という日本語には知覚内容のみならず知覚作用も意味的に含まれると考えられるが、本論文では「知覚」という語を主観的な知覚内容の意味で用い、知覚作用については知覚するはたらきもしくは知覚のはたらきと述べることにする。

[19] 例外はあるが(Cf. MM, 74, 82, 118)、ベルクソンは主観と客観の二元的区別を乗り越えるために、あえて知覚や記憶のはたらきの「主体 sujet」を立てない。しかし、たとえば「内側からの」(Cf. 109, 146)といった表現によって、「自我 moi」や「私 je」の自発性は示されている。

[20] ただし、ここで挙げたものと同様の例は『試論』と同時期のベルクソンの講義を記録したとされる『講義録』の中に見られる。Cf. Cours I ,248

[21] Cours I , 263

[22] Cours I , 250

[23] その他、『講義録』には次のような言葉がみられる。「なされた選択は、選択された

動機が最も強いものであったことを証明している」Cf. Cours Ⅰ, 261

[24] こうしたベルクソンの見解に対し、シュッツは未来の行為を考える場合にも我々は過去の出来事と同じくそれを完了されたものとして、つまり英語の「未来完了時制 Future Perfect Tense」で考えざるを得ないことを明らかにし、企図 project の持つこうした性格がベルクソンの論じる自由裁量の問題に関係していることを指摘する。Cf. A. Schutz, *The problem of social reality*, Nijhoff, 1973, pp.85-88 さらにジャンケレヴィッチはフランス語の「前未来 futur antérieur」は予料によって虚構の上で過去となった未来であり、決定論はこの前未来の時制で表される虚構の未来に対してのみ有効になると指摘する。Cf. V. Jankélévitch, *Henri Bergson*, PUF, 1959, p.21/ *La volonté de vouloir*, Seuil, 1980, p.15

[25] ただし、ここからしてベルクソンの提唱する自由を理性的判断に抵抗する個人的な感情の発露と考えることはできない。人格を反映させるためには普通、様々な可能性を検討する反省が必要であり、すでに言及したように、身体に基づく本能的な欲求や、一時的感情に支配される状態は、ベルクソンの理論においても自由の度合いの低いものとされるからである。ベルクソンの自由を感情的な自発性と同一視するブロのような立場に対しては、『物質と記憶』の中で、ベルクソン自身が「そのような自由はせいぜい心的生活が感情的なものに限られている動物にとっての自由にすぎない。思考する存在である人間にとっての自由な行為とは感情と概念の総合であり、これは理性的な進展といえるのだ」(MM, 207)と強く反論している。

[26] 自由裁量 libre arbitre の定義についてはベルクソンの解釈に従い「二つもしくは複数の可能性の間で下される決断」として「選択」とほぼ同義に解釈する。Cf. Cours Ⅰ, 252

第二章

[27] Cf. W. James, The Works of William James, Essays in Psychology *'The feeling of effort'* Harvard University Press, 1983 p.90

[28] ノートの筆記者である P. Fontana が注記しているように、こうしたノートはベルクソンの講義の一種の翻訳に過ぎない。この「意志の諸理論」の講義ノートはベルクソンの生前である 1907 年にすでに *Revue de Philosophie* に掲載されているが、『講義録』等におけるこうしたノートの扱いについては、「私は自分が公にしたいと願った全てのものを公刊したと宣言する。したがって私は、私の原稿やその他の場所に見出されるかもしれない一切の手稿、もしくは手稿のいかなる部分の出版をも断固として禁じる。私は、講義や授業や講演について存在するかもしれない記録や、それらに関する私自身の覚書の出版を一切禁じる(以下略)」というベルクソンの遺言からも議論のあるところである。ベルクソンの理論は本人が公刊を認めたテキストによって理解されるべきであり、それ以外の資料に見出される記述によってその理論を拡大解釈したり訂正したりすることは論外であろう。おそらくこうしたノートはグイエが『講義録』の序文で述べるように、「ベルクソンはこう書いた」とか「ベルクソンはこう言った」という資格で扱うことはできず、「ベルクソンはこう言ったのかもしれない」という但し付きで扱うべきなのであろう。とはいえそうした資格においてもこれらのノートの持つ文献的価値は争われない。それゆえ本論文ではこれらの記述を論拠とすることは避けるが、論文中で扱うテーゼに直接関わる記述を参考のために挙げておくことにする。

[29] Cf. MM, 8「私もこの研究の出発点では記憶を分析することが実在論と観念論、あるいは機械論と力動論が物質の存在や本質について論争している問題と何か関係が

あるとは考えていなかった」
[30] ただし、全ての生物の持つ知覚の総和を物質界と呼ぶわけではない。まず物質界があり、その諸部分が諸生物に知覚されているのであって、「仮に全ての生物の過去、現在、および可能な全ての意識状態を結集できても、実在する物質のごくわずかな部分しか汲みつくすことができないだろう」とベルクソンは述べる。Cf. MM, 258
[31] M. Merleau-Ponty, *L'union de l'ame et du corps chez Malebranche, Biran et Bergson,* Librairie philosophique J. VRIN, 1978 p. 83
[32] 第七版の序文の中の言葉であるが、それ以前の序文でもこの立場は基本的に変わらない。「精神活動とその物質的な開花の間にできるだけ明確な区別を打ちたてようとすると、我々はこれまでに全ての二元論が引き起こした様々な性質の問題にまともにぶつからずには済まなかった」Cf. *Œuvres,* PUF, 1959, p.1490
[33] Cf. DI, 164 『試論』で「内的因果」と「外的因果」として区別された二つの因果性は、1903 年の『ブランシュビックへの手紙』の中では「心理学的因果」と「物理学的因果」、さらに『創造的進化』では「生命の秩序」と「物理的秩序」のように変遷してゆく。グイエは『ブランシュビックへの手紙』が書かれた年代を境に自由行為の別名であるこの心理学的因果が「因果性 causalité」という語を脱して「創造」と呼びかえられてゆく経緯を分析している。H. Gouhier, *Bergson dans l'histoire de la pensée occidentale,* Vrin, 1989, p.48
[34] le vouloir は「意欲」が定訳であると思われるが、本論文ではその動的な性質を強調する文脈では「意志のはたらき」と訳すことにする。
[35] また、1919 年に『精神のエネルギー』に再録された際には削除されているが、1902 年に『哲学雑誌』に掲載された『知的な努力』では、「知的な努力は我々に純粋な状態の因果関係を示している」ことが帰結されている。Cf. Mé, 550
[36] この点に関し前出の「意志の諸理論」についての講義ノートには以下のような記述がある。「注意の努力の核心部分にはこの（精神の）内的な運動についての意識が見いだされる…〔中略〕…注意の努力についての意識は感覚的な諸要素を含むが、その核心をなすのは…〔中略〕…精神の内的な運動の一種についての自覚 sentiment なのだ」Cf. Mé, 700　また、『思想と動くもの』における「直観 intuition ははなによりも内面的持続に向かう。…〔中略〕…それは、精神に対する直接の視覚である…〔中略〕…直観はなによりもまず意識を意味するが、その意識は直接な意識であり、見られた対象とほとんど区別のない視覚であり、接触にとどまらず合致となる認識である」（PM, 27）といった定義から、この精神の運動についての自覚を直観と呼ぶことができよう。
[37] たとえばジャンケレヴィッチは『アンリ・ベルクソン』の中でこうした存在の仕方を次のように叙述している。「意欲する意欲 le vouloir vouloir のような無限分裂は、端的な意欲 Vouloir tout court の単純さの中に突然収縮する」Cf. V. Jankélévitch, *Henri Bergson*, PUF, 1959, p.235

第三章
[38] Cf. J. P. Sartre, *L'être et le néant I ,* Gallimard, Paris, 1943, p.206 /M. Merleau- Ponty, *Phenomenologie de la perception*, Gallimard, Paris, 1945, p.481 / G. Bachelard, *L'intuition de l'instant,* Paris, Stock, 1932, p.31
[39] もっとも、数の表象は空間的並置に依存するため、ベルクソンは諸状態の質的な多数性 multiplicité qualitative を「複数の plusieurs」と表現することに、自ら満足していたわけではない。Cf. DI, 91「我々は複数の意識状態が相互に有機化し、浸透

し合うと述べたが…〔中略〕…しかし、《複数の plusieurs》という言葉を用いたために、すでにこれらの状態を相互に孤立化させ、外在化させ、要するに並置してしまったのである。我々はこうして、我々が援用せずにはいられなかった表現そのものによって、はからずも、時間を空間に展開するという根深い習慣を露呈していたのである」けれども、明らかに、こうした叙述は、空間的外在性とは異なる質的な区別を持った諸部分の存在を否定するものではない。

[40] ベルクソンの総合 synthèse とカントの綜合 Synthesis の関係、特に、ベルクソンの総合が持続に内在する「生ける統一」であり、統一される諸状態に対して外的に行われる超越的な操作ではない点については杉山直樹『内在と時間性―「持続」概念の再検討に向けて』徳島大学総合科学部人間社会文化研究 1998, pp.61-94 を参照。

[41] たとえばドゥルーズは「それ自体で存在するような過去が我々にとってどのように保証されうるかについて本質的な疑問を提起しない」ベルクソンと異なり、プルーストは「我々が思い出さない記憶とは何か」という問いを提出したと指摘する。その上でドゥルーズはマドレーヌの味がコンブレーを想起させるような「無意志的な記憶のはたらき」によって過去のそれ自体での存在が保証されるとみるのであるが、この点に関し中は、ベルクソンのテキストに即して考えるならば過去の即自的存在はむしろ「性格」に求められることを指摘している。Cf. G. Deleuze, *Proust et les signes*, PUF, 1964, p.73-4 / 中敬夫『自然の現象学』世界思想社 2004, p.155

[42] 石井は記憶の円錐の底面 AB におかれる「純粋記憶」が単数形でも複数形でも用いられることを指摘した上で、「「純粋記憶」という言葉は、「蓄積された記憶の全体」を文字通り一つの「全体」としてとらえる観点を表すのにふさわしい用語であり、「純粋記憶力」としての「精神」は、「持続のあらゆる瞬間に」、「どんな些細なことも漏らさないで、一つ一つの事実や動作」を蓄積し続ける」、個別の諸記憶の保存に関わる「自発的な記憶力」を意味する語であると指摘している。Cf.石井敏夫『ベルクソンの記憶力理論』理想社 2001, P.151, 188, 202

[43] M. Merleau-Ponty, *Phenomenologie de la perception*, Gallimard, Paris, 1945, p.481

[44] G. Bachelard, *L'intuition de l'instant,* Paris, Stock, 1932, p.31

[45] ベルクソンにおいては、一定の時間的な幅を持つ「持続における諸瞬間」を指す場合には多く moment が使われ、数学的な極限としての「瞬間」の意味では instant が主に使われているが、例外も見られ、厳密な区別ではない。

[46] おそらくこのエクスナーの算出した数値の引用典拠は 1890 年に出版された W. James の *The Principles of Psychology* であろう。ジェイムズはこの著作でエクスナーの実験を紹介するとともに、現在という瞬間が持つ時間的な厚みについて、E. R. クレイの「見かけの現在 specious present」という概念に言及している。Cf. W. James, *The Principles of Psychology I ,* New York, Dover, 1950, Ch.XV

[47] たとえばすでに 1933 年にユクスキュルは映画の一コマの最適な時間間隔を根拠にして「瞬間の連続である時間は、同じタイム・スパン内に主体が体験する瞬間の数に応じて、それぞれの環世界（Umwelt）ごとに異なっている。瞬間は、分割できない最小の器である。…〔中略〕…人間にとって一瞬の長さは十八分の一秒である。しかも、…〔中略〕…どの感覚領域でも瞬間は同じである」としている。Cf. J. v. Uexküll, *Streifzüge durch die Umwelten von Tieren und Menschen,* Frankfurt am Mein, S.Fischer, 1970（ユクスキュル、クリサート『生物から見た世界』日高敏隆・羽田節子訳、岩波文庫 2005）

[48] 無論、感覚的性質は不動の点とは言っても無数の物質の振動を内包しており、そ

の意味で「表面は不動だが、その内奥は生きて振動している蛹」(MM, 229)にもたとえられる。
[49] J.P. Sartre, *L'être et le néant*, Gallimard, 1943, p.206
[50] たとえば、Čapek は持続の理論を擁護する立場から、こうした過去の諸瞬間が異質性を保って現在と連続している点を強調している。M. Čapek, *Bergson and modern physics*, Reidel, 1971, p.159
[51] 現在の意識には原則として到達不可能なこの過去の生について、ベルクソンは、いわゆるパノラマ現象に触れ、溺れたり首を吊ったりといった瀕死の状況に陥って現在の外界への関心が遊離した場合に、例外的に、過去の無数の出来事がそのまま再現されることがあると述べている。Cf. PM, 170

第四章
[52] A. Schutz, *The problem of social reality*, Nijhoff, 1973, pp.68-69
[53] Cf. EC, 341 また「発明」の意味については以下の『思想と動くもの』の叙述を参照「発見 découverte というのは現実的にせよ潜在的にせよすでに存在しているものの上にもたらされる…〔中略〕…しかし発明 invention はそれまでなかったものに存在を与える」(PM, 52)
[54] Cf. MM, 94「過去は二つの極端な形で保存されていると思われる。一つは…〔中略〕…(身体の)運動メカニズムとして。もう一つは、過去の出来事を、その輪郭も、色合いも、時間の中における位置づけも全て描いている、個人的な記憶イマージュとして。全く自発的にはたらく第二の記憶力は、保存が忠実である分だけ、再生は気まぐれである」
[55] 過去の決定性については、そのほか、『持続と同時性』の中でも「事物の漸進的な発生が確認された時間に沿って、そこには一つの、はっきり決定された、発生の仕方 mode が存在した」(DES, 156)のように述べられている。
[56] 無論、「選択のためには可能な行動が予め描かれていなければならない」という観点からは、この「生命に内在する力」による生物進化の選択は、あくまでも意識的な選択に満たない「選択の兆し」(EC, 97)にすぎない。
[57] Roger-E. Lacombe, *La psychologie bergsonienne, étude critique*, Félix Alcan, 1933, p.238

第五章
[58] この場合、直線 AB は私の知覚と同時に在る実在の事物を全て含むものとして描かれているのであり、知覚外の領域に対する無意識的な予測として描かれているのではない。
[59] ただしベルクソンが「具体的な現在」(MM, 167)ないし「具体的な知覚」(MM, 203)という場合には、いくつかの純粋知覚が収縮されてより明瞭な意識となったものを指すため、その場合の「現在」の時間的な厚みはより長いものになるであろう。けれども、複数の純粋知覚においては事物の状態も複数存在するため、本論中で述べるようにベルクソンの理論における「現在」という瞬間の限定性が、事物の物理的状態の限定性と同一視される以上、本来的な現在の瞬間としては単一の純粋知覚の厚みを考えるべきであろう。いずれにせよ、直線 AB が具体的な現在としての時間的な厚みを持つとしても、そうした現在における物質がすでに身体との関係で分割されている

点には変わりがない。
[60] 直線 AB は、知覚 I の外にあるという点で潜在的 virtuel であるが、しかし知覚 I と同時に存在する諸事物という点では現勢的 actuel であることになる。このような virtuel かつ actuel な物質の分割に関し、ベルクソンは『試論』で、「分割されていないものの内に下位の分割を、単に virtuel にではなく actuel に知覚することこそ、まさに我々が客観性と呼ぶものなのだ」(DI, 63)と述べ、むしろそうした両義性を客観性の証と定義している。それゆえ、virtuel と actuel は矛盾概念ではなく、そのように両立することの可能な相対的な指標としてとらえておくべきだろう。
[61] 中島は 1909 年のフランス哲学会でベルクソンが「無意識」を「現在は意識的ではないが、条件次第では意識的となりうるもの」と定義したことに言及して、知覚が「未だ実現されざる新たな知覚」を「無意識的なもの」としてすでに含有している可能性を示唆している。ベルクソンにおける無意識が「未だ実現されざる」領域を含むという示唆は有益であるが、こうした領域は、純粋記憶が現在に含まれないのと同様に、現在の同時平面上には含まれない点が明らかにされるべきであったと思われる。中島盛夫「ベルクソンにおける『無意識』の問題」白山哲学№9, 1973, pp.49-69
[62] 文中で現実化と訳したのは réalisation である。文脈に合わせて実現とも訳した。また actualisation は現勢化とした。
[63] ヴィクター・ローはこの点に関し、possible なものが réel であることを否定するベルクソンと異なり、ホワイトヘッドにおいては創造性が潜在的なものの現実化として捉えられていることを指摘している。V. Lowe, *Understanding Whitehead,* Jhons Hopkins Press, Baltimore, 1962, p.261
[64] ジャン-ルイ・シェダンはこの点に関し、可能性とその現実化の間に連続的な同一性を認めるライプニッツのような見解とその同一性を認めないベルクソンの見解の相違を指摘している。Jean- Louis Chédin, *Possibilité et liberté dans l'Essai /BERGSON naissance d'une philosophie*, PUF, 1989, p.87
[65] Cf. G. Deleuze, *Le Bergsonisme*, PUF, 1966, p. 99, 100
[66] V. Jankélévitch, *Henri Bergson*, PUF, 1959, pp.216-218
[67] V. Jankélévitch, *Henri Bergson*, PUF, 1959, p.31 またベルクソンは『思想と動くもの』の注で『持続と同時性』の議論に言及し、そこでも「実在 réalité」という語を「経験のうちに与えられているもの、もしくは与えられうるもの」と定義している。Cf. PM, 37

第六章
[68] ここで、この「共感 sympathie」について定義が必要であろう。『試論』はこの概念に関し、優美な動きの例を挙げている。「優美 grâce の感情には一種の身体的共感 sympathie physique が入ってくる。そして、この共感の魅力を分析すれば、それが精神的共感 sympathie morale とつながっているせいで我々に好まれるのが分かるだろう」(DI, 10)また、『創造的進化』は以下のように述べている。「芸術家は一種の共感によって対象の内部に身を置き直し、自分と対象の間に空間が作った障壁を直観の努力によって引き下げる。…〔中略〕…直観はまた我々とほかの生命との間に共感によるコミュニケーションを成り立たせ、我々の意識を拡張するので、我々は生命固有の領域に、相互浸入が行われ、無限に創造の続けられるあたりに導かれることになるだろう」(EC, 178-179)こうした叙述に従い、ここでは「共感」を、物理的な形態や運動の知覚を介して対象の精神と合致することと定義し、その共感を知性的な認識にまで

持ちきたることを直観と定義しておく。
[69] J. Chevalier, *Entretiens avec Bergson,* Plon, 1959, p.150
[70] ベルクソンは「善」の概念の定義のような問題を重視せず、そうした概念は社会を保持するための圧力や生命の原理を体現するものの持つ牽引力に対して事後的に貼ったレッテルに過ぎないととらえる。Cf. MR, 88-89
[71] この点に関し、『精神のエネルギー』に収められた 1911 年の論文、『意識と生命』ではすでに次のように述べられている。「自然は、正確なしるしによって我々の目標が達せられたことを知らせます。このしるしとは、喜び joie です。私は喜びと言い、快楽 plaisir とは言いません。快楽は、生命体が生命を維持するために自然が編み出した仕組みにすぎません。快楽は、生命が進む方向を示してはいません。しかし喜びは、生命が成功したことを常に告げています」(ES, 23)

参考文献

Una Bernard Sait, A. M. *The ethical implications of Bergson's Philosophy*, Columbia Univ. Press, 1914

Höffding, Harald. *La philosophie de Bergson,* Félix Alcan, 1916.

Thibaudet, Albert. *Le bergsonisme I , II*, NRF, 1923.

Chevalier, Jacques. *Bergson*, Plon, 1926.

Bachelard, Gaston. *L'intuition de l'instant*, Stock, Paris, 1932

Lacombe, Roger-E. *La psychologie bergsonienne, étude critique*, Félix Alcan, 1933.

Rolland, E. *La finalité morale dans le bergsonisme,* Gbriel Beauchesne et son fils, 1936.

Mead, G. H. *Movements of Thought on the Nineteenth Century,* University of Chicago Press, 1936

Fénart, M. *Les assertions Bergsoniennnes,* J.Vrin,1936

Sertillanges, A. D. *Avec Henri Bergson*, Gallimard, 1941.

Sartre, J. P. *L'être et le néant I* ,Gallimard,Paris,1943

Merleau-Ponty, Maurice. *Phénoménologie de la perception,* Gallimard, Paris,1945

Hyppolite, Jean. *Figures de la pensée philosophique I* , PUF, 1949.

James, William. *The Principles of Psychology I ,* New York, Dover, 1950

Rose-Marie Mossé-Bastide. *Bergson éducateur,* PUF, 1955.

Chevalier, Jacques. *Entretiens avec Bergson,* Plon, 1959.

Jankélévitch, Vladimir. *Henri Bergson*, PUF, 1959.

Merleau-Ponty, Maurice. *Eloge de la philosophie,* Gallimard, Paris 1960
Gouhier, Henri. *Bergson et le Christ des évangiles*, Fayard, 1961.
Lowe, Victor. *Understanding Whitehead*, Jhons Hopkins Press, Baltimore, 1962
Mourélos, Georges. *Bergson et les niveaux de réalité*, PUF, 1964.
Deleuze, Gilles. *Proust et les signes*, PUF, 1964
Deleuze, Gilles. *Le Bergsonisme*, PUF, 1966.
Merleau-Ponty, M. *L'union de l'ame et de corps chez Malebranche, Biran et Bergson*, Vrin, 1968.
Čapek, Milič. *Bergson and modern physics*, Reidel, 1971.
Schutz, Alfred. *The problem of social reality*, Nijhoff, 1973
Gilson, Bernard. *L'individualité dans la philosophie de Bergson*, J.Vrin, 1978.
Jankélévitch, Vladimir. *La volonté de vouloir*, Seuil, 1980
W. James, The Works of William James, Essays in Psychology *'The feeling of effort'* Harvard University Press, 1983
Deleuze, Gilles. *Cinema 1 L'image-mouvement*, Édition de Minuit, Paris, 1983
Deleuze, Gilles. *Cinema 2 L'image-temps*, Édition de Minuit, Paris, 1985
Andrew C. Papanicolaou, Pete A.Y. Gunter. ed. *Bergson and modern thought : towards a unified science,* Harwood Academic Publishers, New York, 1987
Deleuze, Gilles. *Le Plit* , Édition de Minuit, Paris, 1988
Hude, Henri. *Bergson I , II,* Editions Universitaires, 1989, 1990.
Gouhier, Henri. *Bergson dans l'histoire de la pensée occidentale,* Vrin, 1989.
Lacey, Alan Robert. *Bergson*, Routledge, 1989.
Bergson Naissance d'une philosophie, Actes du colloque de Clermont-ferrand, 17 et 18 novembre 1989, PUF, 1990.
de Lattre, Alain. *Bergson, une ontologie de la perplexité*, PUF, 1990.
Cariou, Marie. *Lectures bergsoniennes*, PUF, 1990.
Vieillard-Baron. Jean-Louis, *Bergson,* PUF, 1991.
Gilson, Bernard. *La révision bergsonniennne de la philosophie de l'esprit,* J.Vrin,1992.
Philonenko, Alexis. *Bergson ou de la philosophie comme science rigoureuse*,

Le Cerf, 1994.

Moore, F.C.T. *Bergson, thinking backwards,* Cambridge, 1996.

Soulez, Phillippeet et Worms, Frédéric. *Bergson, Biographie*, Flammarion, 1997.

Worms, Frédéric. *Introduction à Matière et mémoire de Bergson*, PUF, 1997.

Mullarkey, Jhon. *Bergson and Philosophy,* Edinburgh, 1999.

Vieillard-Baron, Jean-Louis. *Bergson, et le bergsonisme,* Armand Colin, 1999.

中田光雄『ベルクソン哲学』東京大学出版会 1977
石井敏夫『ベルクソンの記憶力理論』理想社 2001
中敬夫『自然の現象学』世界思想社 2004
ユクスキュル、クリサート『生物から見た世界』日高敏隆・羽田節子訳、岩波文庫 2005